鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(56)

── 九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ ──

MAEHATA

前畑遺跡

2003年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

1号掘立柱建物跡

序　文

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は，西鹿児島駅緊急整備事業に伴う調査として平成５年に開始しましたが，諸般の事情で中断をし，平成８年度から再開しました。

建設計画地内の遺跡は鹿児島市から出水市まで21か所であり，関係機関との協議により，事前の記録保存調査を実施し，平成13年５月に全ての調査が終了しました。

本報告書は21か所の遺跡のうち川内市に所在する前畑遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。

前畑遺跡は旧石器時代，縄文時代，古代～中世，近世の複合遺跡です。縄文時代の遺構として底面にクイの施設のある陥し穴が検出された他，多くの土坑も見つかっています。また，近世では大型の掘立柱建物跡が10棟検出されました。

前畑遺跡に居住した人々の旧石器時代から近世までの多くの遺物は，当時の生活を偲ばせます。ここにその調査成果をまとめました。本報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただく一助となれば幸いです。

発刊にあたり，日本鉄道建設公団九州新幹線建設局をはじめ，ご協力をいただいた川内市の関係部局，関係諸機関，そして，調査に参加された方々に対し，厚くお礼を申し上げます。

平成15年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井　上　明　文

報告書抄録

ふりがな	まえはたいせき
書名	前畑遺跡
副書名	九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	V
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	56
編集者名	宮田栄二　平木場秀男
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899−4461　国分市上之段1175−1　TEL0995−48−5811
発行年月日	2003年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
まえはたいせき 前畑遺跡	かごしまけん 鹿児島県 せんだいし 川内市	462021	6−10−0	31° 53′ 15″	130° 17′ 35″	19971101〜 19980331 19980506〜 19981224 19991213〜 20000224	12,000	九州新幹線鹿児島ルート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記
前畑遺跡		旧石器時代		ナイフ形石器，三稜尖頭器 台形石器，細石刃，細石刃核	
		縄文時代 （早期） （前期）	集石，陥し穴 土坑，竪穴状遺構	石坂式土器，中原式土器， 塞ノ神式土器，轟式土器， 石鏃，磨製石斧，スクレイパー，磨石，敲石，石皿	
		古代		土師器，須恵器	
		中世	列状石列 五輪塔をもつ配石遺構	土師器，刀子 青磁，白磁，染付 擂鉢，樺万丈窯	
		近世	掘立柱建物跡 溝状遺構 井戸状遺構 池状遺構 小ピット群	苗代川焼（塊，皿，擂鉢， 捏鉢，土瓶） 肥前焼，天目塊，焙烙	

前畑遺跡の位置

例　言

1．本報告書は，九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う川内地区の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は鹿児島県川内市城上町に所在し，県遺跡台帳の川内市６－10－０に該当する。
3．発掘調査は，日本鉄道公団九州新幹線建設局からの受託事業として鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4．発掘調査は，平成９年度から平成11年度にかけて実施し，整理作業は平成14年度に実施した。
5．本書の遺物番号は全て通し番号であり，本文，挿図，図版と一致する。
6．出土した石器の実測・トレースの一部は㈱九州文化財研究所に委託した。
7．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜高である。
8．本書で使用した方位は，すべて磁北である。
9．現地調査に関する実測及び写真撮影は，それぞれ各調査年度の調査担当者で行ったが，一部の実測については㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
10．土器の実測・トレース，遺構図の製図・トレース等は，宮田栄二，平木場秀男が中心となり，新中泰代，新徳より子，橋口恵，本多直子，牧野田洋子，宮坂多美子，宮原紀代，小倉ひろ子，永田朋子，花田直美が行った。
11．近世陶磁器については，加治木町教育委員会関一之氏の指導をいただいた。
12．本書の執筆分担は，第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章と第Ⅴ章１・３節を宮田栄二が，第Ⅵ章と第Ⅴ章２節を平木場秀男が行った。
13．本書に掲載した遺物写真の撮影は鶴田静彦，福永修一，横手浩二郎が行った。
14．本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，宮田栄二，平木場秀男が担当した。

目　次

第Ⅰ章　調査の経過……1
第1節 調査に至るまでの経過……1
第2節 調査の組織……1
第3節 調査の概要と調査経過……3
第4節 九州新幹線鹿児島ルート関連調査の概要……4
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境……7
第1節 遺跡の位置と立地……7
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境……7
第Ⅲ章　丘陵部（瀬戸口）の調査成果……13
第1節 発掘調査の方法と概要……13
第2節 遺跡丘陵部の層位……14
第3節 旧石器時代の遺物……17
第4節 縄文時代の検出遺構……22
1．集石……22
2．陥し穴……22
第5節 縄文時代の土器……34
第6節 縄文時代の石器……48
第7節 平安時代の遺物……66
第Ⅳ章　低地部（前畑）の調査成果……67
第1節 発掘調査の方法と概要……67
第2節 遺跡低地部の層位……68
第3節 縄文時代の遺物……71
第4節 古代～中世の遺構と遺物……75
1．中世の検出遺構……75
2．古代～中世の出土遺物……78
第5節 近世の検出遺構……90
1．掘立柱建物跡……90
2．溝状遺構ほか……106
第6節 近世の遺物……114
第Ⅴ章　調査のまとめ……122
第1節 丘陵部……122
第2節 低地部……124
第3節 鹿児島の陥し穴遺構について……126

挿図目次

第１図　前畑遺跡丘陵部及び低地部の周辺地形図……8
第２図　前畑遺跡と周辺地形……9
第３図　周辺の遺跡……11
第４図　丘陵部（瀬戸口）グリッド配置図……13
第５図　丘陵部の基本土層柱状模式図‥14
第６図　丘陵部の各地点の土層……14
第７図　丘陵部の土層断面図……15
第８図　旧石器時代の遺物１（ナイフ型石器文化）……18
第９図　旧石器時代の遺物出土分布‥‥19
第10図　旧石器時代の遺物２（細石刃）……19
第11図　旧石器時代の遺物３（細石刃文化）……20
第12図　縄文時代の遺構分布図……23
第13図　縄文時代の遺構１（集石）……24
第14図　縄文時代の遺構２（集石・陥し穴）……26
第15図　縄文時代の遺構３（土坑１）‥28
第16図　縄文時代の遺構４（土坑２）‥29
第17図　縄文時代の遺構５（土坑３）‥31
第18図　縄文時代の遺構６（竪穴状遺構）……32
第19図　石斧集積遺構……33
第20図　縄文時代の土器（１・２類土器出土分布）‥‥35
第21図　縄文時代の土器（３～８類土器出土分布）‥36
第22図　縄文時代の土器（９～14類土器出土分布）‥37
第23図　縄文時代の土器１（１類１）‥39
第24図　縄文時代の土器２（１類２）‥40
第25図　縄文時代の土器３（２類）……41
第26図　縄文時代の土器４（３～５類）‥42
第27図　縄文時代の土器５（６～13類）……44
第28図　縄文時代の土器６（14類）……45
第29図　縄文時代の石器１……50
第30図　縄文時代の石器２……51
第31図　縄文時代の石器３……53
第32図　縄文時代の石器４……55
第33図　縄文時代の石器５……57
第34図　縄文時代の石器６……58
第35図　縄文時代の石器７……59
第36図　縄文時代の石器８……60
第37図　縄文時代の石器９……61
第38図　縄文時代の石器10……62
第39図　縄文時代の石器出土分布……63
第40図　平安時代の遺物及び近世の古銭……66
第41図　低地部（前畑）のグリッド配置図……67
第42図　低地部の基本土層柱状模式図……68
第43図　低地部の各地点の土層……68
第44図　低地部の土層断面図……69
第45図　縄文の遺物出土分布（低地部）……71
第46図　低地部の出土遺物１（縄文１）……73
第47図　低地部の出土遺物２（縄文２）……74
第48図　五輪塔（地輪）……75
第49図　低地部の遺構配置図……76
第50図　五輪塔（地輪）を持つ配石遺構列状石列　平・断面図……77
第51図　低地部の出土遺物３（古代～中世１　土師器）‥‥80

第52図　低地部の出土遺物４
（古代～中世２　土師器，擂鉢）
……81
第53図　低地部の出土遺物５
（古代～中世３　須恵器）…84
第54図　低地部の出土遺物６
（古代～中世４　須恵器，青磁，
白磁，染付）……85
第55図　古代の遺物出土分布 ……86
第56図　中世の遺物出土分布……87
第57図　近世の遺構配置図……91
第58図　１号掘立柱建物跡……92
第59図　２号掘立柱建物跡……93
第60図　３号掘立柱建物跡……95
第61図　４号掘立柱建物跡 ……96
第62図　５号掘立柱建物跡……97
第63図　低地部の出土遺物７
（掘立柱建物跡）……98
第64図　６号掘立柱建物跡……100
第65図　７号掘立柱建物跡……101
第66図　８号掘立柱建物跡……102
第67図　９,10号掘立柱建物跡 ……103
第68図　溝状遺構１～５　平・断面図·107
第69図　低地部の出土遺物８（溝１－①）
……108
第70図　低地部の出土遺物９（溝１－②）
……109
第71図　低地部の出土遺物10（溝５）
……111
第72図　低地部の出土遺物11
（池状遺構）……112
第73図　井戸状遺構，池状遺構とその
出土遺物……113
第74図　小ピット群配置図……115
第75図　低地部の出土遺物12（その他①）
……118
第76図　低地部の出土遺物13（その他②）
……119
第77図　低地部の出土遺物14
（土錘,滑石製石鍋片,古銭）…121
第78図　掘立柱建物跡の主軸と時期 …125
第79図　鹿児島県の陥し穴の変遷 ……129

表目次

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（1）……4
第２表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（2）……5
第３表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（3）……6
第４表　周辺の遺跡一覧表……12
第５表　旧石器時代石器計測表……21
第６表　陥し穴状遺構計測表……33
第７表　土坑計測表……33
第８表　縄文土器観察表（1）……45
第９表　縄文土器観察表（2）……46
第10表　縄文土器観察表（3）……47
第11表　縄文時代の石器組成と石材……48
第12表　縄文時代石器計測表（1）……64
第13表　縄文時代石器計測表（2）……65
第14表　低地部の遺物観察表１（縄文）……74
第15表　縄文時代石器計測表（3）……74
第16表　低地部の遺物観察表２（古代～中世１）……88
第17表　低地部の遺物観察表３（古代～中世２）……89
第18表　掘立柱建物跡計測表１（１号～５号）……104
第19表　掘立柱建物跡計測表２（６号～10号）……105
第20表　小ピット群計測表……116
第21表　低地部の遺物観察表３（近世）……120
第22表　低地部の遺物観察表４（その他）……121
第23表　鹿児島県の陥し穴地名表……128

図版目次

図版1　上　丘陵部の調査風景 ……131
　　下　丘陵部（瀬戸口）の土層
図版2　丘陵部の調査風景 ……132
図版3　上　旧石器時代の石器 ……133
　　下　調査状況
図版4　上　土坑検出状況 ……134
　　下　縄文時代の遺物出土状況
図版5　集石1～4号 ……135
　　上　1号集石
　　下　2号集石，3号集石，4号集石
図版6　1号陥し穴 ……136
　　上　検出状況
　　下　底面ピットの断ち切り
図版7　2号陥し穴状遺構 ……137
　　上　検出状況
　　下　底面断ち切り
図版8　3号陥し穴状遺構 ……138
　　上　検出状況
　　下　底面断ち切り
図版9　上　2号土坑 ……139
　　中　3号土坑
　　下　5号土坑
図版10　上　7号土坑 ……140
　　中　8号土坑
　　下　9号土坑
図版11　上　11号土坑 ……141
　　中　15号土坑
　　下　22号土坑
図版12　上　24号土坑 ……142
　　下　25号土坑
図版13　上　27号土坑 ……143
　　中　28号土坑
　　下　29号土坑
図版14　上　31号土坑 ……144
　　下　32号土坑
図版15　竪穴状遺構 ……145
　　上　竪穴状遺構検出状況
　　下　竪穴状遺構完掘
図版16　上　石斧集積遺構（検出面）……146
　　下　石斧集積遺構（内部）
図版17　縄文時代土器1 ……147
図版18　縄文時代土器2 ……148
図版19　縄文時代土器3 ……149
図版20　縄文時代土器4 ……150
図版21　縄文時代の石器1 …… 151
図版22　縄文時代の石器2 ……152
図版23　縄文時代の石器3 ……153
図版24　縄文時代の石器4 ……154
図版25　縄文時代の石器5 ……155
図版26　縄文時代の石器6 ……156
図版27　縄文時代の石器7 ……157
図版28　上　土師器・刀子出土状況 ……158
　　下　土師器・刀子
図版29　上　低地部（前畑）の調査前風景 ‥159
　　下　低地部の古代～中世
　　遺物出土状況
図版30　上　確認調査（10年度）の調査風景 160
　　下　全面調査（11年度）の調査風景
図版31　上　低地部の土層E・F－27区 ……161
　　下　低地部の土層D－25・26区
図版32　低地部の縄文時代の遺物 ……162
図版33　上　五輪塔と基礎部分 ……163
　　下　石列状遺構（奥の部分）
図版34　上　五輪塔の地輪 ……164
　　下　五輪塔の地輪（裏）
図版35　古代～中世の遺物1 ……165
図版36　古代～中世の遺物2 ……166
図版37　古代～中世の遺物3 ……167
図版38　上　遺構検出状況（北から）……168
　　下　近世遺構全景（西から）

図版39　1号掘立柱建物跡 ……169
図版40　上　1号掘立柱建物跡ピット4 ……170
　　中　1号掘立柱建物跡ピット5
　　下　1号掘立柱建物跡ピット6
図版41　上　2号掘立柱建物跡 ……171
　　下　3号掘立柱建物跡
図版42　上　4号掘立柱建物跡 ……172
　　下　4号掘立柱建物跡ピット1
　　4号掘立柱建物跡ピット2
　　4号掘立柱建物跡ピット3
図版43　5号掘立柱建物跡 ……173
図版44　上　5号掘立柱建物跡ピット6 ……174
　　中　5号掘立柱建物跡ピット7
　　下　5号掘立柱建物跡ピット8
図版45　上　1～3号掘立柱建物跡 ……175
　　下　4・5号掘立柱建物跡
図版46　上　6号掘立柱建物跡 ……176
　　下　6・7号掘立柱建物跡
図版47　上　溝状遺構1 ……177
　　下　溝状遺構2
図版48　上　溝状遺構3 ……178
　　下　溝状遺構4
図版49　上　溝状遺構5遺物出土状況 ……179
　　下　溝状遺構5
図版50　上　井戸状遺構 ……180
　　下　池状遺構
図版51　近世の遺物1 ……181
　　（掘立柱建物跡，池状遺構）
図版52　近世の遺物2（溝状遺構1） ……182
図版53　近世の遺物3（溝状遺構1） ……183
図版54　近世の遺物4（溝状遺構5，その他）
　　……184
図版55　上　近世の遺物5 ……185
　　下　土錘，滑石，古銭

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は，九州新幹線鹿児島ルート建設を計画し，事業予定区内の埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育委員会文化課（当時，平成8年4月以降文化財課）に照会した。それを受けて文化課は，平成4年12月に事業予定地内の分布調査を実施し，21か所の遺跡を確認した。

また，西鹿児島駅舎の予定地に所在する武遺跡については，協議の結果新幹線鉄道駅緊急整備事業として遺跡の確認と全面調査が進められた。

その後，分布調査の結果に基づいて日本鉄道建設公団九州新幹線建設局，県教育庁文化財課，県立埋蔵文化財センターの三者でそれらの遺跡の取扱いについて協議し，平成8年度から用地取得等条件の整った遺跡から確認調査を実施することとなった。

平成8年度は，出水市鳥越平遺跡及び川内市大原野遺跡の確認調査を行い，平成9年度は，大原野遺跡の全面調査と川内市前畑遺跡の確認及び一部全面調査を実施した。

平成10年度は，前畑遺跡の全面調査の継続と他12か所の遺跡について確認及び全面調査を実施した。

平成11年度に計志加里・原田・大島・薩摩国分寺下（京田）・鍛冶屋馬場・春田遺跡の確認調査と同時に前畑遺跡の残存部の全面調査を実施した。

前畑遺跡の整理及び報告書作成作業は平成14年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

第2節　調査の組織

【平成9年度（確認・全面調査）】

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉元　正幸
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
調査担当者	〃	文化財主事	長野　眞一
	〃	文化財主事（7月まで）	国生　誠
	〃	文化財調査員（8月から）	上床　真
調査事務担当	〃	主査	前屋敷裕徳
	〃	主査	政倉　孝弘
	〃	主事	追立ひとみ

【平成10年度（全面調査）】

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	尾崎　進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
調査担当者	〃	主任文化財主事	彌榮　久志
	〃	文化財主事	前田　誠
調査事務担当	〃	主査	前屋敷裕徳
	〃	主査	政倉　孝弘
	〃	主事	溜池　佳子

【平成11年度（全面調査）】

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	吉永　和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木　友幸
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎　勝洋
	〃	課長補佐兼第一調査係長	新東　晃一
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	立神　次郎
	〃	主任文化財主事	彌榮　久志
調査担当者	〃	文化財主事	宮田　栄二
	〃	文化財主事	平木場秀男
調査事務担当	〃	総務係長	有村　貢
	〃	主査	今村孝一郎
	〃	主事	溜池　佳子

【平成14年度（整理・報告書作成）】

調査主体者	鹿児島県教育委員会		
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所長	井上　明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	田中　文雄
	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東　晃一
	〃	調査課長補佐	立神　次郎
	〃	主任文化財主事兼第二調査係長	彌榮　久志

調査企画者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	主任文化財主事	長野　眞一
整理担当者	〃	文化財主事	宮田　栄二
	〃	文化財主事	平木場秀男
調査事務担当	〃	総務係長	前田　昭信
	〃	主査	脇田　清幸
	〃	主事	池　珠美
整理指導者	加治木町教育委員会	文化財係長	関　一之

第3節　調査の概要と調査経過

1．確認調査

前畑遺跡の調査対象地域は，山林である丘陵部と畑地の低地部からなり，合計12.000㎡が対象であったが，低地部の5000㎡は用地獲得が終了せず，そのため丘陵部のみの対象となった。

調査は，まず新幹線建設の中央線を基準として10m単位のグリッド設定を行い，西から東へA，B，C…，南から北へ1，2，3…とし，各グリッドはA－1区というように呼称した。

確認トレンチは2m×4mを基準として計7ヶ所設定して調査を行った。その結果，全てのトレンチにおいて遺物の出土が認められ，遺跡であることが明らかとなった。

遺跡であることが確認されたことにより，引き続き全面調査に切り替えた。

2．全面調査

平成9年度は確認調査から引き続き，南側から全面調査を実施した。地目が山林であったため，杉山伐採，根を除去するなど困難な作業であった。

調査の結果，縄文時代早期を中心とする土器，石器が多く出土した。西北九州の黒曜石も出土し注目された。また遺構として，陥し穴や多くの土坑が検出された。

平成10年度も引き続き丘陵部の調査を実施し，多くの土坑のほか，竪穴状遺構，集石遺構などを検出し，丘陵部の調査を終えた。

その後，用地買収が終了した低地部に移り，先ず数ヶ所の確認トレンチの調査を行い，各トレンチにおいて遺物の出土が認められたことにより全面調査に切り替えた。低地部のグリッドは丘陵部のグリッドからの延長とした。そのため調査区域は19区から29区までとなった。

ただし，26区から北側部分については，用地取得及び民家の移転が行われず，次年度の調査とすることになった。

調査の結果，古代から中世に到る時期の土師器・須恵器などの遺物が出土し，遺構では石組み遺構などが検出された。

平成11年度は低地部の住宅部分約2,000㎡について，移転終了を待ち，大島遺跡の調査と併行して12月13日から2月24日まで調査を実施した。

調査の結果，中世から近世までの時期の青磁・白磁・薩摩焼などの遺物と，遺構では大型の掘立柱建物跡，溝状遺構，井戸状遺構などを検出した。

第４節　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財調査の概要

九州新幹線鹿児島ルートの発掘調査は，平成５年５月12日より鹿児島市武遺跡から開始し，平成13年５月30日川内市京田遺跡で全てを終了した。

九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う発掘調査は，一覧表のとおりである。

第１表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（1）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面	調査員	時代	主な遺構・遺物
1	茶屋ノ元	出水市境町	H10.7.2～3 H11.3.2～4 計5日間	240㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期 縄文前期	塞ノ神式，轟式，磨製石斧，黒曜石
2	鳥越平	出水市境町	H8.8.5 計1日間	55㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
3	鐙・安原	出水市安原町	H11.2.17・18 H11.2.24・25 H11.3.9 計5日間	60㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文晩期 平安時代	研磨土器，黒曜石，土師器
4	榎木田 見入来 大坪	出水市美原町	H11.1.5～3.9 H11.5.6 ～H12.3.31 H12.5.1 ～H13.3.27 計420日間	27,247㎡	彌榮久志 前田　誠 清崎一富 東　和幸 高岡和也 上床　真 森田裕之	縄文晩期 平安時代 鎌倉時代	縄文晩期埋設土器38基，平安期竜付竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡9棟，焼土遺構3基，溝状遺構30条，波板状遺構27条，上加世田式，入佐式，黒川式，土師器，須恵器，玉縁白磁滑石製石鍋，刻書土器，鉄製品，石鏃，磨製石斧，打製土掘り具，石匙，石皿，磨石，凹石，異形石器，玉類（勾玉6，管玉25，丸玉5，平玉3，垂飾品1，剥片46，未製品30）
5	宮野脇	出水市上鯖淵	H11.2.19 H12.2.20 計2日間	48㎡	彌榮久志 前田　誠 東　和幸	時期不明	包含層は確認されず。
6	松ヶ迫	出水市武本	H8.8.6 計1日間	12.5㎡	池畑耕一 中原一成	時期不明	包含層は確認されず。
7	小松	出水市武本	H10.7.8～10 計3日間	108㎡	彌榮久志 前田　誠	縄文早期	土器，黒曜石
8	前畑	川内市城上町	H9.11.1 ～H10.3.31 H10.5.6 ～H10.12.24 H11.12.13 ～H12.2.24 計195日間	11,800㎡	長野眞一 上床　真 彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男	旧石器時代 縄文早期 縄文前期 縄文後期 中世 近世	土坑（陥し穴含）25基，集石4基，竪穴状遺構1基，五輪塔，大型掘立柱建物跡10棟，ナイフ形石器，細石刃核，古田式，石坂式，轟式，石鏃，石斧，石皿，磨石，敲石，土師器，青磁，白磁，染付，薩摩焼

第2表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（2）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面	調査員	時代	主な遺構・遺物
9	計志加里	川内市中郷町	H11.7.1～8.27 H12.5.23 ～H13.3.26 計218日間	5,900㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文早期 縄文後期 縄文晩期 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡5棟，土坑墓3基，円形周溝状遺構1基，土坑5基，中世掘立柱建物跡2棟，古道，溝状遺構，早期押型文土器，曽畑土器，磨製石鏃，打製石斧，錐，ピエス，スクレイパー，磨石，石皿，石匙，石鏃，砥石，土師器，須恵器，瓦，青磁，白磁，滑石製品，刀子，青銅製品，紡錘車
10	京田 （薩摩国分寺下）	川内市中郷町	H11.6.1～20 H12.5.8～6.6 H12.9.4 ～H13.3.24 H13.4.9～5.31 計191日間	5,900㎡	宮田栄二 上之園健二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃 樋渡将太郎	弥生中期 平安時代 中世 近世	弥生期水田跡，土留め状遺構，杭列，ウケ跡，ドングリピット，古代水田跡，弥生土器，三又鏃，二又鏃，大足，一本梯子，横架材，網枠，曲物，土師器，須恵器
11	原田・大島	川内市東大小路町	H10.11.26 H11.5.6 ～H12.3.24 H12.5.7 ～H13.3.19 計275日間	1,960㎡	宮田栄二 平木場秀男 樋渡将太郎	縄文晩期 弥生中期 古墳時代 平安時代 中世	弥生期竪穴住居跡4軒，土坑1基，古墳期竪穴住居跡1軒，平安期竪穴住居跡31軒（竈付2軒），掘立柱建物跡2軒，土坑墓1，中世竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡1棟，畠跡，弥生期甕・壺，石包丁，磨製石鏃，古墳期成川式，須恵器，大刀剣，鉄鏃，平安期土師器，須恵器，瓦，越州窯青磁，緑釉陶器，転用硯，帯金具，石製丸鞆，玉類，土錘，金環，青銅製鈴，鉄製品
12	鍛冶屋馬場春田	川内市平佐町	H10.11.25 H11.9.1～9.27 H12.5.9～6.15 H12.9.1 ～12.27 計103日間	2,850㎡	彌榮久志 前田　誠 宮田栄二 平木場秀男 川口雅之 徳田有希乃	古代 中世 近世	古代鍛冶炉6基，土坑2基，竪穴住居跡1軒，掘立柱建物跡4棟，畠跡，炉跡7基，越州窯系青磁，陶器壺，土師器，鉄滓，古銭，中世青磁，鉄製品（鎌，鋤先，紡錘車，鉄鏃），近世薩摩焼，平佐焼，伊万里焼，土師器，羽口，鉄滓
13	楠元城下	川内市百次町	H10.9.17～30 H10.11.4～24 H11.9.2～12.6 H11.5.6～11.8 計209日間	1,800㎡	彌榮久志 前田　誠 川口雅之	縄文後期 弥生 古墳	弥生～古墳期竪穴住居跡2軒，炉跡2基，土坑12基，溝7条（杭列を伴う溝1条），縄文期押型文・市来式・西平式・北久根山式，弥生～古墳期土器，木製平鍬，又鍬，横鍬，鍬の柄，掘り棒，丸木弓，容器（未製品），櫂状木製品
14	上野城跡	川内市百次町	H11.12.1 ～3.24 H12.5.1 ～H13.3.29 計316日間	19,400㎡	前田　誠 川口雅之 前野潤一郎 切通雅子 徳田有希乃 彌榮久志	旧石器 縄文 古墳 中世	中世掘立柱建物跡30棟，土坑墓3基，方形竪穴建物跡5軒，溝4条，古道1条，畠跡，剥片尖頭器，ナイフ形石器，押形文，石坂式，阿高式，土師器，石皿，敲石，凹石，石鏃，土師器，須恵器，白磁，青磁，短刀，古銭，滑石製石鍋，中世陶器，鉄鏃

第３表　九州新幹線鹿児島ルート建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧（3）

番	遺跡名	所在地	調査期間	調査面	調査員	時代	主な遺構・遺物
15	大原野	川内市百次町 浦田	H8.10.1～29 H9.11.1 ～H10.3.31 計171日間	2,815㎡	青崎和憲 中原一成 長野眞一 国生　誠 上床　真	旧石器 縄文早期 縄文前期	ナイフ形石器，細石器，古田式，石坂式，条痕土器，轟式，石鏃，石皿，磨石，敲石，石斧
16	東下原	日置郡東市来町養母	H10.10.27～29 H10.12.1～18 H11.3.12 計20日間	248㎡	彌榮久志 前田　誠	旧石器 縄文後期 古墳 古代	古代焼土付土坑，細石刃核，成川式，土師器
17	上ノ平	日置郡伊集院町下神殿四区	H11.2.26 H11.10.1～25 H12.11.14 ～H13.3.29 計92日間	2,328㎡	彌榮久志 前田　誠 上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道	旧石器 縄文後期 中世	縄文竪穴住居跡5軒，集石4基，中世溝1条，細石刃核，指宿式，磨製石斧，石鏃
18	山ノ脇 石坂 西原	日置郡伊集院町郡	H11.5.6～24 H11.6.4～30 H11.11.1 ～H12.3.24 H12.5.1 ～11.13 計184日間	1,900㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文草創期 縄文早期 縄文中期 古墳 中世	集石（草創期1基，早期3基，中期3基），中世溝，農具埋納土坑，掘立柱建物跡12棟，縄文早期土器，船元式，成川式，土師器，陶磁器（中国南部），滑石製石鍋
19	梅落	日置郡伊集院町郡	H11.5.19～21 H11.6.14～17 H12.6.19 ～7.14 計24日間	340㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	縄文早期	集石，塞ノ神式，スクレイパー
20	尾崎	鹿児島市	発掘調査せず				遺跡は工事に触れず残
21	武ABC	鹿児島市武一丁目	H5.4.12～5.25 H5.5.21～7.2 H5.12.6 ～H6.2.21 H6.3.9～30	7,004㎡	彌榮久志 倉元良文 鶴田静彦	縄文前期 縄文中期 弥生中期	古墳住居跡27軒，土坑18基，溝2条ピット30，近世溝9条，轟式，深浦式，春日式，船元式，山之口式，成川式
22	寿国寺跡	鹿児島市武二丁目	H11.5.24 ～6.11 H11.7.1～9.28 H12.5.8～6.13 計175日間	2,100㎡	上之園建二 八木澤一郎 馬籠亮道 徳田有希乃	近世	陶器，磁器，瓦，木製品，金属製品，寿国寺跡のはん池（門前池）跡
23	前市野原	串木野市	H10.12.15 計1日間	22㎡	彌榮久志 前田　誠	時期不明	追加調査で挿入。 包含層は確認されず。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と立地

前畑遺跡は，川内市城上町前畑・瀬戸口に所在し，ＪＲ鹿児島本線川内駅から北北西へ約8.6㎞の位置にある。

川内市は鹿児島県北西部に位置し，北及び北東は紫尾山系のそびえる出水山地で阿久根市，東郷町に接する。東は丘陵性の上床山地で樋脇町と境をなし，南は古くから修験場として知られる冠岳山地と，西に連なり弁財天山を最高峰とする高江山地で串木野市と接している。川内市はこれら三方を山地で囲まれた盆地上の地形をなしており，盆地中央部を流れる川内川が西流して東シナ海に注ぐため西方に開けている。

川内川は熊本県球磨郡上村の白髪岳を水源とし，宮崎県えびの市や霧島山系をへて，本県に入り，支流・幹流を合わせて本県最大の河川である。川内市は，川内川や支流によって形成された沖積平野にあり，両岸に及ぶ自然堤防やその後背湿地，谷底平野に立地している。洪水の影響もさることながら，その多くは水田に利用されている。流域の地質はおおむね安山岩であるが，川内盆地を囲む山地裾部から盆地中央にむかって，権現原台地などの低いシラス台地が広がり，台地上にはいくつもの重要な遺跡が点在している。

川内川河口付近には仏像構造線が走り南下しているため，古生層が露出し，河口北側の月屋山ではチャートが産出している。

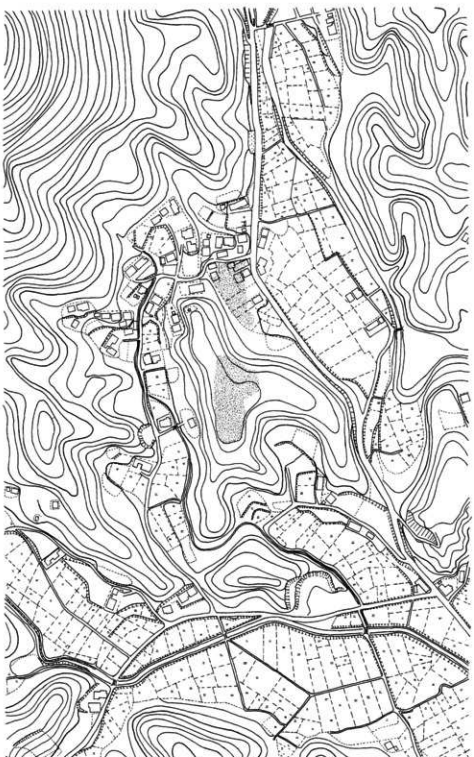
前畑遺跡は，中間川の河岸段丘及び中間川と小幡川にはさまれた丘陵末端で，両河川の開析により取り残された部分である。上部丘陵の瀬戸口はシラスを基盤とし，標高は約72ｍである。一方，丘陵下の低地部前畑は河岸段丘の上位面であり標高は約50ｍである。両河川縁辺は細長い沖積地であり水田とされている。二つの川は丘陵の南側で合流し，高城川へと注いでいる。

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

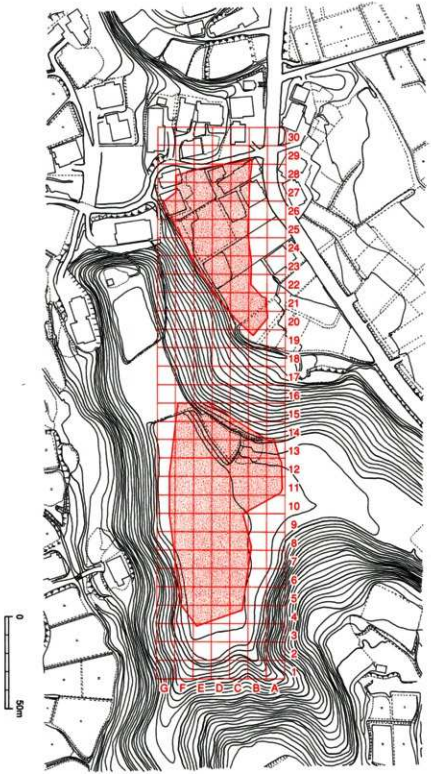
川内市は，川内川によって形成された肥沃な平野を背景として，古くから政治・経済・文化の中心地であったことが，発掘調査や文献により明らかになってきている。川内（せんだい）という地名も，薩摩国府の置かれた古代薩摩の地で，国衙の所在する地域が川内川の内側であったので「川内」，対岸に属する地域を「川外」と呼んだというのがはじまりとされている。

川内市周辺の遺跡として，県内初の旧石器時代尖頭器が出土した馬立遺跡やナイフ形石器文化と細石刃文化の２文化にまたがる遺物が出土した成岡遺跡，西ノ平遺跡などがあり，また新たに上野城跡でも旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代後期では，尾賀台遺跡や麦之浦貝塚などで市来式土器をともなった貝塚が確認され，特に麦之浦貝塚では，縄文後期土器（南福寺式・松山式・鐘ヶ崎式）や石鏃・石匙・磨石・石斧のほか，かんざしや垂飾などの骨角器，貝輪や獣骨などが出土している。



第１図　前畑遺跡丘陵部及び低地部の周辺地形図



第２図　前畑遺跡と周辺地形

弥生時代中期ごろには水田稲作が行われていたことが，楠元遺跡や京田遺跡などの低湿地の調査で，木製農具（鋤，鍬など）の出土や水田そのものが検出され明らかになった。また，後期には前述の麦之浦貝塚から中国後漢初期（1世紀）の舶載鏡片が出土したほか，外川江遺跡で内行花文S字状文鏡と呼ばれる小型仿製鏡や亜鉛ガラス製の小玉もみつかっている。

古墳時代には，横岡古墳群で南九州独自の墓制である地下式板石積石室が，宮内町では神代三山陵の一つと言われる可愛山陵近くに，木花開耶姫の陵墓といわれる端陵などの高塚古墳が見られ，各々の墓制を代表する二つの勢力が混在していた地域であったと考えられる。

奈良時代に大宝律令が制定（701年）されると，六〇余国に国府が設置され，翌年に薩摩国府が川内市御陵下町・国分寺町に置かれている。また，741年の聖武天皇の発願によって国分寺が，奈良時代末期に薩摩国府に隣接する国分寺町字大都・下台に建立されたようである。薩摩国分寺跡の北方約1㎞，川内川右岸の丘陵末端部には，薩摩国分寺創建当時の瓦を焼いた鶴峯窯跡がある。瓦窯二基，須恵器の窯一基があり，第一号窯では丸瓦と平瓦を第二号窯ではそれに加えて軒平瓦，軒丸瓦，鬼瓦などの特殊な瓦を焼いている。第三号窯は須恵器窯で8世紀前半までの蓋や椀などが見つかっている。また，新幹線鹿児島ルートに伴う発掘調査によって，奈良時代から平安時代にかけて住居群が多数検出された大島遺跡や，本県で初めて木簡が出土した京田遺跡などがある。この木簡は告知札と呼ばれるもので，棒状で墨書が四面に確認でき，「嘉祥三年」（850年）に郡司が在地の有力耕者に水田の差し押さえを告知するという内容である。一方，計志加里遺跡では平安時代の円形周溝墓や土坑墓も発見されている。

平安時代末期から安土桃山時代にかけては多くの城館が造られ，文献に記されているものだけでも40ヶ所以上ある。鎌倉時代には，島津氏の居城であって豊臣秀吉の九州攻めの際に陥落したといわれる平佐城や，百次城（上野城），高江城，隈之城，南北朝時代の碇山城などが知られているが，江戸時代幕府の一国一城制によって荒廃し，名を残すのみとなっている。なお，百次城（上野城）跡の調査では10世紀から13世紀頃の掘立柱建物跡や方形竪穴建物跡等が多数発見され，中世社会の解明につながることが期待されている。

近世の川内は，藩の直轄地と私領の八郷に分けられ，唯一の私領であった平佐領では薩摩焼の中でも肥前有田の技法を取り入れた磁器「平佐焼」が焼かれている。昭和初期に廃窯になるまで，川内の伝統工芸品を生み出していた窯跡は，市の文化財に指定されている。

＜参考文献＞

河口貞徳『日本の古代遺跡38　鹿児島』　保育社　1988
『成岡遺跡Ⅱ』『鹿児島県文化財発掘調査報告書（35）』　鹿児島県教育委員会　1985
『川内市文化財要覧』　川内市歴史資料館　1985
『成岡・西ノ平・上ノ原遺跡』『鹿児島県文化財発掘調査報告書（28）』鹿児島県教育委員会　1983
『薩摩国分寺跡』　川内市教育委員会　1979
『鹿児島県市町村別遺跡地名表』　鹿児島県教育委員会　1977
『川内市史上巻』　鹿児島県川内市　1976
『薩摩国府跡・国分寺跡』　鹿児島県教育委員会　1975
『計志加里遺跡』『鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書（38）』鹿児島県立埋蔵文化財センター2001
宮田栄二『鹿児島県の非黒曜石材と原産地』『石器原産地研究会　第1回研究集会資料』　2002

（この地図は国土地理院発行のものを使用した。）

第３図　周辺の遺跡

第4表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物	備考
1	前畑	城上町前畑 城上町瀬戸口	河岸段丘 丘陵	平安～江戸 旧石器・縄文	掘立柱建物跡 集石,陥し穴,石坂式	本報告書 本報告書
2	佐原	陽成町佐原	山麓	鎌倉～室町	青磁,染付	
3	田中原	陽成町田中原	河岸段丘	鎌倉～室町	土器,青磁,白磁	
4	役田	田海町役田	丘陵	縄文～中世	土器,青磁,黒曜石	
5	柿之角	田海町柿之角	丘陵	古墳～中世	土器,染付	
6	別府原	田海町別府原ほか	丘陵	縄文～中世	土器,青磁,染付	
7	流鏑馬原	田海町流鏑馬原	丘陵	縄文	土器片	
8	上ノ原	田海町上ノ原	台地	古墳,中世	土器片,磁器	
9	中原	田海町中原	丘陵	古墳,中世	土器片,磁器	
10	上坊	城上町上坊	山麓	縄文～中世	土器,須恵器,青磁,白磁	
11	タンタコ城跡	城上町城山	丘陵	不詳	砦跡の可能性	別称「白崩城」消滅
12	下大迫	陽成町小原	丘陵	中世	土器,磁器	
13	麦ノ浦貝塚	陽成町木川	台地	縄文～近世	市来式,鐘ヶ崎式	「麦之浦貝塚」1987
14	妹背	高城町城内	丘陵	古墳～室町		
15	鶴峯窯跡	中郷町鶴峯	丘陵端	奈良	窯跡,国分寺瓦	昭和41年発掘調査,国指定史跡
16	計志加里	中郷町計志加里・鶴峯・東郷牟田	台地	縄文～中世	掘立柱建物跡,道跡,方形周溝墓,土師器,須恵器	埋文センター発調報(38)
17	京田	中郷町京田	湿地	弥生～中世	水田跡,杭列,弥生土器,土師器,木簡,木製品	平成12年度発掘調査
18	国分寺台地	御陵下町風口・下原入来ほか	台地	縄文～近世	土器,須恵器,土師器,青磁,染付,布目瓦	
19	越ノ巣	御陵下町越ノ巣	山麓	奈良～平安	須恵器,蔵骨器,火葬墓	昭和61年調査
20	屋形原	御陵下町屋形原	丘陵	奈良～平安(消滅)	火葬墓,土師器蔵骨器	県埋文報(2)
21	東大小路A	東大小路町下目ほか	微高地	弥生～中世	土器,青磁,染付	
22	東大小路B	東大小路町大島馬場ほか	微高地	古墳～中世	土器,青磁,染付	
23	東大小路C(大島)	東大小路町大島	微高地	縄文,弥生,古墳,奈良～平安	竪穴式住居,土器,土師器,須恵器,布目瓦,硯,石製丸鞆,金環	平成12年度大島遺跡として発掘調査
24	鍛冶屋馬場	平佐町鍛冶屋馬場	平地	平安～明治	掘立柱建物跡,鍛冶炉,土師器,須恵器,染付,鉄製品	埋文センター発調報(39)
25	平佐焼窯跡群	天辰町皿山	山麓	江戸～明治	窯跡,染付,窯道具	平成11年調査
26	別府	五代町別府	低地	古墳～中世	土器,須恵器,青磁	
27	軍原	五代町軍原	低地	弥生～古墳	弥生土器散布	
28	若宮	五代町若宮	低地	弥生～古墳	弥生土器,石包丁,石斧,地下式古墳	
29	崎原	五代町崎原	低地	弥生～古墳	弥生土器散布	
30	植平	五代町植平	台地	弥生～古墳	須玖式,竪穴住居跡	昭和50年調査,旧名「久留巣原」
31	久留巣原	五代町中城ほか	台地	縄文～中世	土器片,須恵器,陶磁器,黒曜石	
32	崎野古墳	五代町羽田	低地	古墳	丸玉	
33	外川江	五代町西外川江	低地	弥生～古墳	免田式,成川式,小形倣製鏡	県埋文報(30)
34	下五代	五代町下五代	低地	古墳	土器片	
35	平山城跡	城上町平山	丘陵	不詳	石塔	
36	藤峰城跡	城上町今寺	丘陵	不詳		
37	梅ヶ城跡	城上町梅次郎	丘陵	不詳		消滅
38	染ノ城跡	高城町染敷	丘陵	不詳	砦跡の可能性	
39	内ノ城跡	高城町内ノ城	丘陵	不詳		出城
40	妹背城跡	高城町城内	丘陵	中世	墟跡	別称「高城城」

第Ⅲ章　丘陵部（瀬戸口）の調査成果

第１節　発掘調査の方法と概要

調査はまず，新幹線建設予定の中央ラインを基準として，西から東方向にＡ～Ｇ，南から北方向に１～16区までとした10ｍ単位のグリッドを設定した。

グリッドを考慮して計７ヶ所の確認トレンチを設定して調査を開始した結果，全てのトレンチから遺物の出土を確認したため，そこで全面調査に切り替えた。

全面調査は調査区域の南側から実施し，遺物包含層の掘り下げと遺構の検出を行った。平成９年度の調査は，Ｃ・Ｄ－８・９区及びＥ・Ｆ－11・12区までの包含層の掘り下げ及び遺構の検出に努めた。Ｃ～Ｆ－７区までは掘り下げ及び遺構の実測図は終了したが，８区より北側15区までについては次年度に引き継いだ。

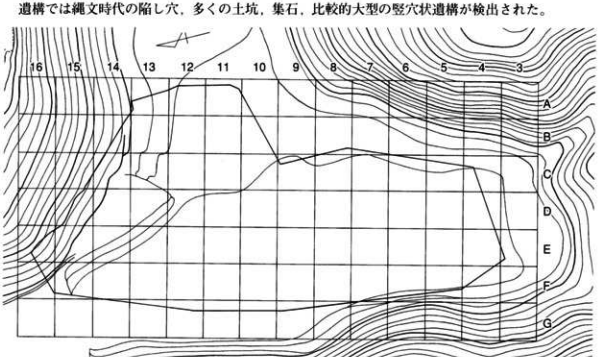
平成10年度は，前年度に引き続いてＣ～Ｆ－８～16区及び，Ａ・Ｂ－10～11区の遺物包含層の掘り下げなどの調査を実施した。縄文時代の遺構として土坑が前年度から多く検出されていたが，新たに集石も検出された。

７月からは低地部の調査も平行して実施したため，作業員を分けることとなったが，９月には一部の遺構実測を残しほぼ丘陵部の調査を終了することができた。

なお，中央部のＤ区ラインの西側と，７区ライン及び９区ラインの北側を下層確認トレンチを設定し，下の包含層の有無を確認し，土層断面図を作成した。

調査の結果，旧石器時代ナイフ形石器文化及び細石刃文化，縄文時代早期・前期・後期，平安時代の遺物が出土し，特に縄文時代早期の土器や石器が多く遺物の主体であった。

遺構では縄文時代の陥し穴，多くの土坑，集石，比較的大型の竪穴状遺構が検出された。

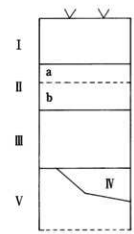


第４図　丘陵部（瀬戸口）グリッド配置図

第2節　遺跡丘陵部の層位

本遺跡が所在する丘陵は，高城川の支流である中間川と小幡川の開析により取り残された部分であり，基盤はシラスである。標高は約72mである。

遺跡の基本土層は下のようになる。



第5図　丘陵部の基本土層柱状模式図

Ⅰ層　表土。旧耕作土であり，全体に約15cm程度の堆積が認められる。

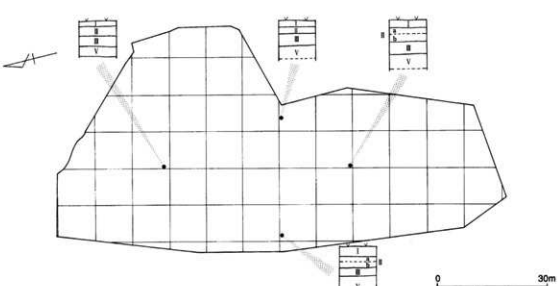
Ⅱ層　黄褐色土層。軟質でありアカホヤ火山灰の腐食土層と思われる。この層が基本的な遺物包含層であり，縄文時代から平安時代までの遺物を包含する。
場所によりⅡaとⅡb層に区別でき，上部のⅡa層中には細かい火山豆岩が混在し，縄文時代前期以降の時期と縄文時代早期に区別が可能である。

Ⅲ層　茶褐色粘質土層。粘質が強く，上層との区分は明らかであり，上面が遺構の確認面である。

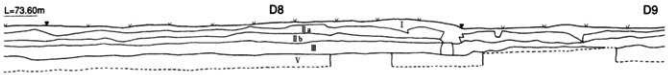
Ⅳ層　黄褐色砂質土層。部分的に確認できる。シラスの風化土と判断される。

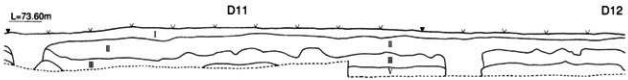
Ⅴ層　シラス。入戸火砕流堆積物に相当する。基盤層である。

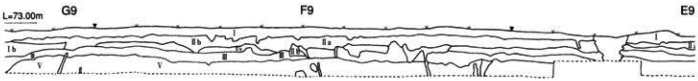
遺構の調査区域の地形は中央部西側付近が最も高く，そこから東側及び南北方向にゆるやかに傾斜している。各地点の土層は下に柱状で示したが，各層に厚みにおいて若干の差は認められるものの，層序的には違いがないようである。

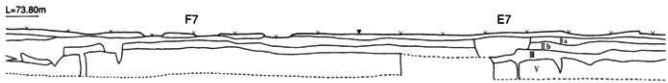


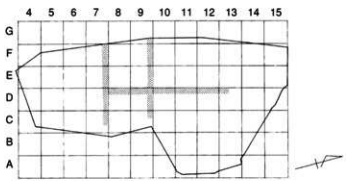
第6図　丘陵部の各地点の土層


L=73.60m
D8
D9

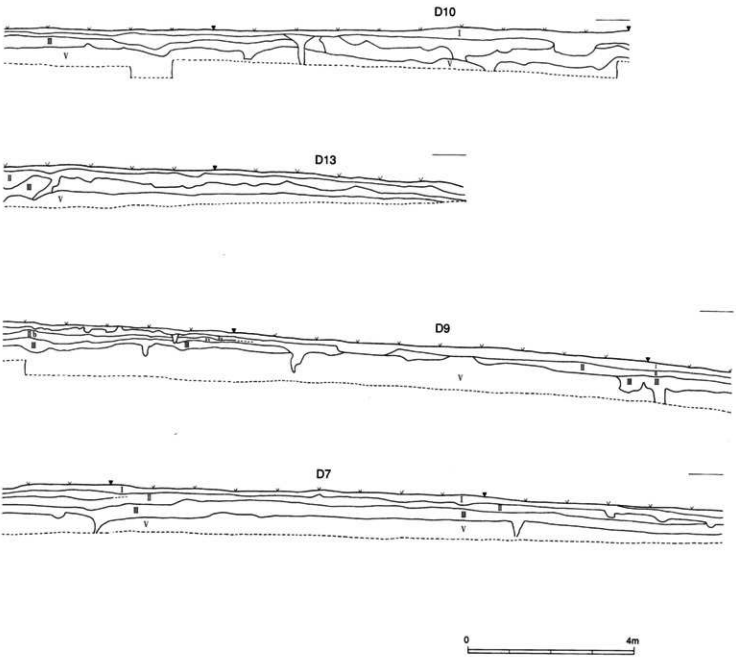

L=73.60m
D11
D12


L=73.00m
G9
F9
E9


L=73.80m
F7
E7


4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
G
F
E
D
C
B
A

第7図　5



:陵部の土層断面図

第３節　旧石器時代の遺物

旧石器時代の遺物は，縄文時代早期の土器・石器と同じ層より出土しており，旧石器時代の特定の包含層を把握することはできなかった。

出土した遺物はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器，細石刃・細石刃核であり，ナイフ形石器文化と細石刃文化の異なる二時期からなる。黒曜石のパティナの違いから両時期の剥片及びチップも出土していると推定されるが，縄文時代のものと明確に区別することが困難であり，時期判定が明らかな石器のみを抽出した。

ナイフ形石器文化

出土分布は第９図に示した。これによると，Ｃ－７・８区境界付近で近接してナイフ形石器２点が出土しているほかは散在しており，ブロックの存在は明確にできない。ナイフ形石器４点，台形石器２点，三稜尖頭器１点が出土している。

ナイフ形石器（第８図１～４）

１～４はいずれも横長剥片もしくは幅広の剥片を素材とした切り出し形を呈するナイフ形石器である。１は一部に表皮が残る比較的厚みのある横長剥片を素材とし，打面部の主要剥離面に対して平坦剥離を行いバルブを除去している。その後，打面部と剥片末端に粗いブランティングを行い二側縁加工のナイフ形石器としている。先端部を少し欠損する。２も同様に横長剥片を使用し，打面部は丁寧なブランティングを施し，鋭い先端部に仕上げたものであり，基部も細く尖らしている。刃部の使用痕は顕著ではない。

３は１と同様に一部に表皮が残る剥片を使用し，打面側はほぼ直線状であるが，反対側は内湾状に深く整形するブランティングを施している。４は幅広の剥片を使用したものであり，粗いブランティング加工により二側縁加工のナイフ形石器としている。

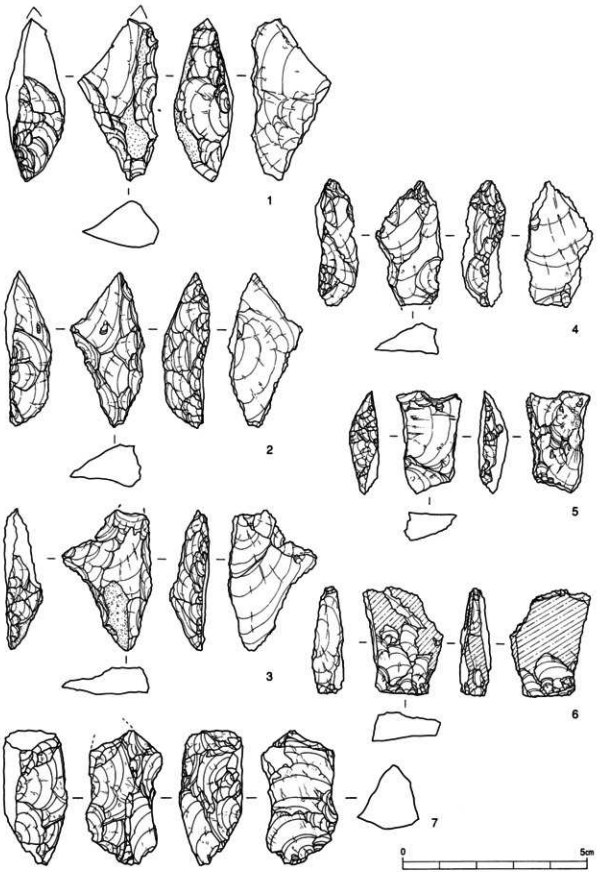
台形石器（第８図５・６）

５は幅広の剥片を素材とし，剥片の打面部及び反対側を通常の腹面側からではなく背面方向から急角度のブランティングを施し，両側縁を直線状に整形したものである。刃部の一部は破損しているが，残存している部位には使用痕が観察される。６はチャートの節理のある剥片を利用し，折断により長方形に整えられたものであり，基部は折断の後に平坦剥離を行い整形している。ブランティングはなく明確な台形石器ではないが，形状及び使用部位と使用痕から台形石器的なものとして，ここで取り上げた。

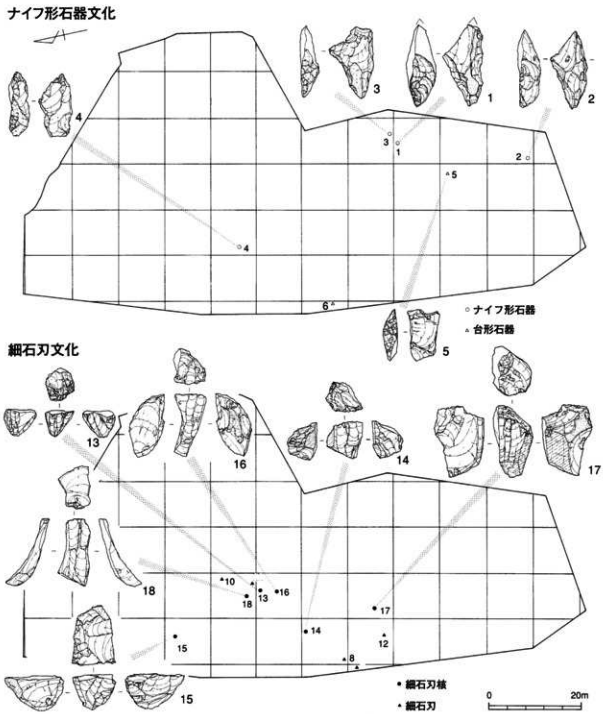
三稜尖頭器（第８図７）

厚みのある縦長もしくは幅広の剥片を素材とし，打面は背面からの剥離で取り除き，腹面からの粗く連続した剥離により両側縁を整形し断面三角形に仕上げている。先端部を欠損する。

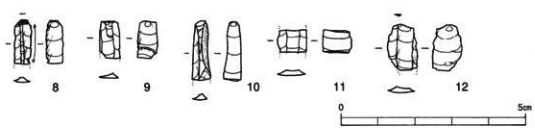
１～４のナイフ形石器は著しい風化がある黒曜石を使用しており，その特徴から樋脇町上牛鼻産黒曜石と判断できる。５は漆黒色で光を通さず，また不純物も多いことより日東産もしくはその近くの黒曜石と推定される。７も気泡等の不純物が多い黒曜石であるが，色調は灰黒色のシマが認められ，このような特徴は五女木産黒曜石に類似する。



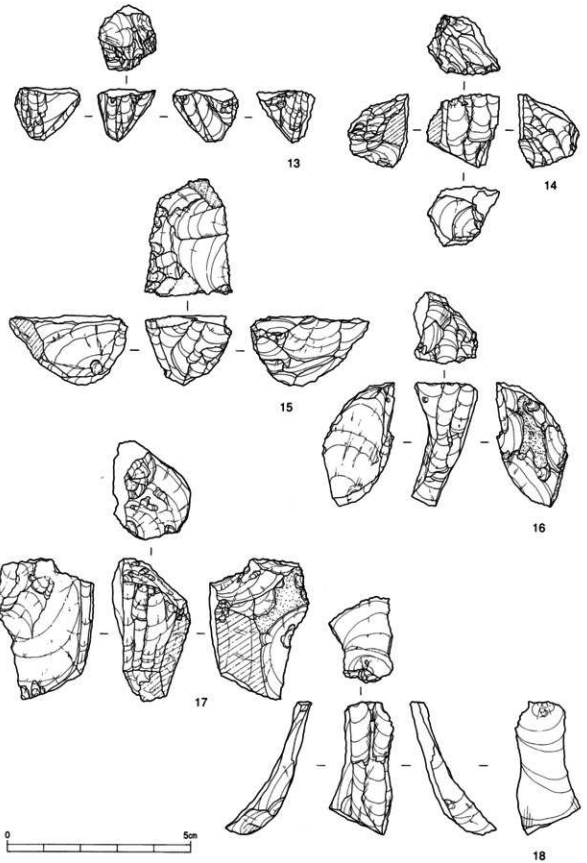
第8図　旧石器時代の遺物1（ナイフ形石器文化）



第９図　旧石器時代の遺物出土分布



第10図　旧石器時代の遺物２（細石刃）



第11図　旧石器時代の遺物３（細石刃文化）

細石刃文化

出土分布はE－10・11区付近及びF－8区付近でやや散漫なまとまりとして認識でき，2ヶ所のブロックとして識別できる可能性がある。

細石刃（第10図8～12）

8～10は尾部を折断した頭部もしくは頭中部である。8は入念な頭部調整が行われており，頭部の平面形が半円形を呈している。右側縁には使用痕が認められる。9もわずかに頭部調整が施されている。11は比較的幅広の中間部であり，12も同様に幅広で尾部が折断されており，これらは上牛鼻産黒曜石が使用されている。

細石刃核（第11図13～17）

13は同一の打面から円錐状に周囲を細石刃剥離が行われたものである。細石刃剥離前に打面調整が顕著に行われている。一方，14は2面の作業面をもつが，それぞれ打面は上下と異なり，打面転移を行ったものである。各打面にはそれぞれ打面調整が施されている。13・14は形態より野岳・休場型細石刃核と考えられる。

15は船底形を呈し，打面からの側面加工があり，形態的に船野型細石刃核と考えられる。作業面の大きな剥離面は作業面再生を行ったものと推定され，その後は2回しか剥がされていない。打面上には両側面からの固定痕が認められる。石材は頁岩である。

16・17は剥片を素材とし，主要剥離面を側面とし木口部から細石刃剥離を行ったものである。16は黒曜石の表皮が残る剥片を利用したもので，周囲からの剥離があることよりブランク形成を行ったものと考えられる。打面は作業面方向から調整を行っている。17はチャートの厚みのある剥片を素材としたものであり，打面を側面方向からの一回の剥離で形成し，石核整形剥離は認められないものである。打面には作業面方向からの打面調整が施されている。

作業面再生剥片（第11図18）

18は細石刃作業面が表面に残る細石刃核作業面再生剥片である。石材チャートであり，打面には打面調整が観察される。作業面はステップしたため再生されたものと思われる。

第5表　旧石器時代石器計測表

番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
1	ナイフ形石器	黒曜石(上牛鼻)	(4.4)	1.6	2.1	11.37	C5-38	
2	ナイフ形石器	黒曜石(上牛鼻)	4.15	2.0	1.2	7.62	C3-411	
3	ナイフ形石器	黒曜石(上牛鼻)	(3.85)	2.4	1.0	6.65	C6-400	
4	ナイフ形石器	黒曜石(上牛鼻)	(3.35)	1.85	1.05	5.36	E11-630	
5	台形石器	黒曜石(日東系)	2.8	1.75	0.8	3.08	D4-64	
6	台形石器か	チャート	2.9	2.15	0.75	5.37	F7-112	
7	三稜尖頭器	黒曜石(五女木?)	(3.6)	2.0	1.7	11.59	A11	
8	細石刃	黒曜石	1.2	0.45	0.15	0.08	E9-110	
9	細石刃	黒曜石(青灰色)	1.0	0.55	0.15	0.08	E9-109	
10	細石刃	チャート	1.6	0.5	0.2	0.17	E11-645	
11	細石刃	黒曜石(上牛鼻)	0.6	0.8	0.15	0.13	E11-518	
12	細石刃	黒曜石(上牛鼻)	1.25	0.8	0.15	0.16	F13-145	
13	細石刃核	黒曜石(腰岳か)	1.8	1.55	1.7	2.91	E10-533	
14	細石刃核	チャート	1.95	1.95	1.6	5.75	F7-126	
15	細石刃核	頁岩	3.2	2.35	1.9	13.95	F12-666	
16	細石刃核	黒曜石	3.8	2.1	2.6	19.45	E10-508	
17	細石刃核	チャート	3.35	1.7	1.85	7.16	E6-178	
18	作業面再生剥片	チャート	3.6	1.8	0.7	4.48	E11-525	

第4節　縄文時代の検出遺構

本遺跡丘陵部の主体となる時期は縄文時代であり，出土した土器からみると早期のものが圧倒的に多く，次いで若干の前期土器とわずかな後期土器が認められる。石器も多種なものが出土しており，時期的に明確な区分はできないが，出土土器の量から判断すると大部分の石器も縄文時代早期のものと考えられる。

縄文時代の遺構と考えられるものは，第12図縄文時代の遺構分布図で示したように集石3基，陥し穴もしくは陥し穴状遺構3基，土坑33基，石斧集積遺構1基であった。所属する時期が明確でないものも少なくないが，埋土等により確定できたものもあった。

1．集石（第13・14図）

検出された集石の分布は，調査区域中央付近の西側の高い部分に3基と東側の傾斜地に1基みられ，前者は縄文時代早期遺物が集中している区域であり，後者の位置は逆に出土遺物が少ない部分となっている。

1号集石

D－10区で検出された。長径×短径は180cm×140cmであり，約200個の礫からなる。安山岩の角礫が主であり，礫の径は5～10cm程度のものが多い。集中はあるが礫の上下の重なりはなく，下面に掘り込みも認められないようである。

2号集石

F－12区で検出された。直径約50cmのなかに安山岩角礫の約5cm程度のものが27個認められた。赤化しており火熱を受けたためと思われる。下面の掘り込みはない。

3号集石

F－10区で検出された。長径×短径は90cm×50cmであり，径8cm程度の安山岩角礫27個が小さく散在している。下面の掘り込みはないようである。

4号集石

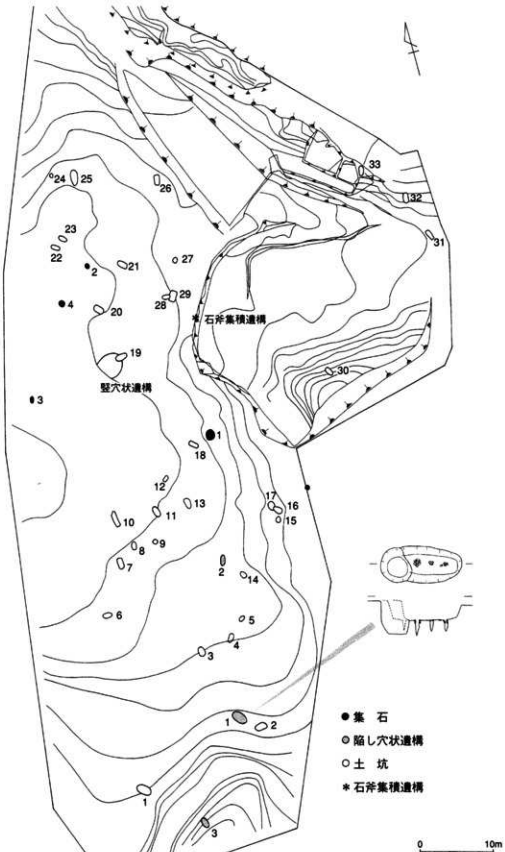
F－11区で2号集石の6cm西側で検出された。径100cmのなかに礫は比較的集中度が高い。他の礫群と同様に安山岩角礫が使用されており，また礫の大きさは径10cm程度と径5cm以下のもので計83個の礫からなる。礫は火熱を受け赤化し，ヒビ割れたものも多い。他の集石と異なり明らかな掘り込みが確認できる。

2．陥し穴及び陥し穴状遺構（第14図）

本遺跡で検出された多くの土坑のうち，底面に施設としての小穴が認められるものを陥し穴もしくは陥し穴状遺構とした。計3基検出されており，それらの分布は調査区域の南面に片寄っている。

1号陥し穴

D－6区南側で検出され，主軸は南北方向に近い。北側は新しい時期の穴により一部を欠損するが平面形は楕円形を呈し，壁面は直線的である。下面にはクイを打った設備があり3ヶ所の小穴が認められ，各小穴にはそれぞれ数個の小礫が円形に検出されている。これはクイを補強するために



第12図　縄文時代の遺構分布図

第13図　縄文時代の遺構１（集石）

詰められたものと判断される。

底面のピットのうち両側にある二つについては，写真によると小ピット終了位置よりも長く他の土が入り深い位置まで続いているように見えるが，調査担当者は土の硬さが下位が硬いことより以下の部分は樹痕と判断したとのことだった。

2号陥し穴状遺構

ほぼ方形を呈しており，D－8区で検出された。底面には西側寄りに2個の小穴が認められており，クイの痕跡と考えられる。

3号陥し穴状遺構

D－4区で検出され，主軸は地形の傾斜と一致する。中央の東側寄りに1個の小穴が確認されている。小穴の下位には硬化した土が認められ，調査担当者により陥し穴状遺構と判断されているが，樹痕の可能性も考えられる。底面は平坦ではない。

3．土坑（第15図～第17図）

合計33基の土坑が検出されており，分布は調査区域全体に広がるものの，C～D－7～9区に比較的集中しているようである。これらの平面プランは楕円形，長方形，円形など多様であり，また検出面からの深さや長径も様々である。地目が山林であったため底面は樹根の痕が多く，人為的なピットと判断できるものは少なかった。埋土により明らかな早期あるいは前期以降と判断されたものもある。

1号土坑

E－5区で検出された。楕円形を呈しており，底面は平坦でなく中央部が深くなっている。長軸は200cmを越しており比較的大型である。

2号土坑

C－6区で検出された。平面形は楕円形であり，長軸の片側には小穴が認められる。底面は小穴の方向に傾斜している。

3号土坑

D－7区で検出された。楕円形を呈しており，検出面からの深さは比較的浅く34cmを測る。底面はほぼ平坦であった。

4号土坑

3号土坑の東側約3mの位置で検出された。楕円形を呈するが内部は長方形に近い。検出面からの深さは84cmと比較的深い。底面は平坦で礫が1点認められた。

5号土坑

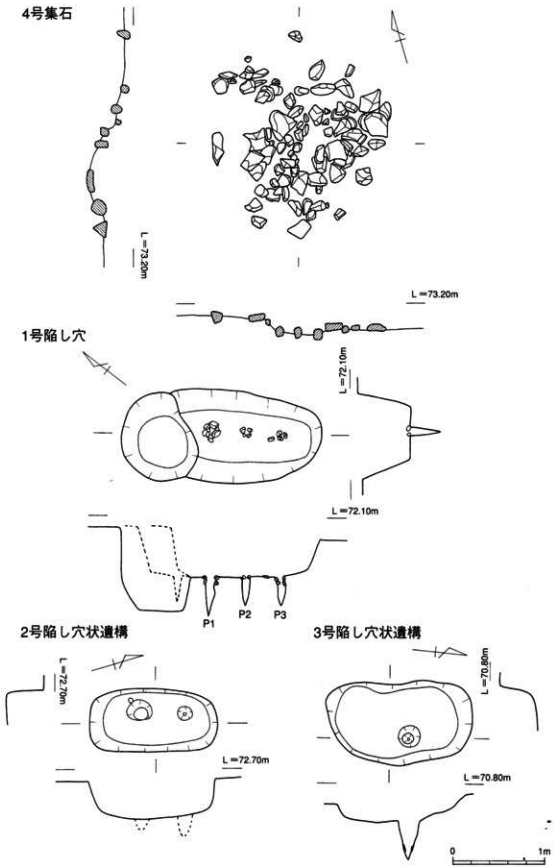
4号土坑の東側約2mの位置にある。楕円形を呈し，底面は平坦であり，検出面からの深さは15cmと浅い。片側の小ピットは樹痕と判断した。

6号土坑

E－7区で検出された。平面形は楕円形を呈し，底面及び壁面もやや丸みを帯びる。

7号土坑

E－8区で検出された。ほぼ長方形を呈しており，長径×短径は160cm×81cmを測るが，検出面



第14図　縄文時代の遺構２（集石・陥し穴）

からの深さは22cmと比較的浅い。埋土にはアカホヤ粒子が混在しており，アカホヤ火山灰降下以後の縄文時代前期以降の縄文時代のものと推定される。

8号土坑

7号土坑の約2m東側に位置する。7号と埋土が同一であり縄文時代前期以降のものと判断され，主軸も同一であるが一回り小さい。

9号土坑

8号土坑の約2.5m東側に検出された。平面形は円形であり直径約80cmである。検出面からの深さは13cmと浅く，底面は平坦であるが樹痕があった。

10号土坑

E－8・9の境界付近で，8号土坑の北側約3mの位置に検出された。平面形はほぼ長方形を呈し，底面に認められる小穴は樹痕の可能性が高い。埋土はアカホヤの下部の土であることより縄文時代早期と判断される。

11号土坑

E－9区で検出された。平面形は楕円形を呈している。検出面の埋土から礫が出土しているが，底面はそれより深く平坦である。これも埋土より縄文時代早期と判断される。

12号土坑

E－9区で11号土坑の北東約4mの位置に検出された。平面形は長方形であり，各辺は直線状を呈し，底面も平坦である。

13号土坑

D－9区で検出された。12号土坑の南側約4mに位置する。ほぼ長方形を呈し，底面は平坦であるが長軸方向はわずかに短くなる。

14号土坑

C－8区とD－8区の境界付近で検出された。平面形は他と比較すると不定形状であるが，底面は小さな楕円形となり，深さも他より深く82cmを測る。底面には礫が出土した。

15号土坑

C－8区西側で検出された。平面形は楕円形を呈し，底面は平坦でなく丸みを帯び，深さは中央部で20cmである。

16号土坑

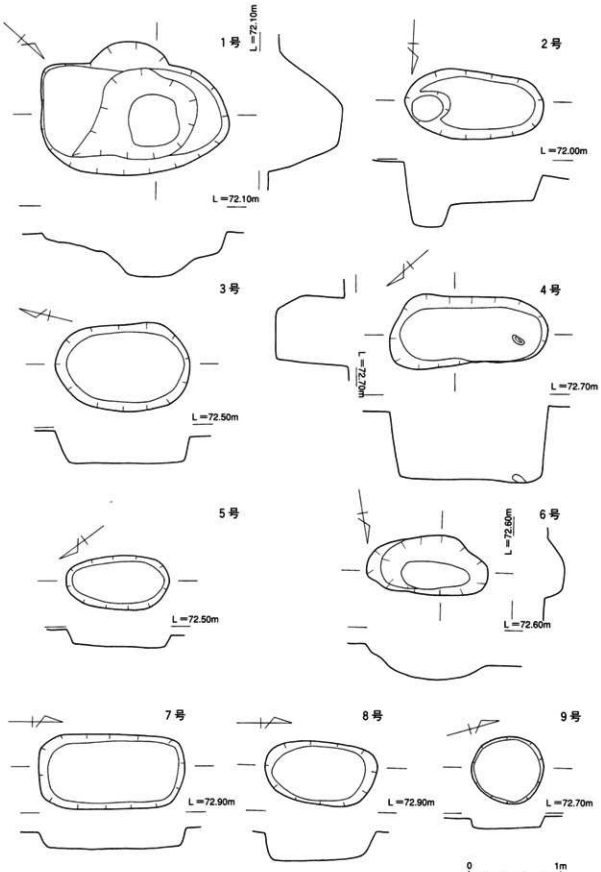
15号土坑に近接した位置で検出されており，また17号土坑を切っている。平面形は楕円形を呈し深さは52cmであり，底面は平坦である。

17号土坑

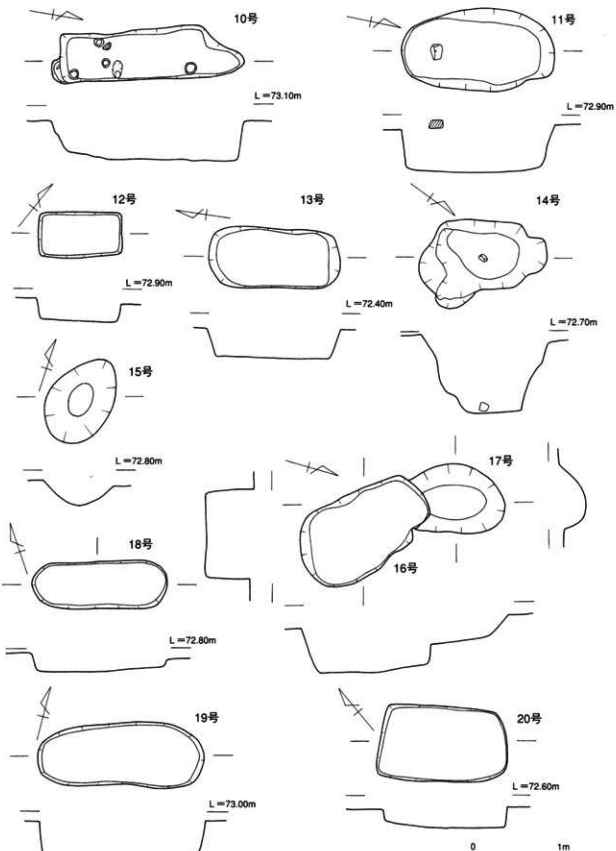
16号土坑に切られているが，平面形は楕円形を呈する。底面は丸みを持ち，深さは26cmと比較的浅い。

18号土坑

D－9区と10区の境界付近で検出された。平面形は長軸の二辺は平行した長楕円形を呈し，幅は約50cmと一定で細長い。底面は平坦である。



第15図　縄文時代の遺構３（土坑１）



第16図　縄文時代の遺構４（土坑２）

19号土坑

E－11区で検出された。切合関係より竪穴状遺構の後に掘られた土坑である。平面形は長楕円形を呈し，壁面はほぼ垂直で，底面は平坦である。埋土より縄文時代前期以降のものと判断される。

20号土坑

E・F－11区で，19号土坑の北側約6mの位置に検出された。平面形はほぼ長方形を呈し，底面は平坦で深さは比較的浅い。埋土より縄文時代前期以降のものと判断された。

21号土坑

F－12区で検出された。平面形はほぼ長方形を呈し，壁面は垂直に掘られている。深さも約50cmと比較的深く，底面は平坦である。埋土より縄文時代前期以降と思われる。

22号土坑

F－12区で検出された。長楕円形を呈し，底面は平坦である。調査区域のなかで最も標高の高い部分に位置している。検出面からの深さは浅い。底面には焼礫が認められた。

23号土坑

22号土坑の約1m東側に近接して検出された。楕円形を呈しており，底面は平坦である。底面直上から礫が4点出土している。いずれの礫も火熱を受け赤化したものであった。

24号土坑

F－24区で検出された。平面形は直径約50cmほどの円形を呈しており，深さも約10cmと浅い。埋土より縄文時代前期以降のものと判断された。

25号土坑

24号土坑の東側約3mの位置で検出された。平面形は長方形を呈し，長さは190cmを超す大型であるが検出面からの深さは32cmと深くない。これも埋土より縄文時代前期以降のものと判断される。

26号土坑

F－13区で検出された。長方形を呈し，長軸はほぼ南北方向である。北側に低い段があり南側が深くなっている。底面には小穴が認められているが，樹痕の可能性もある。

27号土坑

D－10区で検出された。トレンチの断面で検出されたため一部を欠くが，ほぼ正方形を呈すると推定される。底面には樹痕が多い。

28号土坑

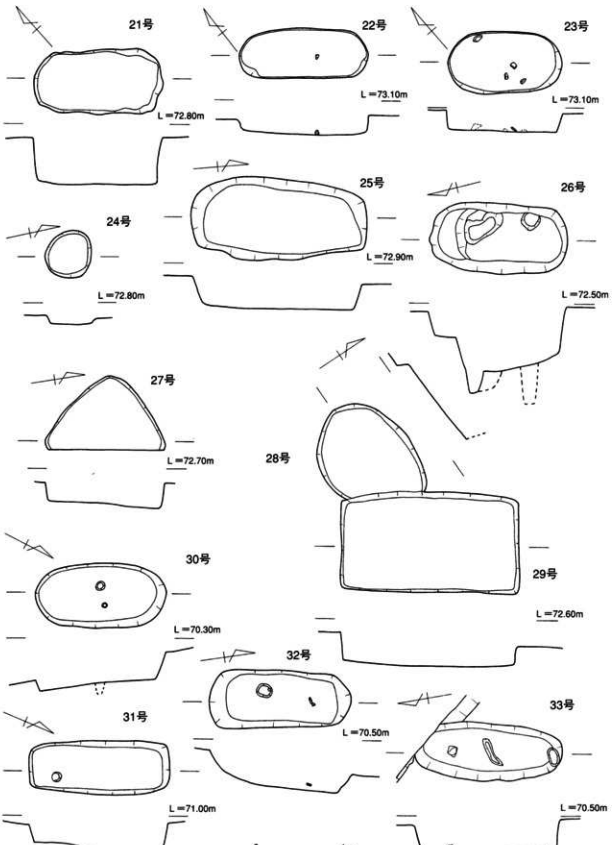
D・E－11区と12区の境界付近に検出された。29号土坑に切られている。平面形は楕円形を呈し検出面からの深さも12cmと浅い。

29号土坑

28号土坑を切っている。平面形は端正な長方形を呈し，長径×短径は191cm×110cmと比較的大型である。底面は平坦で壁面はほぼ垂直である。

30号土坑

B－10区と11区の境界付近で検出された。埋没谷と考えられる傾斜面に位置し，主軸は傾斜方向と一致する。楕円形を呈しており，検出面からの深さは比較的浅いが，底面は平坦であり，中央に小穴が認められた。



第17図　縄文時代の遺構５（土坑３）

31号土坑

A－12区に検出された。平面形は長方形を呈している。底面は平坦であるが北側に傾斜しており，南側には小穴も認められたが，これは樹痕の可能性がある。

32号土坑

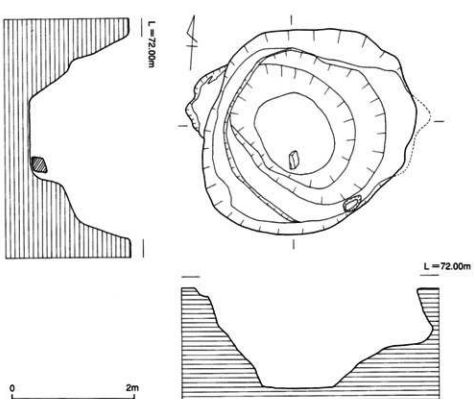
A－13区で31号土坑の約５ｍ北側に検出された。長方形を呈し，長軸は傾斜方向と同一で北側に向いている。底面も丸みをもって北側に傾斜している。

33号土坑

B－13区で検出された。平面形は楕円形であり，埋土の底面近くより礫が１点出土している。底面はほぼ平坦であるが，小ピットもみられる。これは樹痕の可能性が高い。

４．竪穴状遺構（第18図）

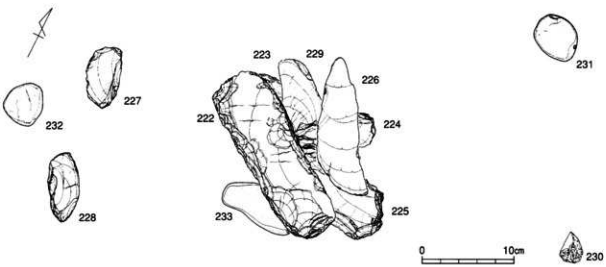
E－11区西側で検出された。長径×短径は380㎝×320㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは中心部で約160㎝を測る。埋土中からは黒曜石，チャート，頁岩の剥片やチップなど17点が出土したほか，多くの大小の礫が出土している。礫は総出土点数が26点であり，拳大程度から長径25㎝の大型礫があり，その大部分は火熱のためヒビ割れや赤化が認められた。礫は砂岩及び安山岩の円礫である。完掘した状況は壁面が階段状に段が認められた。底面は130㎝×110㎝の楕円形で平坦面があり，大型の礫も認められた。埋土より縄文時代前期以降であろうと判断される。



第18図　縄文時代の遺構６（竪穴状遺構）

石斧集積遺構（第19図）

D－11区で検出された。打製石斧などが集中して出土し，石斧集積遺構として認識された。中心部に比較的大型の斧類が重なっており，近接した東側に小円礫と鎌形剥片石器が西側には小円礫と剥片が出土した。明確な掘り込みは確認することができず，どの部分までを集積遺構としてとらえるのか判断が困難であった。（図版16参照）中心部には打製石斧４点と大型剥片２点及び偏平礫１点が認められた。各個別の石器については出土遺物の項で説明を行う。



第19図　石斧集積遺構

第６表　陥し穴状遺構計測表

番号	区	平面形	長　径（cm）	短　径（cm）	検出面からの深さ（cm）	穴の深さ（cm）		検出番号
1	C6·D6	楕円形	170＋α	99	54	P１	42	9-12,10-3
						P２	30	
						P３	27	
2	D8	長方形	140	71	41		24	9-20
3	D4	楕円形	158	88	23		42	9-10

第７表　土坑計測表

番号	区	平面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	備　考	検出番号
1	E5	楕円形	203	125	75		9-11
2	C6	楕円形	150	75	69		10- 4
3	D7	楕円形	147	94	34		10- 5
4	D7	楕円形	170.5	82	84		9-18
5	D7	楕円形	112	58	15		10- 6
6	E7	楕円形	132.5	65	26		9-17
7	E8	長方形	160	81	22	前期以降	10-15
8	E8	楕円形	122	70	32	前期以降	10-16
9	E8	円形	78	74	13		10-17
10	E8·9	長方形	209	56	44	早期	10-54
11	E9	楕円形	164	93	49	早期	10-18
12	E9	長方形	91	50	21		10-20
13	D9	長方形	136	63	32		9-24
14	C8·D8	不定形	137.5	93	82	底面に礫	9-19
15	C8·9	楕円形	101.5	68	20		9-21
16	C9	楕円形	150	88	52		9-22
17	C9	楕円形	112	74	26		9-23
18	D9	長楕円形	147	51	19		10-53
19	E11	長楕円形	180	71	40	前期以降	10-54
20	F11	長方形	136	82	22	前期以降	10-42
21	E12	長方形	140	71	52	前期以降	10-43
22	F12	長楕円形	140	55	20	前期以降	10-51
23	F12	楕円形	123	67	21	底面に礫	10-48
24	F13	円形	53	51	9	前期以降	10-35
25	F13	長方形	191	92	32	前期以降	10-36
26	E13	長方形	150	76	90		10-58
27	E12	正方形	130	100	25		10-57
28	D11·12	楕円形	130	101	12		10-55
29	E11·12	長方形	191	110	35		10-56
30	B10·11	楕円形	143	69	26	底面に小穴	10-62
31	A12	長方形	152	57	34		10-59
32	A13	長方形	154	64	29		10-60
33	B13	長楕円形	160	63	40		10-61

第5節　縄文時代の土器

丘陵部（瀬戸口）の出土遺物は，ほとんどⅡ層黄褐色土から出土した。出土した土器から遺物の大部分は縄文時代早期に相当するものと考えられるが，一部縄文時代前期の土器や後・晩期のものもわずかに認められた。遺物全体の出土分布は，C・D－6・7区付近とE・F－8～13区に集中しており，そのなかで特にE－11・12付近に散布が多かった。縄文時代の土器分布についても，全体の出土遺物と同様の分布であった。縄文時代の土器は，縄文時代早期・前期・後期・晩期の各時期のものがあり，また縄文時代早期の土器は前半と後半のものとが認められた。ここでは器形・文様・時期などから以下のように分類して説明を行う。

1類‥‥円筒形深鉢で口縁は外反して貝殻刺突文を斜位もしくは羽状に施し，胴部は貝殻条痕文を綾杉状に施すもの。

2類‥‥円筒形深鉢で，口縁部上位に条痕文を横位に巡らし，胴部下半は無文となるもの。口縁端部はまるくおさめる。胎土に角閃石を多く含むという特徴がある。a～dの4種に細分できる。

3類‥‥円筒形深鉢で，口縁部はわずかに外反し口縁直下に貝殻刺突文を横位に数段巡らしその下部は貝殻を連続して押圧したもの。

4類‥‥小破片のため全体は不明であるが，貝殻腹縁による刺突文を施したものである。各個別の土器は施文方法など異なるが，それぞれ同一個体と思われる破片はなく，そのため一括して4類とした。

5類‥‥器面に貝殻条痕を施したものや，ナデ調整を施した小さな胴部及び底部片など，土器の胎土及び調整などから縄文時代早期に相当すると思われるものを一括した。

6類‥‥円筒形の胴部で口縁部は「くの字」状に開く器形であり，胴部には網目の撚糸文を縦位に施したものなどがある。

7類‥‥深鉢形の器形を呈すると考えられるもので，口縁直下に貝殻腹縁による短い刻み目を連続して巡らし，以下の器面及び内面に貝殻条痕を施したもの。

8類‥‥壺形の器形を呈するもの。

9類‥‥口縁部上位に連続する爪形状の刺突文を三段巡らし，以下は条痕が施されたもの。

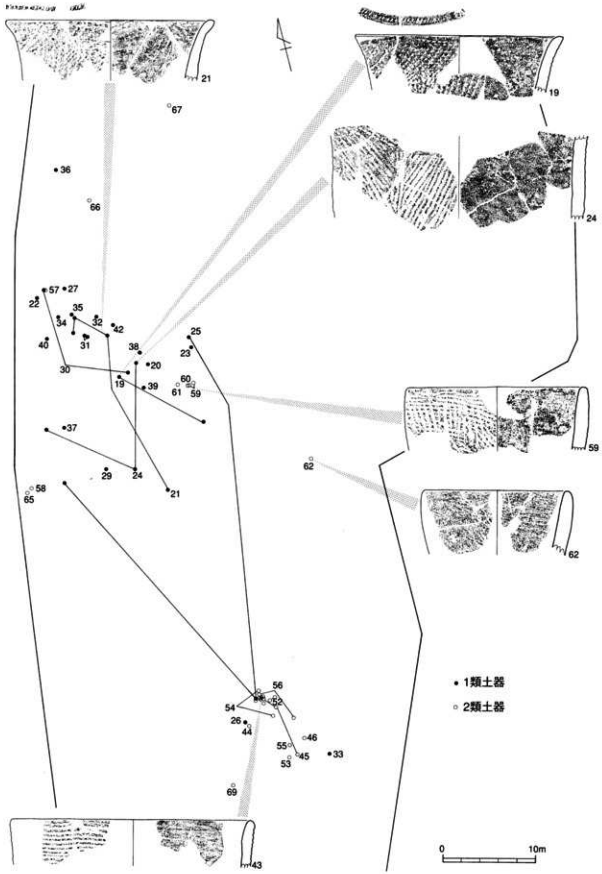
10類‥‥器面には粘土ひもを貼り付けた隆起線文が施され，口唇部には連続した刻み目が施されるもの。内面は粗い条痕によって整形されている。

11類‥‥胴部片と底部片であるが，器面の浅い条痕や胎土・調整から縄文時代中期相当のものを一括した。

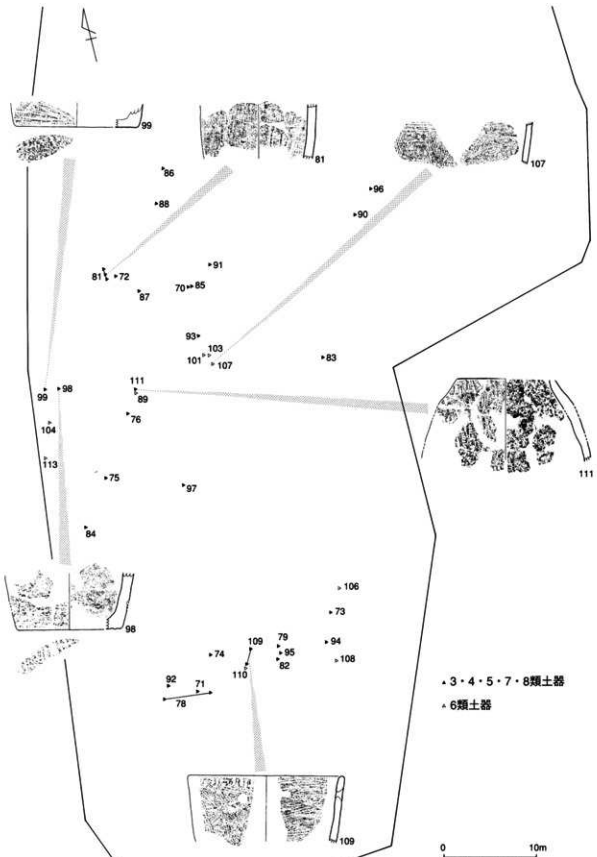
12類‥‥他の底部片と異なり，胎土・焼成・底部からの立ち上がり等から縄文時代後期のものと考えられるもの。

13類‥‥内面には貝殻条痕が施されているが，器形や器面調整の特徴から縄文時代晩期と考えられるもの。

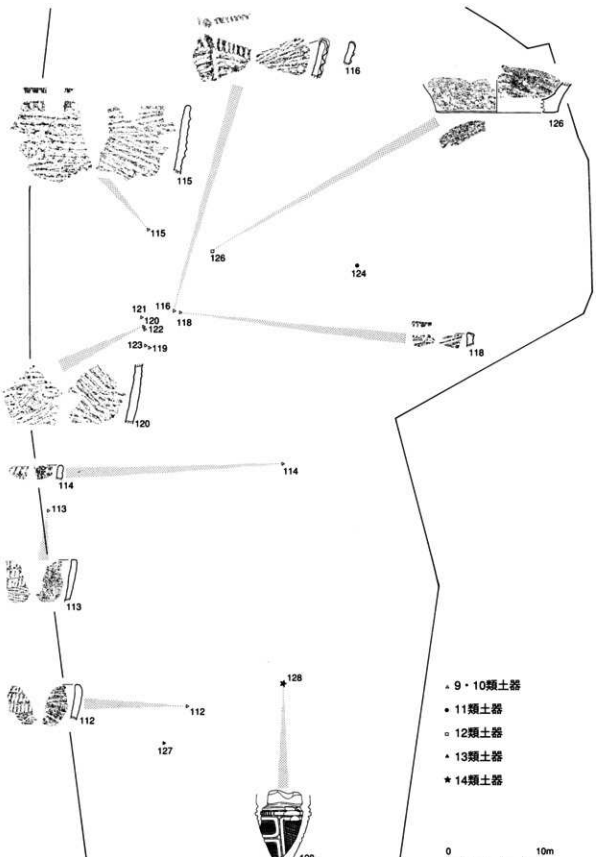
14類‥‥九州の土器ではなく，沈線で区画された隆起状線文内部に細いヘラ状の工具で格子状の文様を施したもの。



第20図　縄文時代の土器（1・2類土器出土分布）



第21図　縄文時代の土器（3～8類土器出土分布）



第22図　縄文時代の土器（9～14類土器出土分布）

1類土器（第23・24図19～42）

本遺跡で最も出土量の多い土器である。器形は円筒形深鉢を呈し，外反する口縁部には貝殻腹縁による刺突文を施し，胴部は貝殻条痕を綾杉状に施すものである。

分布はE・F－10・11区を中心に分布する（第20図）。19・20は外反する口縁部に貝殻腹縁による刺突文を施したものである。刺突文は二段で上の刺突は斜位に下の刺突は縦位に施されている。丸く治められた口唇部には短くて浅い刻み目が施されている。内面はナデ調整である。21もほぼ同様の文様をもつ口縁部であるが，上の斜位に施される刺突文のさらに上位には横方向の刺突文が施されている。22は剥落がひどく刺突文の痕跡が認められる程度である。23は貝殻刺突文が羽状に施されたものであり，口唇部には比較的深くてやや長い刻み目が施されている。内面はヘラ状工具によりナデが施されている。

24～42は胴部であり綾杉状の条痕が施されている。そのなかで24は綾杉状の条痕の間に縦方向の条痕が認められ，25には縦方向の条痕は施されていないという違いもある。また，35・37・38・40～42の綾杉状の条痕は，細い間隔である24～33とは異なり別個体である。文様や胎土・調整などから最低3個体あるものと思われる。

2類土器（第25図）

出土した土器片の数は1類に次いで多いが，個体数では11個体となり最も多い。円筒形深鉢であり，外反気味に直口する口縁部の上位に貝殻条痕文を横位に施すものである。口唇部を丸く治め，内面整形は丁寧なミガキが施され，胎土に角閃石を多く含むという特徴がある。なお，口縁部上位に貝殻条痕の文様帯をもたないものも，器形・胎土・調整から2類土器に含めて細分した。

出土分布はD－6・7区に集中している。

2a類（第25図43～58・68）

43～54は胎土・焼成・調整などから同一個体と思われるものである。円筒形深鉢の器形を呈し，口縁部はやや外反気味に直口する。文様は口縁部上位にのみ施されるもので貝殻腹縁による比較的深い条痕文である。胴部の器面はヘラ状工具によるナデ整形，内面はヘラ状工具による丁寧なミガキ調整が施されており，口唇部まで丁寧にミガかれている。胎土には角閃石が多い。

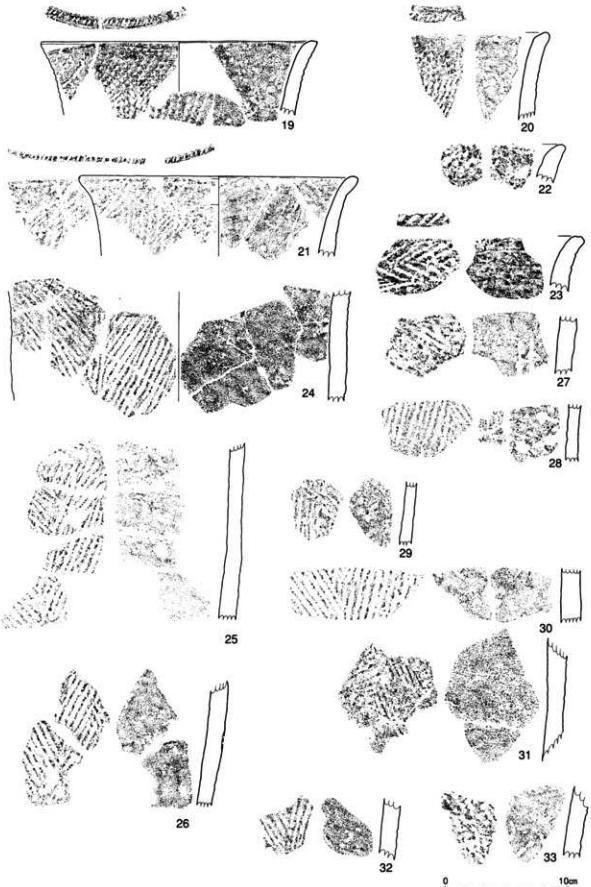
55～57の3点については胎土・調整・色調などから同一個体と考えられるものである。口縁部はないが，胴部は縦方向のつよい貝殻条痕により整形され，内面はナデ調整が施されている。58は器壁が比較的薄く，口縁部に貝殻条痕文が施され，内面はミガキ調整を行ったものである。胎土には角閃石がきわめて多い。68は比較的浅い貝殻条痕文が横位に施されたものであり，2類としては異質な印象を受ける。内面はナデ調整，胎土には角閃石が多い。

2b類（第25図59～61）

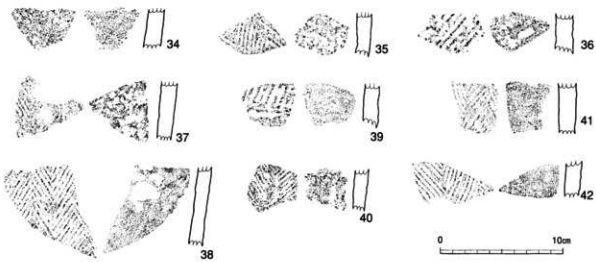
口縁部は直口あるいは外反気味に直口する器形であり，口縁部の文様は貝殻腹縁による比較的浅い条痕文が横方向のみでなく，縦位や斜位にも施されている。ただし口縁直下は横位に条痕文が施されている。内面はナデ調整，口唇部はミガキが施されている。

2c類（第25図62～67）

口縁部は内湾気味に直口し，器壁は厚く口唇部は丸く治める。胎土には角閃石を多く含む。これらの特徴より2類と同類としているが，口縁部に貝殻条痕文の文様帯はなく無文である。62は比較



第23図　縄文時代の土器1（1類1）



第24図　縄文時代の土器２（１類２）

的厚い器壁であり，内外面とも横方向のナデ調整が施されている。63は色調が内外面とも黒褐色を呈するものである。

64～66は同一個体と思われるものであり，内湾気味に直口する口縁部をもつ。口縁部には横位の貝殻条痕文の文様帯はないが，縦方向の器面調整と思われる条痕状の調整痕が観察される。

67も内湾気味に直口する口縁部であるが，無文の器面に赤色顔料が塗られている。センター所蔵の走査型電子顕微鏡を用いた永濱功治氏による分析の結果，ベンガラと判断された。

２ｄ類（第25図69）

色調・焼成などが２ａ類と同様であり，また胎土に多くの角閃石を含むことより２類のバリエーションと考えられる。口縁部は不明であるが，文様は貝殻腹縁による押し引き文と縦方向の条痕文によって構成されている。内面は縦方向の工具によるナデ調整が施されている。

３類土器（第26図70）

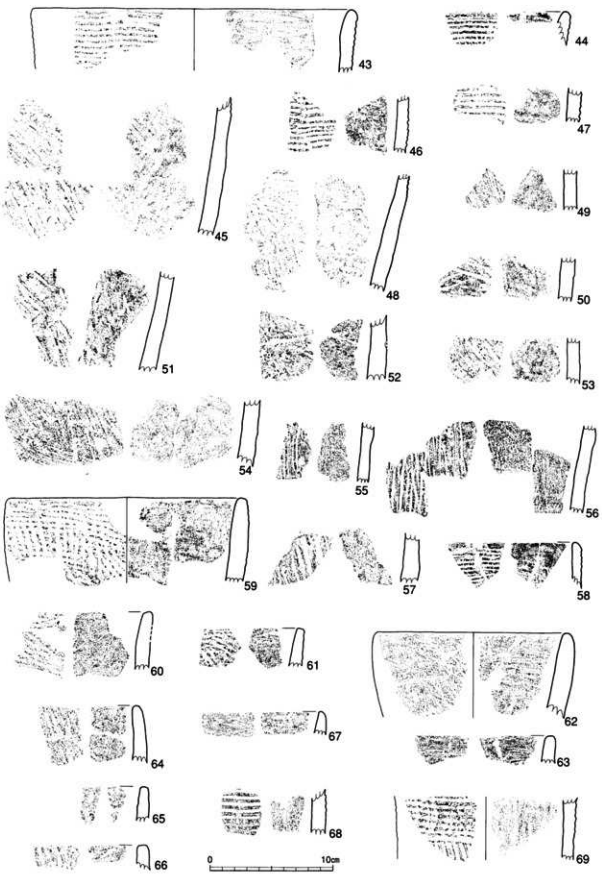
口縁部の小破片１点のみの出土である。口縁部はわずかに外反し，口縁直下に貝殻腹縁による刺突文を３段横位に巡らし，以下は貝殻を押し引き状に押圧している。口唇部は平坦で浅い刻み目をもつ。内面はミガキ調整である。

４類土器（第26図71～73）

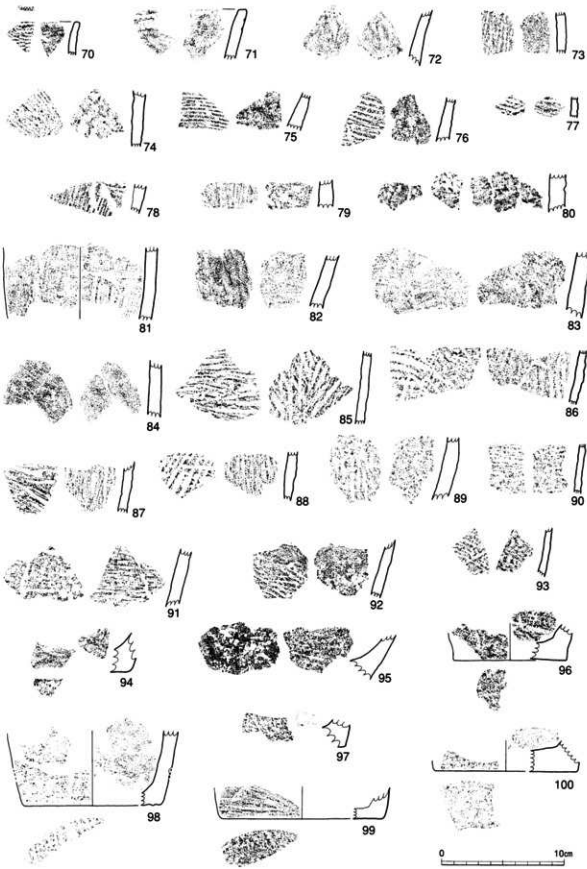
３点とも完全な別個体であり各々異型式土器であるが，貝殻刺突文が施されていることから一括して４類とした。71は口縁部に腹縁を押圧状に刺突したものであり，内面は横方向のナデ調整が施されている。72は口縁近くと思われるもので貝殻刺突文が施されている。内面は縦方向のナデ調整である。73は縦方向に連続する貝殻刺突文が施されている。

５類土器（第26図74～100）

器面調整・胎土・焼成などから縄文時代早期前半に相当すると考えられるものを一括した。胴部の調整を貝殻条痕で行ったものやナデ調整を施したものなどがある。内面調整も工具によるナデ調整やケズリ状の整形などが施されている。



第25図　縄文時代の土器３（２類）



第26図　縄文時代の土器４（３～５類）

94～100は底部及び底部付近の土器である。95の器面はミガキ調整であり，また96～100の底部からの立ち上がりは，広い底部からそのまま立ち上がり，器面は工具などの横方向の条痕状の調整であり早期前半の特徴をもっている。98の底部底面には網代痕が認められる。

6類土器（第27図101～107）

くの字状に開く口縁部をもつものである。101・103・107は胎土・焼成・色調などから同一個体と思われるものであり，くの字状に開く口縁部は波状を呈している。頸部と胴部中央には横方向の沈線がめぐり，胴部には網目状撚糸文が縦方向に間隔をおいて施されている。

102・104～106は胎土・焼成などから同一個体と思われるものであり，くの字に外反する口縁をもち，口縁部や胴部に明確な文様はなく無文と思われるものであり，器面には浅い条痕状の調整が認められる。

7類土器（第27図108～110）

鉢形の器形を呈すると考えられ，口縁直下には貝殻腹縁による刻み目が巡り，内外面とも貝殻条痕による調整が施されている。胴部外面の貝殻条痕は右下がり及び左下がりが組み合わさり格子状に意図されているようである。

8類土器（第27図111）

111は壺形の器形を呈するものである。口縁部はやや内湾しながら直線的にすぼまる。無頸の壺形土器である。器面は縦方向の比較的粗い条痕により調整されている。内面はナデ調整である。煮炊きに利用されたためか胴部下半は二次的に火を受け赤化し，また内面の下半も剥落している。胎土・調整・焼成などから縄文時代早期のものと思われる。

9類土器（第27図112～114）

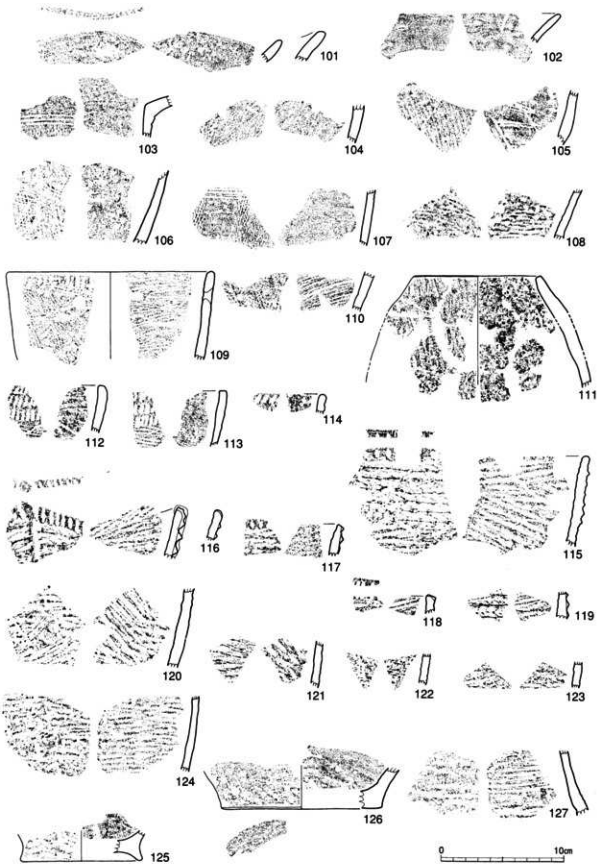
口縁部は貝殻腹縁による短い幅の刺突文を爪形状に刺突して三段巡らすものである。以下は貝殻条痕が施される。口縁は内湾気味に直口し，端部を平たく治めている。内面はヘラ状工具によるナデ調整が行われている。

10類土器（第27図115～123）

内外面とも粗い条痕を施し，口縁部には粘土ひもを貼り付けた隆起線文系の土器である。115は直線的に開く鉢形を呈する隆起線文系の土器である。口縁部に貼り付けた隆起線文は口縁と平行に6条せまい間隔で巡る。隆起線文は上から下の順で貼り付けられ，最後に口唇部にも貼り付けて，その上をヘラ状工具により刻み目を付ける。116は波状口縁であり，垂下する隆起線文の後に口縁と平行する隆起線文が貼り付けられる。115と比較して厚みのある断面三角形の隆起線文である。口唇部の刻み目も深い。117～119は116と同一個体と思われる。120～123は115と同一個体である可能性が考えられるもので，色調・胎土・焼成及び内外面の粗い条痕はほぼ類似するものであるが，条痕の後にヘラ状工具でシャープな沈線が斜位の格子目状に施されたものである。

11類土器（第27図124・125）

124は内外面とも貝殻条痕により調整を施されているものであるが，器壁はうすく，また胎土・焼成などは10類・7類・5類とは全く異なり，条痕の後に軽くナデ調整が行われている。条痕や胎土から縄文時代中期相当のものと思われる。125は上げ底状の底部であり，立ち上がりで内湾してその後開く。器面調整は124と同様である。



第27図　縄文時代の土器５（６～13類）

第28図　縄文時代の土器6（14類）

12類土器（第27図126）

126は赤褐色を呈し，底部の立ち上がりは内湾気味に大きく開くものである。内外面ともミガキ調整が施されている。縄文時代後期相当と思われる。

13類土器（第27図127）

胴部で内側に屈曲する部分である。器面調整はミガキ調整が施されており，内面調整は貝殻腹縁による条痕が行われている。器形から縄文時代晩期ものと思われる。

14類土器（第28図128）

128はD－7区から出土したもので，このような土器の出土は唯一1点のみである。まず全体の器形が不明であると言わざるを得ない。これが全体の半割なのか，あるいは一部分の半割なのか明確でないが，もし全体の半割となると，かなり小型の土器となる。最大径が約6㎝程度であり，下半は急にすぼまる。沈線を2本入れ，その間を半円形にナデて，隆起線文とする。この隆起状の文様は「コの字」状に区画され，その中はシャープな沈線を縦方向の後に横方向に入れ全体が格子目状の文様で充填される。区画された隆起線状文の上位にはやや高い隆起線が横位に回り，それには半截竹管様の押圧文が巡る。胎土は細礫が混在せず精製されており雲母が目立って多い。

第8表　縄文土器観察表（1）

角閃：角閃石，火ガ：火山ガラス

挿図番号	番号	分類	部位	出土区・層	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 輝石	胎土 火ガ	胎土 他	内面調整	焼成	取上番号
23	19	1	口縁部	E12	黄茶褐色	黄茶褐色		○	○	○	○		ナデ	良	498・499・607
	20	1	口縁部	E12	黄茶褐色	黄茶褐色		○			○		ナデ	良	551
	21	1	口縁部	E9・F12	黄茶褐色	黄茶褐色		○					ナデ	良	150・579・587・594
	22	1	口縁部	G12	黄茶褐色	黄茶褐色		○					ナデ	良	590
	23	1	口縁部	E12	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	504
	24	1	胴部	E11・13F12	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	556・571・613
	25	1	胴部	D13E11-12Ⅲ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	7・120・217
	26	1	胴部	D7・13Ⅰ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	3
	27	1	胴部	1TⅡ	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	264
	28	1	胴部	F11	赤褐色	赤褐色	○	○	○				ナデ	良	721
	29	1	胴部	F9	赤褐色	赤褐色	○	○	○				ナデ	良	127
	30	1	胴部	F11	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	265・557

第9表　縄文土器観察表（2）

角閃：角閃石，火ガ：火山ガラス

挿図番号	番号	分類	部位	出土区・層	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 輝石	胎土 火ガ	胎土 他	内面調整	焼成	取上番号
23	31	1	胴部	F11	赤褐色	赤褐色	○	○				チタン	ナデ	良	276·277
	32	1	胴部	F11	赤褐色	赤褐色	○	○	○				ナデ	良	261
	33	1	胴部	C6Ⅱ	赤褐色	赤褐色	○	○	○				ナデ	良	53
24	34	1	胴部	F11	赤褐色	赤褐色		○	○			○白黒 磁鉄鉱	ナデ	良	271
	35	1	胴部		黄褐色	黄褐色		○	○		○		ナデ	良	725
	36	1	胴部		黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	659
	37	1	胴部	F12	黄茶褐色	黄茶褐色		○	○		○		ナデ	良	574
	38	1	胴部	F9	黄褐色	黄茶褐色	○	○	○		○白黒		ナデ	良	752
	39	1	胴部	E12	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○				ナデ	良	601
	40	1	胴部	F12	黄茶褐色	黄茶褐色	○	○	○		○		ナデ	良	571
	41	1	胴部	E11	黄褐色	黄茶褐色	○	○			○		ナデ	良	673
	42	1	胴部	F11	黄褐色	黄茶褐色	○	○	○		○	黒もあり	ナデ	良	257
25	43	2	口縁部	D7下	明褐色	明褐色	○	○	○			磁鉄鉱	ミガキ	良	8
	44	2	口縁部	D7下	明褐色	明褐色		○	○	○シソ	○	チタン	ミガキ	良	4
	45	2	胴部	D6·7下	明褐色	明褐色	○	○	○		○		ミガキ	良	8·13·63
	46	2	胴部	D6下	明褐色	明褐色		○	○				ミガキ	良	58
	47	2	胴部	D7下	明褐色	明褐色		○	○		○	チタン	ミガキ	良	12
	48	2	胴部	D6·7上	明褐色	明褐色		○	○		○		ミガキ	良	8
	49	2	胴部	D7下	明褐色	明褐色		○	○		○		ミガキ	良	8
	50	2	胴部	D8下	明褐色	明褐色		○	○		○		ミガキ	良	7
	51	2	胴部	D9下	明褐色	明褐色		○	○				ミガキ	良	8
	52	2	胴部	D10下	明褐色	明褐色		○	○		○		ミガキ	良	10·11
	53	2	胴部	D6下	明褐色	明褐色		○	○		○		ミガキ	良	65
	54	2	胴部	D7下	明褐色	明褐色		○	○				ミガキ	良	5·14
	55	2	胴部	D6下	灰褐色	灰褐色			○		○		ナデ	良	62
	56	2	胴部	D7下	灰褐色	灰褐色			○		○黒		ナデ	良	6·19
	57	2	胴部	F11	灰褐色	灰褐色		○					ナデ	良	265
	58	2	口縁部	E12	明褐色	灰褐色		○	○		○		ミガキ	良	512·513
	59	2	口縁部	E12	明褐色	灰褐色			○		○		ナデ	良	512
	60	2	口縁部	E12	褐色	灰褐色			○				ミガキ	良	534
	61	2	口縁部	C6上	黒褐色	黄茶褐色		○	○		○		ミガキ	良	
	62	2	口縁部	D12	褐色	灰褐色			○				工具ナデ	良	681
	63	2	口縁部	5T Ⅰb	暗褐色	暗褐色		○	○		○		ナデ	良	369
	64	2	口縁部	F9上	赤褐色	灰褐色		○	○		○黒		ナデ	良	94
	65	2	口縁部	F9上	明褐色	明褐色		○	○		○		ナデ	良	96
	66	2	口縁部	F9上	暗褐色	褐色		○	○		○		ナデ	良	94
	67	2	口縁部	E15	茶褐色	茶褐色		○			○		ナデ	良	703
	68	2	胴部	C8上	暗褐色	褐色		○	○		○	チタン鉄鉱	ナデ	良	
	69	2	胴部	D6下	褐色	褐色		○	○		○		ナデ	良	78
26	70	3	口縁部	E12	暗茶褐色	明茶褐色	○	○	○		○		ミガキ	良	535
	71	4	口縁部	E6	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○				ナデ	良	439
	72	4	胴部	F10	褐色	褐色	○	○	○		○		ナデ	良	283
	73	4	胴部	D6下	褐色	褐色	○	○	○		○		ナデ	良	25
	74	5	胴部	E6	赤褐色	赤褐色		○	○				剥落	良	461
	75	5	胴部	F8上	赤褐色	赤褐色	○	○					ナデ	良	137
	76	5	胴部	F9上	明茶褐色	褐色		○					ナデ	良	133
	77	5	胴部	B12Ⅰ	褐色	褐色	○	○			○		ナデ	良	
	78	5	胴部	E6	明茶褐色	褐色	○	○			○			良	438-443
	79	5	胴部	D6下	暗黄褐色	暗黄褐色	○	○			○		ナデ	良	74

第10表　縄文土器観察表（3）

角閃：角閃石，火ガ：火山ガラス

挿図番号	番号	分類	部位	出土区・層	色調		胎土						内面調整	焼成	取上番号
					外面	内面	石英	長石	角閃	輝石	火ガ	他			
26	80	5	胴部	B13-C12 I	褐色	褐色		○			○		ナデ	良	
	81	5	胴部	F10-11	褐色	褐色	○	○	○				ナデ	良	282・284・285
	82	5	胴部	D6上	明褐色	明褐色		○			○		ナデ	良	72
	83	5	胴部	D12	黄白褐色	褐色	○	○					ナデ	良	682
	84	5	胴部	F8上	橙白褐色	褐色	○	○	○		○		ナデ	良	142
	85	5	胴部	E10	明茶褐色	明茶褐色	○	○	○		○		ケズリ	良	199
	86	5	胴部	E12表	赤褐色	褐色	○	○	○		○		ケズリ	良	753
	87	5	胴部	F12	褐色	褐色	○	○	○		○		ケズリ	良	605
	88	5	胴部		赤褐色	明褐色	○	○	○		○		ケズリ	良	723
	89	5	胴部	F9	赤褐色	明褐色		○	○		○	チタン磁鉄鉱?	ナデ	良	474
	90	5	胴部	C13	赤褐色	明褐色	○	○	○				ナデ	良	689
	91	5	胴部	F9	赤褐色	明褐色		○	○			チタン磁鉄鉱?	ナデ	良	124・751
	92	5	胴部	E6	明褐色	褐色	○	○			○		ナデ	良	456
	93	5	胴部	E12	褐色	黄褐色	○	○					ナデ	良	234
	94	5	底部	D6下	黄褐色	灰褐色		○	○				ナデ	良	57
	95	5	底部	D7下	橙白褐色	黄褐色	○	○			○		ナデ	良	71
	96	5	底部	C13	明褐色	明褐色	○	○					ナデ	良	690
	97	5	底部	E8上	黄白褐色	灰褐色		○	○				ナデ	良	173
	98	5	底部	F9上	橙白褐色	明褐色		○	○				ナデ	良	119
	99	5	底部	F10上	赤褐色	赤褐色	○	○	○					良	93
	100	5	底部		橙白褐色	明茶褐色							ナデ	良	214
27	101	6	口縁部		橙白褐色	黄白色	○	○			○		ナデ	良	494
	102	6	口縁部	C12 I	黄白色	黄白色	○	○			○		ナデ	良	
	103	6	頸部	E12	明褐色	明褐色	○	○	○		○		ナデ	良	492
	104	6	胴部	B	橙白褐色	黄白色		○	○		○		ナデ	良	112
	105	6	胴部	C12 I	黄白色	灰黒褐色	○	○			○		ケズリ	良	
	106	6	胴部	D13 III	黄白色	黄白色		○			○	黒	ナデ	良	32
	107	6	胴部	E11	明褐色	明褐色	○	○	○		○		ナデ	良	485
	108	6	胴部	C6 II	橙白褐色	明褐色		○					条痕	良	54
	109	7	口縁部	D6上・下	茶褐色	明茶褐色		○	○		○		条痕	良	82・86
	110	7	胴部	D6下	赤茶褐色	茶褐色		○			○		条痕	良	81
	111	8	口縁部	F9	赤褐色	橙白色		○	○		○		ナデ	良	474
	112	9	口縁部	E6	暗茶褐色	明褐色	○	○					ナデ	良	463
	113	9	口縁部	E10 II	明褐色	明褐色	○				○		ナデ	良	107
	114	9	口縁部	D8	明褐色	明褐色		○					ナデ	良	469
	115	10	口縁部	E12表	橙褐色	橙褐色	○	○	○		○		条痕	良	754
	116	10	口縁部	E13	暗灰褐色	茶褐色	○	○	○		○		条痕	良	627
	117	10	口縁部		暗灰褐色	明褐色	○				○		条痕	良	
	118	10	口縁部	E13	暗灰褐色	褐色	○	○			○		条痕	良	529
	119	10	胴部	F12	暗灰褐色	褐色	○	○					条痕	良	604
	120	10	胴部	F12	明褐色	明褐色		○	○		○		条痕	良	610
	121	10	胴部	F13	暗茶褐色	暗茶褐色	○	○			○		条痕	良	609
	122	10	胴部	F12	灰褐色	褐色	○				○	磁鉄鉱	条痕	良	610
	123	10	胴部	E12	褐色	褐色		○					条痕	良	602
	124	11	胴部	C13	赤褐色	黄褐色	○	○	○			○	条痕	良	688
	125	11	底部	B13 I	明褐色	明褐色	○	○			○		条痕	良	
	126	12	底部	E13	赤褐色	赤褐色		○	○			雲母	ミガキ	良	707
	127	13	胴部	E6上	明茶褐色	茶褐色		○	○		○		条痕	良	458
28	128	14		D7	明茶褐色	黒褐色	○	○				金雲母	ナデ	良	73

第６節　縄文時代の石器

石器は土器と同様に全てⅡ層から出土したものであり，土器が縄文時代早期から晩期の時期まで認められていることより石器も時期を限定することはできないが，土器のなかでは早期のものが量的に多いことを考慮すると，出土した縄文時代の石器も早期のものが多いと判断される。しかし，一部に旧石器時代の石器も同一層から出土しており，ナイフ形石器などの示準石器以外のスクレイパー類のなかにも旧石器時代のものが混在している可能性もある。

１．石器組成と石材

丘陵部から出土した石器組成は第11表に示したとおりであり，ほとんどの器種がみられるなかで石鏃が最も多く，次が削器及び掻器のスクレイパー類となっている。その次が磨石・敲石類であり以下は礫器，石皿の順となっている。各器種の出土分布は特定の集中など認められなかった。

使用されている石材は，黒曜石，チャート，めのう，たんぱく石，鉄石英，硅質頁岩，サヌカイトなど多様であり，このうち黒曜石は肉眼的観察により４種に区分できる。

黒曜石Ａ‥‥黒色で風化が著しい特徴から樋脇町上牛鼻産と推定されるもの

黒曜石Ｂ‥‥黒色で光沢があり，不純物が多いことより大口市日東産系と推定されるもの

黒曜石Ｃ‥‥淡黒色で不純物がなく，佐賀県腰岳産に類似するもの

黒曜石Ｄ‥‥青灰色を呈し不純物がなく，長崎県針尾産に類似するもの

また黒曜石Ｃや黒曜石Ｄと同様に遠隔地石材と考えられるのがサヌカイトであり，これも肉眼的観察では佐賀県産と推定される。他の石材は在地産と推定され，このうちチャートは川内川河口北側の月屋山で産出している。

第11表　縄文時代の石器組成と石材

	石鏃	磨製石鏃	石槍	石匙	掻器	削器	石錐	UF等	楔形石器	磨製石斧	打製石斧	礫器	磨石・敲石	石皿など	砥石	打製石斧	鎌形剥片石器
	23	1	1	1	4	11	2	8	2	1	1	6	10	5	2	5	2
黒曜石Ａ（上牛鼻）	1				1	1	1										
黒曜石Ｂ（日東系）					2			1									
黒曜石Ｃ（腰岳系）	4				1	1		1									
黒曜石Ｄ（針尾系）	4																
チャート	6					5		2	1								
めのう	1																
たんぱく石	1					1	1	1									
鉄石英								1									
硅質頁岩	1		1					2									
安山岩（サヌカイト）	4			1		2			1								
頁岩	1	1				1				1	1	2				5	2
砂岩												2	5	1	2		
安山岩												2	5	4			

2．石器の出土分布

各石器の出土分布は第39図に示した。土器の出土分布と同様にC・D－6・7区付近とE・F－8～13区に集中している。特定の器種は片寄ることなく散在している。石斧の集積遺構は，上記の集中区域に近いが，中心ではなく比較的離れた地点である。

3．包含層出土の石器

石鏃（第29図130～152）

合計23点出土している。使用されている石材は第11表に示したように多種のものがある。形態も多様であり，小型三角形で抉りがわずかに凹むものや，二等辺三角形状の長身鏃，あるいは無茎の大型三角形鏃などもみられる。129～131は小型三角形を呈し，わずかに抉りが凹むものである。

132～135・137は基部の抉りが比較的深い。138・142・145は長さに比べて幅が狭く細身の二等辺三角形状を呈し，基部は平基もしくはわずかに凹む。139・140は比較的長いものであり最大幅が基部端ではなく，身の中央より少し下にあり，基部はわずかに凹む特徴的な形態をもつものである。146も類似する形態である。147・148は主要剥離面が広く残存する幅広でうすい剥片を素材としたものと考えられ，比較的幅広で側縁は丸味をもつ形態である。149～151はかなり大型のものであり，149は平基で先端部を欠損し，150は基部を欠損するが未製品の可能性も考えられる。151は厚さが1.5cmを超えるものであり，厚みがとれず未製品の可能性も考えられる。

磨製石鏃（第29図152）

頁岩を使用したものであり，両面を入念に研磨したものである。長さ3.3cmと比較的大型であり先端部は中心に研磨による鎬があり，また先端部近くの両側縁も研磨による稜がある。基部は平基で，端部は平坦に研磨されている。

石槍（第29図153）

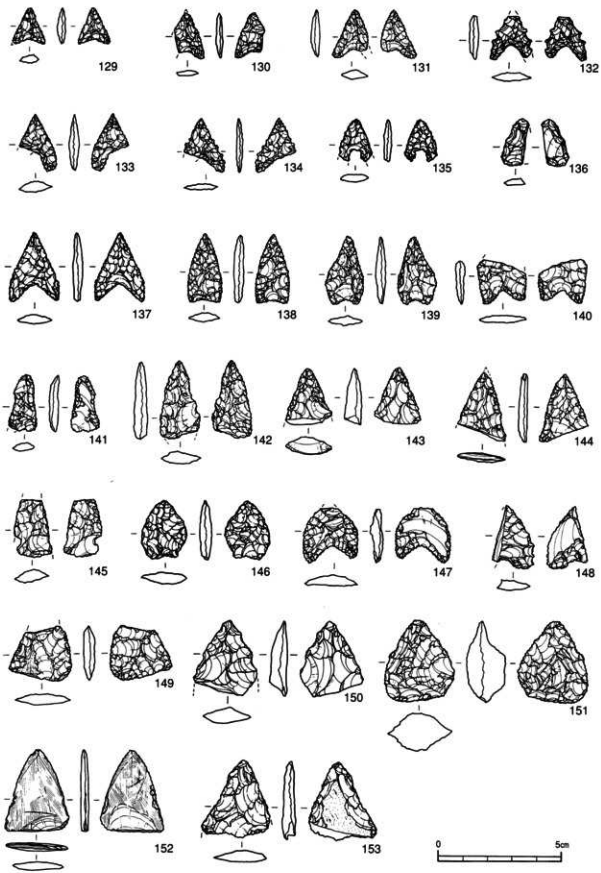
硅質の頁岩を利用したもので，粗い剥離により整形している。先端部のみであり，製作途中の欠損品の可能性あるいは石鏃の未製品の可能性もある。

石匙（第30図154）

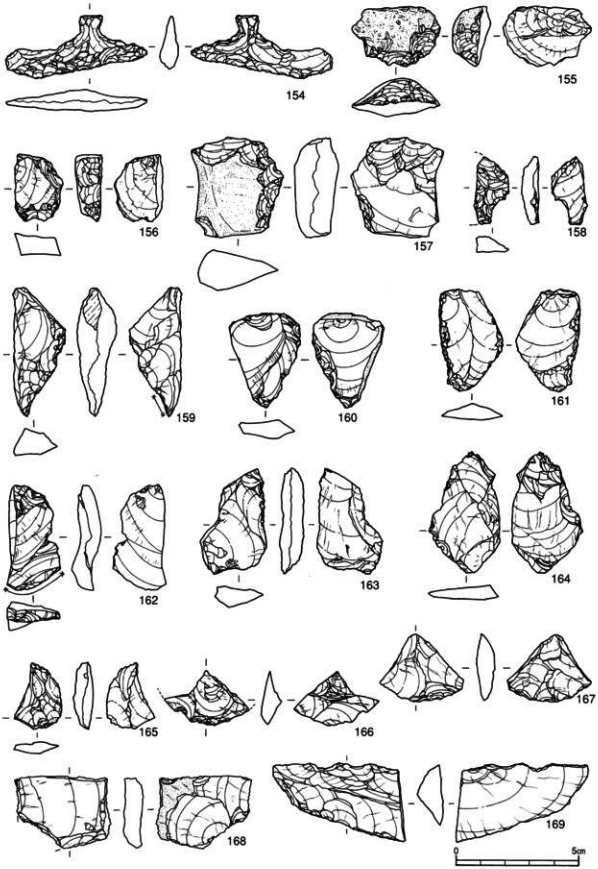
サヌカイトと推定される安山岩を使用し，横長型のものである。幅広の剥片を素材としており，基部の部分の整形剥離と刃部の剥離は角度が急であり，それらの剥離が各々異なることより，刃部は刃を再生した可能性が高いと思われる。

スクレイパー（第30図155～169）

各種の石材が使用されており刃部の角度から掻器（155・156・162・168）と削器に区別できる。155は円礫の表皮が残る黒曜石剥片の末端を粗く急角度の剥離を行い刃部としたものである。156・168は板状剥離の末端を刃部としたものである。これらは形態的に旧石器時代の剥片の使い方及び刃部の形成に特徴が類似しており，いずれもパティナも古く旧石器時代の所産である可能性も考えられる。161はチャートの縦長剥片を素材とし，片側側縁に両側から押圧剥離を行いスクレイパー（削器）としたものであり，縄文時代特有の特徴をもったものである。その他は剥片の縁辺の一部に剥離を行い刃部としたものである。169は頁岩の横長剥片を素材とし，打面部に整形加工を行い，下部の剥片末端を刃部としたものでスクレイパーとしたが，鎌形剥片石器の可能性もある。



第29図　縄文時代の石器1



第30図　縄文時代の石器 2

石錐（第31図170・171）

170は剥片にノッチ状の加工を両側から施し石錐としたものである。171はたんばく石の剥片を使用し，二次加工により突端部を作り出し機能部としたものである。170・171両方とも整形加工の剥離は先端部のみで基部部分は全く施されていない。

使用痕のある剥片（第31図172～178・183）

多様な石材によって得られた剥片の末端や側縁など，鋭利な縁辺に使用痕が認められるものである。使用痕は連続する微細剥離状である。176は鉄石英を石材としたものであり，剥片の側面に剥離面があることより大型石核の打面形成剥片と思われる。

加工のある石器（第31図179・180）

剥片の一縁辺に二次加工が認められたものである。179は主要剥離面の打点に近い部分に二次加工が施されている。180は側縁に二次加工が認められスクレイパーの可能性もある。

楔形石器（第31図181・182）

181はチャート製の節理面のある剥片を利用したものであり，上下両端に使用によると思われる剥離が生じている。182はサヌカイトと思われる安山岩剥片の，折断面から表裏両面に剥離が集中しており楔形石器と考えられる。

石鏃未製品（第31図184）

青灰色で良質のチャート剥片を素材とし，縁辺に二次加工が施されているが，この二次加工は刃部形成目的ではなく整形のためと思われ，石鏃未製品とした。

尖頭器未製品（第31図185）

薄い茶色を呈した硅質の頁岩製であり，剥片の縁辺に粗い大きめの剥離が施されている。ただし，この二次加工も刃部を形成しようとする目的のものではなく，整形途中のものと判断される。

磨製石斧（第32図186）

二つに割れたものが近接した位置で出土した。片面に自然礫面が残り，他面は大きな剥離面である。敲打整形が行われたのち，刃部にのみ主として研磨が施されている。基部は細く，刃部は幅広で湾曲する。石材は頁岩である。

石斧未製品（第32図187）

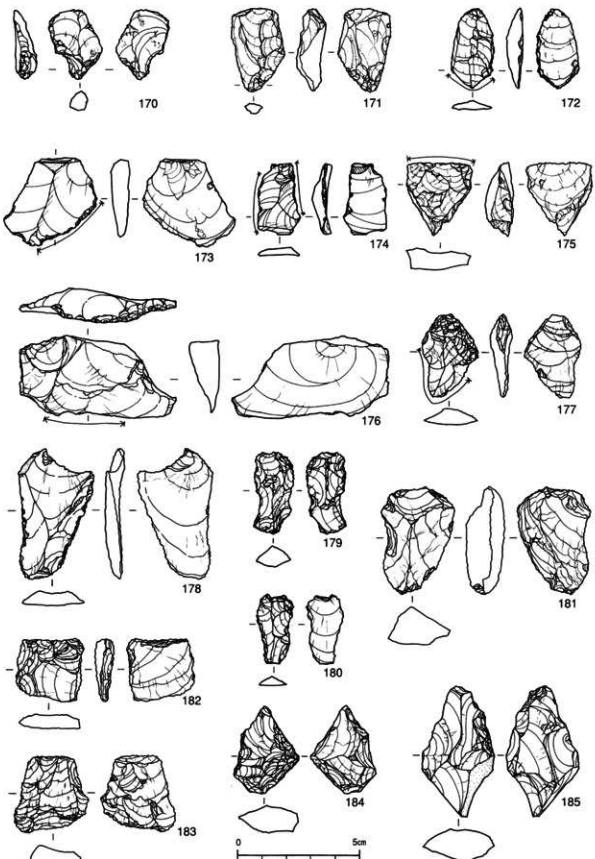
片面に自然円礫面が残っており，縁辺は粗い剥離により整形されている。また，片側側縁は敲打調整が行われている。厚みがあり磨製石斧の未製品と思われる。

打製石斧（第32図188）

薄く目にそって割られた剥片を粗い剥離により整形している。未製品の可能性も考えられるが，土掘具としては完成品と思われる。

礫器（第32図189～194）

189は扁平礫が使用され，対辺の二縁辺に粗い剥離痕が認められるものである。下縁は直線状であり，上縁は内湾状となっている。下縁及び上縁も刃部形成のための剥離ではなく，また下縁は内湾しておらず打ち欠き石錘の人為的整形剥離とも異なる。両端とも両面に同様の剥離が存在し，かつ下縁は直線状につぶれていることより，楔形石器の可能性が推定されうる。上縁の凹みは棒状のもので敲いた可能性が考えられようか。安山岩製である。



第31図　縄文時代の石器 3

190は板状礫を分割し，得られた先端部に粗い剥離が施されている。また分割面にも二次加工が施されている。安山岩製である。

191～194は礫の一縁辺に粗い剥離を施した礫器である。191・194の砂岩製のものは刃部が直角に近く，192・193の頁岩製のものは刃部角が鋭い。193は礫そのものではなく，礫面のある大型剥片を使用したものであるが礫器に区分した。

石核（第33・34図195～200）

195～197は頁岩製の大型石核であり，198～200は黒曜石製の小型石核である。195は表裏二面の作業面があり，それぞれ異なる打面は背面方向に傾斜している。196は平坦な節理面を打面にしたものであり，前後両面の方向から剥離を行っている。打面は剥片剥離前に打面調整を施している。礫器に類似するが石核である。197は大型の剥片が取られた面が残る石核であり，打面は後方に傾斜している。側面及び背面にも剥離面が認められる。

198は日東産系黒曜石の円礫を石材としたものであり，平坦な剥離面を打面として剥片を剥いでいる。また打面も広く剥がされており，打面と作業面を交代させながら剥いでいる。199は上牛鼻産黒曜石の角礫を素材とし，平坦な自然礫面を打面にして正面からのみ剥片を剥いでいる。200は上牛鼻産黒曜石の厚みのある剥片を用い，主要剥離面を打面にしたものである。

搬入黒曜石剥片（第34図201～203）

D－14区で近接して3点出土した。いずれも自然礫面が残る黒曜石の大型剥片である。黒曜石は平坦な自然面をもつ角礫であり，漆黒色を呈し不純物がない極めて良質なもので腰岳産と思われるものである。202は先端部をうすく剥ぎ，その打面を細かく調整し，そこで止めている。201と202は接合した（204）。203は別の母岩である。

磨石・敲石類（第35図205～214）

磨石・敲石類は使用部位及び使用痕の違いにより6類に区分できる。

1類（205）

両面に顕著な磨面があり，その上に両面とも敲打痕が残っている。側面は全周にわたり敲打痕が認められ面状につぶれている。

2類（208・209）

いずれも半分欠損しているが，両平坦面は直線的に近い平坦面になるまで使用され変形し，側面はそれぞれ平坦状に磨られ変形し，全体形は石鹸形を呈するものである。

3類（210）

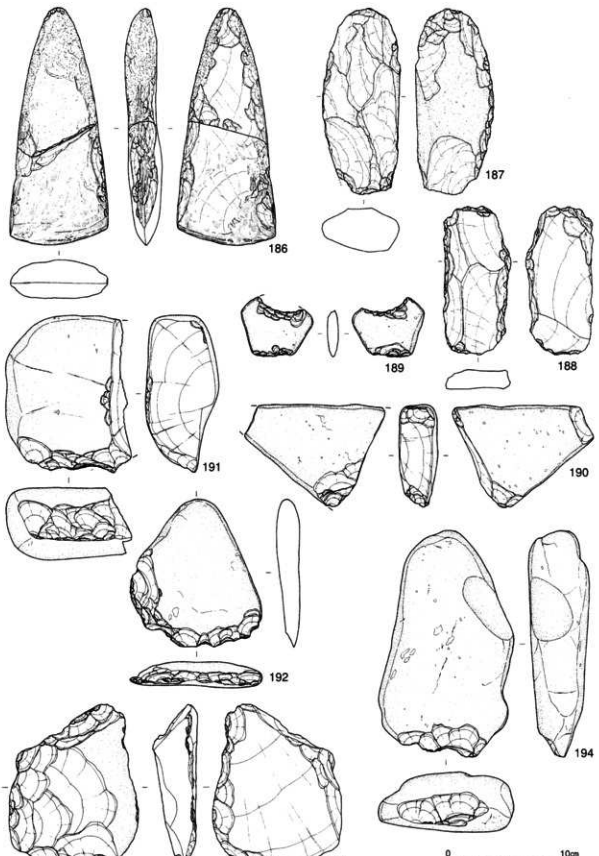
比較的小型であり，両面は顕著な磨面が存在する。側面は両端がそれぞれ「八の字」形の部分が面的に磨られており，全体形が紡錘形に近い形状となる。

4類（206・207）

円礫が使用されており，両面は使用があるが礫の曲面のままとなっている。側面は使用された痕跡は認められず曲面のままである。

5類（211）

粒子の細かい砂岩礫が使用されている。使用部位は礫の平坦部ではなく，両端の球い端部のみに敲打痕が観察される。典型的なハンマーストンである。



第32図　縄文時代の石器 4

6類（212～214）

使用されている礫は整った楕円形ではなく不整円形が共通している。礫に面的な部分は存在するものの磨石としての使用痕は明確でなく，敲打痕が多くの部位で確認される。

石皿（第36・37図215～218）

215は比較的厚い砂岩角礫を利用したものであり，使用面は片側のみである。一部を欠損している。216は扁平な安山岩の板状石を利用したものであるが，使用痕が認められるのは片側のみであり，使用面は平坦で凹みは認められない。これも一部を欠損している。

217は使用面が皿状に凹むものであり他と比較すると使用度が高かったと思われる。左側面は自然面であるが，右側面には敲打痕が観察され，折断の後敲打調整により整形して長方形に整えたと考えられる。

218は最大長42cmを超し，重量約19kgの大型品である。使用面は片面のみであるが，使用により中央部は凹んでいる。

台石（第37図219）

平坦面には部分的に石皿として使用されたと思われる磨面が残存しているが，平坦面は径15mm程度の浅い凹みが多く，一見すると蜂ノ巣石に類似するが，敲打痕も多く観察されることより，石皿を転用した台石と思われる。

砥石（第36図220，第37図221）

220は手の平大の扁平な砥石であり，表面及び裏面と側面も使用されている。特に片側平坦面は幅11mm長さ72mmで浅く細長い溝状の使用面が残っている。また端部には敲打痕も観察される。さらに反対側の折れた部分にも多くの敲打痕が認められる。

221は長さ45cmを超す大型のものであり，表・裏・両側面の全体に使用痕が認められる。特に比較的広い表裏面は凹みが生じるほど使用されている。

石斧集積遺構の石器（第38図，図版16）

写真から判断すると中心部に石斧類と大型の剥片が，その周辺に小円礫と剥片類が出土している。222・226の間に229があり，その下に223・224・225が重なっている。若干離れた位置にある小円礫などが同様に遺構一括遺物として判断できるかどうか，明確な掘り込みが確認できてなく不明確である。

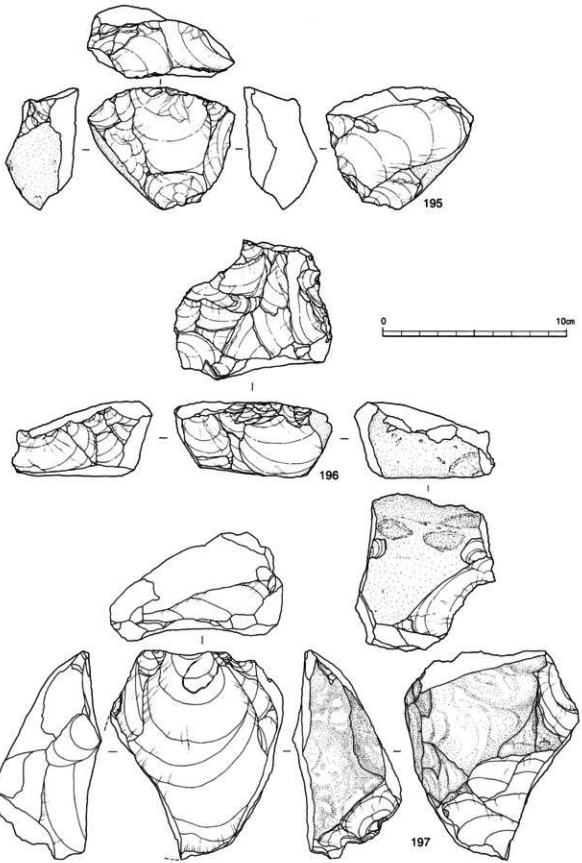
打製石斧（222～225）

222は比較的大型のものであり，全体は粗い剥離により整形されている。左側平坦面の一部及び側縁の一部には剥離以前の研磨を施された痕跡が残存しており，磨製石斧を新たに整形剥離し再生したものである。

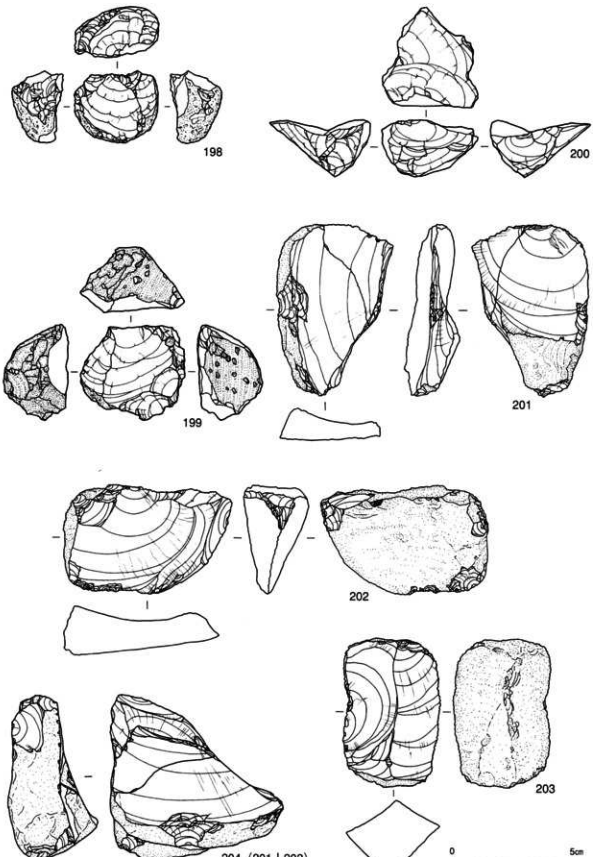
223は扁平な礫に周辺から比較的丁寧な剥離により整形されたものである。224も粗い剥離により整形されているが，一部に剥離前の研磨痕が観察されることより磨製石斧を再生したものである。225は表皮の残存剥片に整形剥離を施したもので，刃部には磨滅した使用痕が認められる。

鎌形剥片石器（227・228）

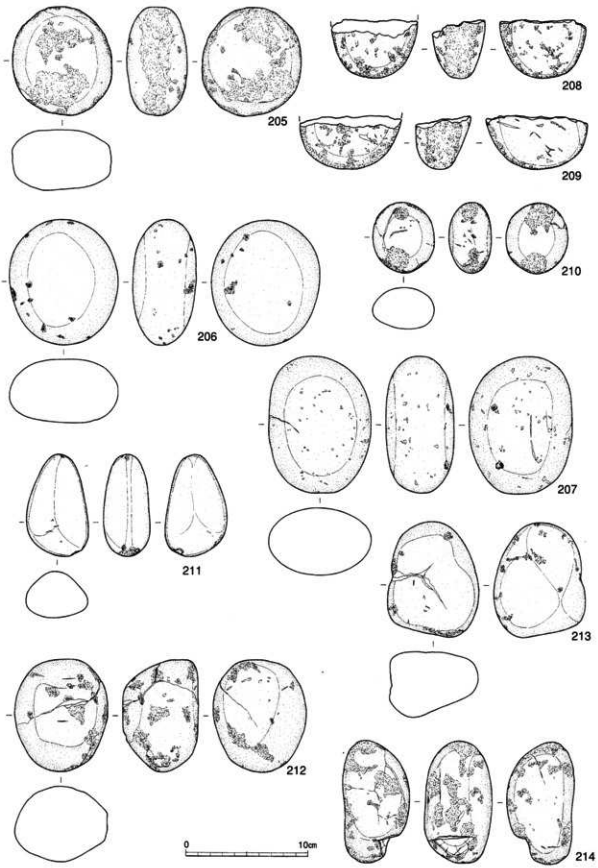
いずれも横長剥片を利用し，剥片の末端にできる鋭い縁辺を刃部としたものであり，刃部以外の背縁は粗く整形加工を施している。刃部には使用痕が観察される。



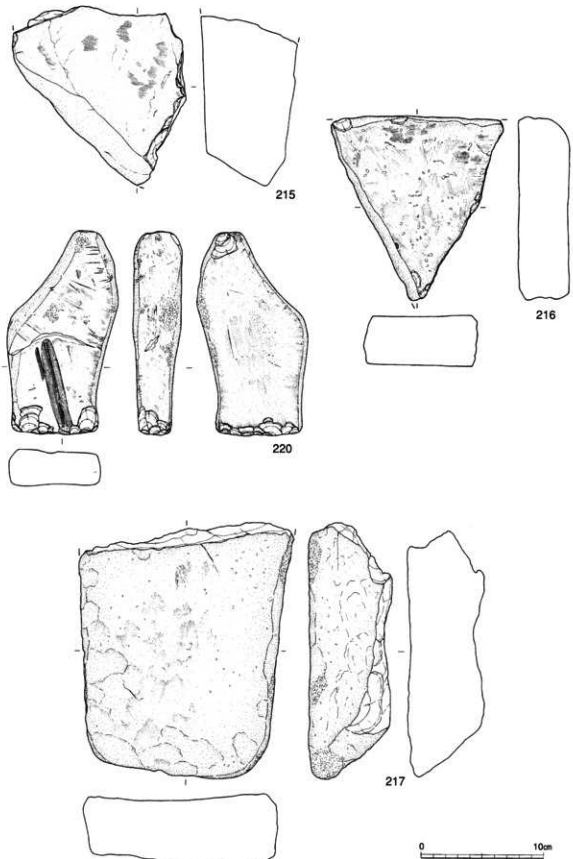
第33図　縄文時代の石器 5



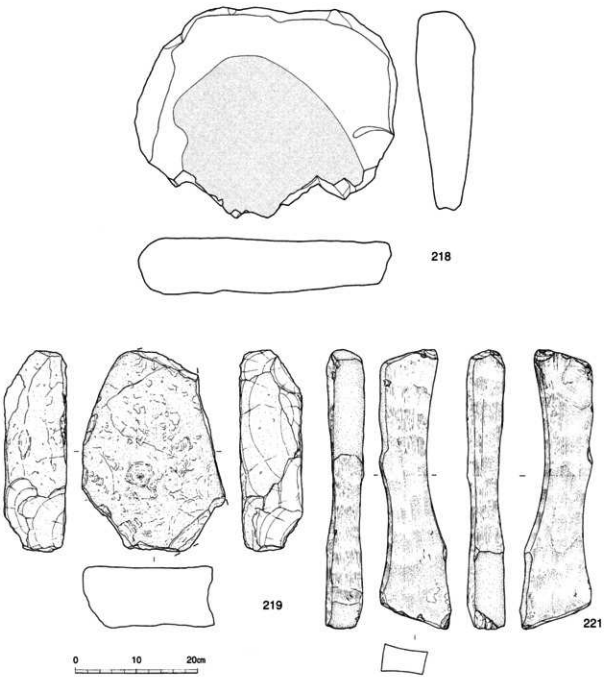
第34図　縄文時代の石器 6



第35図　縄文時代の石器 7



第36図　縄文時代の石器 8



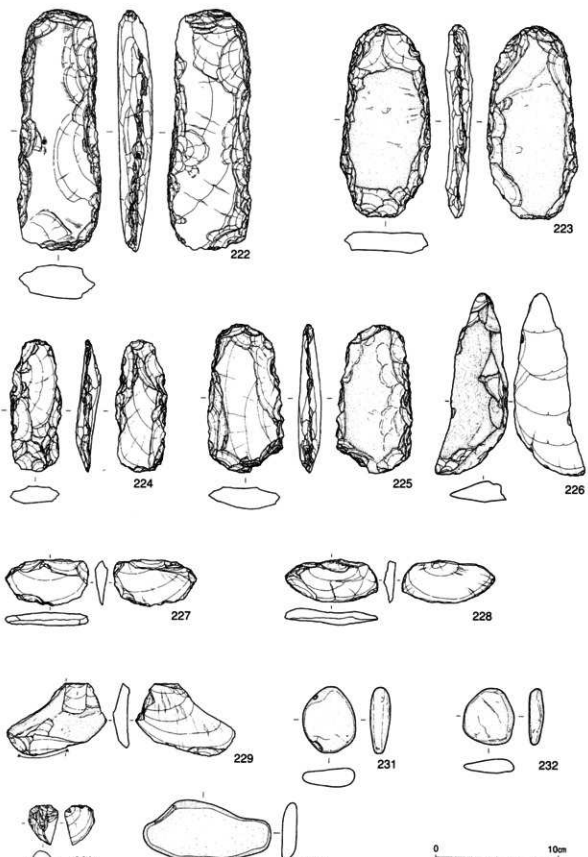
第37図　縄文時代の石器 9

剥片（226・229・230）

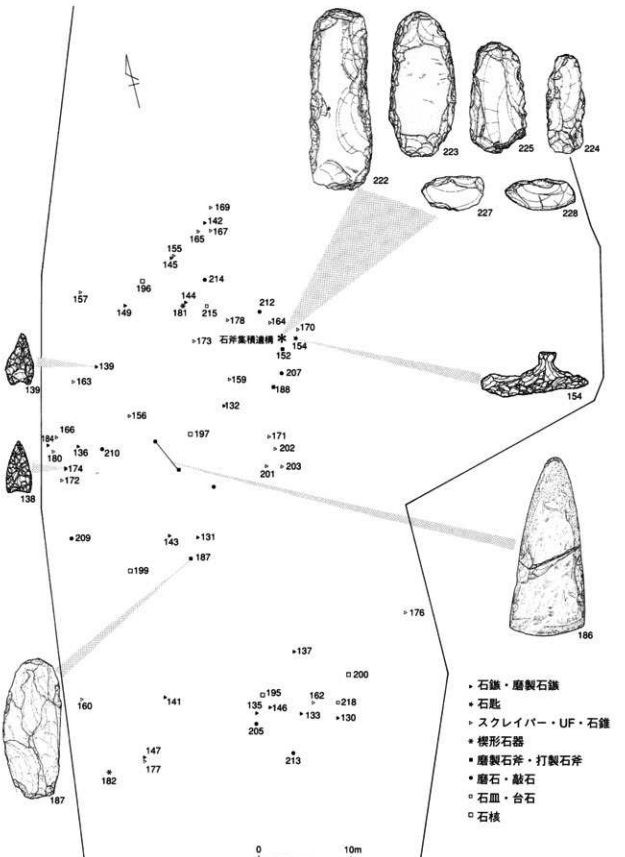
226は比較的大型の縦長剥片の表皮部分，229は横長剥片で縁辺に使用痕が認められ，230はチャートの剥片である。

小円礫（231・232・233）

231と232はいずれも扁平な小円礫である。手持ち砥石の可能性もあるが使用痕などは認められない。233は頁岩の扁平礫である。



第38図　縄文時代の石器10（石斧集積遺構）



第39図　縄文時代の石器出土分布

第12表　縄文時代石器計測表（1）

挿図番号	番号	器種	出土区	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号
29	129	石鏃	D7	黒曜石(D)	1.45	1.3	0.35	0.35	D5
	130	石鏃	D8	チャート	1.85	1.05	0.3	0.41	D6−434
	131	石鏃	E10	安山岩	1.95	1.45	0.35	0.57	E8−174
	132	石鏃	E12	黒曜石(C)	1.8	1.6	0.35	0.71	E10−489
	133	石鏃	D6	黒曜石(A)	2.3	1.5	0.4	0.81	D4−69
	134	石鏃	D6	黒曜石(C)	2.2	1.65	0.25	0.46	D4
	135	石鏃	F12	黒曜石(D)	1.7	1.25	0.3	0.48	F10−81
	136	石鏃	E11	黒曜石(D)	1.95	0.9	0.3	0.58	E9−116
	137	石鏃	D14	安山岩	2.8	2.1	0.4	1.50	D12−12
	138	石鏃	F9	チャート	2.8	1.4	0.4	1.33	F7−112
	139	石鏃	F10	たんぱく石	2.75	1.6	0.4	1.33	F8−297
	140	石鏃	F14	たんぱく石	1.75	1.95	0.4	1.00	F12−667
	141	石鏃	E6	黒曜石(C)	2.3	1.15	0.35	0.85	E4−454
	142	石鏃	E12	頁岩	3.15	1.6	0.5	2.29	E10−226
	143	石鏃	E8	チャート	2.3	1.9	0.7	2.20	E6−176
	144	石鏃	E11	硅質頁岩	2.75	2.0	0.35	1.33	E9−216
	145	石鏃	E13	安山岩	2.35	1.5	0.45	1.46	E11−710
	146	石鏃	F12	チャート	2.4	1.8	0.5	2.18	F10−84
	147	石鏃	F6	チャート	2.2	2.2	0.45	1.82	F4−467
	148	石鏃	D7	黒曜石(D)	2.5	1.65	0.4	1.51	D5
	149	石鏃	F11	黒曜石(D変)	2.25	2.5	0.45	2.22	F9−281
	150	石鏃	D15	安山岩	3.05	2.6	0.7	3.79	D13
	151	石鏃	C7	チャート	3.3	2.8	1.55	11.82	C5
	152	磨製石鏃		頁岩	3.3	2.55	0.3	2.65	741
	153	石槍	B13	頁岩	3.2	2.7	0.55	3.41	B11
30	154	石匙	D14	安山岩(サヌカイト)	5.7	2.15	0.9	5.56	D12−718
	155	スクレイパー	E13	黒曜石(B)	2.4	3.6	1.45	10.82	E11−245
	156	スクレイパー		黒曜石(B)	2.7	1.9	1.1	6.71	126
	157	スクレイパー	F11	チャート	4.1	3.45	1.8	29.46	F9−272
	158	スクレイパー	B14	黒曜石(A)	2.8	1.85	0.65	2.42	B12
	159	スクレイパー	E12	チャート	5.3	2.1	1.6	12.93	E10−497
	160	スクレイパー	F6	黒曜石(C)	3.9	2.9	0.75	9.61	F4−450
	161	スクレイパー	D7	チャート	4.2	2.5	0.6	8.40	D5
	162	スクレイパー	D6	黒曜石(C)	4.3	2.05	0.85	6.20	D4−66
	163	スクレイパー	F12	たんぱく石	4.35	2.65	0.9	8.93	F10−572
	164	スクレイパー		チャート	5.0	2.4	0.55	10.41	747
	165	スクレイパー	E11	安山岩	2.75	1.85	0.8	3.23	E9−240
	166	スクレイパー	F12	チャート	2.2	3.1	0.75	3.92	F10−97
	167	スクレイパー	E11	安山岩	2.75	3.4	0.75	5.76	E9−225
	168	スクレイパー	B14	黒曜石(A)	2.95	2.8	0.9	14.24	B12
	169	スクレイパー	E12	頁岩	3.2	5.15	1.0	19.53	E10−232
31	170	石錐		黒曜石(A)	2.85	1.95	0.85	3.73	744
	171	石錐		たんぱく石	3.4	2.15	1.0	6.62	731
	172	UF	E10	たんぱく石	3.3	1.7	0.7	2.73	E8−106
	173	UF	E12	頁岩	3.6	3.4	0.8	9.24	E10−538
	174	UF	E12	黒曜石(C)	2.9	1.7	0.6	2.56	E10−112
	175	UF	F10	黒曜石(B)	3.0	2.7	1.1	6.97	F8−239
	176	UF	C7	鉄石英	3.35	6.4	1.3	20.53	C5−398
	177	UF	F6	チャート	3.4	2.25	0.9	4.73	F4−444
	178	UF	E12	頁岩	5.4	3.05	0.65	7.58	E10−519
	179	加工のある石器	E12	チャート	3.35	1.6	0.8	4.96	E10−90
	180	加工のある石器	E12	頁岩	2.85	1.45	0.35	1.49	E10−99

第13表　縄文時代石器計測表（2）

挿図番号	番号	器種	出土区	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
31	181	楔形石器	E13	チャート	4.4	3.0	1.55	15.92	E11−628
	182	楔形石器	F6	安山岩	2.55	2.65	0.75	4.58	F4−447
	183	UF	E9	黒曜石(B)	3.15	2.95	1.05	9.30	E7−215
	184	石鏃未製品	E13	チャート	3.6	2.45	1.1	7.84	E11−98
	185	尖頭器未製品	E13	硅質頁岩	5.35	2.95	1.25	18.05	E11−91
32	186	磨製石斧	F9·E9	頁岩	19.3	8.1	3.2	570.00	F7−131·E7−149
	187	磨製石斧未製品	E8	頁岩	15.1	6.1	3.6	415.00	E6−183
	188	打製石斧		頁岩	12.0	5.4	1.6	138.65	737
	189	礫器	D14	安山岩	5.55	5.1	1.1	27.17	D12−18
	190	礫器	E14	砂岩	8.3	10.65	3.15	392.50	E12−表
	191	礫器	D5	安山岩	12.85	9.9	5.85	1187.50	D3−422
	192	礫器	B13	頁岩	12.0	10.4	1.89	268.58	B11
	193	礫器	E10	頁岩	13.45	15.5	3.6	480.00	E8−323
	194	礫器	C6	砂岩	18.55	10.4	5.85	1220.00	C4−435
33	195	石核	F12	頁岩	6.65	8.0	3.65	112.46	F10−86
	196	石核	F11	頁岩	7.65	8.55	4.0	293.76	F9−321
	197	石核	E9	頁岩	11.35	9.4	5.15	530.00	E7−151
34	198	石核	E11	黒曜石(B円礫)	3.0	3.45	2.1	20.16	E9−552
	199	石核	F14	黒曜石(A)	3.85	4.3	2.6	36.20	F12−146
	200	石核	E15	黒曜石(A)	4.0	3.7	2.0	27.39	E13−49
	201	フレイク	D14	黒曜石(C)	7.0	4.5	2.1	111.43	D12−726
	202	フレイク	D14	黒曜石(C)	4.4	6.7	2.6	66.52	730
	203	フレイク	D14	黒曜石(C)	6.1	3.85	2.8	66.46	727
	204	（接合資料201+202）		黒曜石(C)	7.0	6.7	3.5	177.95	
35	205	磨石	D6	砂岩	8.8	8.15	5.0	505.00	D4−80
	206	敲石	D7	安山岩	10.2	8.9	5.2	605.00	D5
	207	磨石		安山岩	11.2	8.4	5.55	780.00	740
	208	磨石	E9	安山岩	4.75	6.95	4.25	165.56	E7−157
	209	磨石	F8	砂岩	4.35	8.2	4.35	186.35	F6−139
	210	磨石	F9	砂岩	5.7	5.0	3.4	137.26	F7−122
	211	敲石	B13	砂岩	8.4	5.05	3.8	201.04	B11
	212	敲石		安山岩	9.15	7.6	6.2	520.00	756
	213	磨石	D6	安山岩	9.35	7.3	5.4	400.00	D4−423
	214	敲石	E11	砂岩	10.0	5.4	5.4	400.00	E9−319
36	215	石皿	E11	砂岩	14.2	13.4	7.8	1655.00	E9−318
	216	石皿		安山岩	15.15	13.95	4.1	1140.00	
	217	石皿		安山岩	32.2	22.2	10.2	9900.00	
37	218	石皿	D6	安山岩	42.2	34.4	13.7	18900.00	D4−60
	219	台石		安山岩	33.4	22.1	9.1	3100.00	
36	220	砥石		砂岩	16.7	8.4	3.95	785.00	
35	221	砥石	E16	砂岩	45.8	11.8	6.0	3700.00	E14−702
38	222	打製石斧	デポ	頁岩	19.7	6.8	2.6	525.00	デポ763
	223	打製石斧	デポ	頁岩	15.8	7.1	2.15	289.96	デポ768
	224	打製石斧	デポ	頁岩	10.8	4.15	1.4	70.23	デポ760
	225	打製石斧	デポ	頁岩	12.1	6.2	1.85	166.91	デポ759
	226	フレイク	デポ	頁岩	14.7	4.5	1.7	130.08	デポ762
	227	鎌形剥片石器	デポ	頁岩	3.8	6.8	1.0	29.40	デポ765
	228	鎌形剥片石器	デポ	頁岩	3.5	7.5	0.85	33.09	デポ766
	229	フレイク	デポ	頁岩	5.95	7.3	1.15	46.54	デポ762
	230	フレイク	デポ	チャート	3.2	2.35	1.1	8.10	デポ757
	231	小円礫	デポ	砂岩	5.4	4.3	1.5	50.17	デポ758
	232	小円礫	デポ	砂岩	4.6	4.1	1.2	29.81	デポ767
	233	扁平礫	デポ	頁岩	10.4	4.9	1.2	93.06	デポ764

第７節　平安時代の遺物

丘陵部において，平安時代のものは塊と鉄製刀子が出土したのみであり，他には表土から甕の破片が１点出土しているのみである。

出土状況（図版28参照）

土師器塊と刀子は，接して出土したのみでなく，刀子のサビが土師器塊に付着しそのまま固まった状況で出土した。塊は完全なものであり，明確な土坑の存在は確定されていないが，このような出土状況は土坑墓の可能性が高いと推定される。

塊（第40図234）

口径約13㎝，器高5.5㎝を測るものである。高台は「ハ」の字に広がり，体部は内湾気味に立ち上がり，口縁はわずかに外反する。内外面ともナデ調整であり，底部は回転ヘラ切りの後，輪高台を付けナデている。

刀子（第40図235）

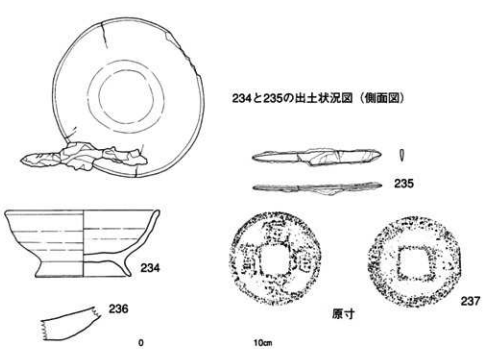
鉄製であり，中子4.5㎝，刃部は長さ約6㎝，幅は元の方で約1.5㎝を測り，かなり使い込まれたものと思われる。

甕（第40図236）

表土中から出土したもので底部片である。

この他，表土中より近世の古銭が１枚出土している。

第40図237は寛永通寶である。



第40図　平安時代の遺物及び近世の古銭

第Ⅳ章　低地部（前畑）の調査成果

第１節　発掘調査の方法と概要

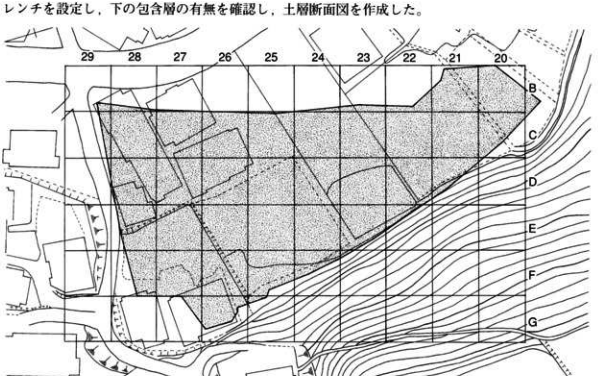
調査は，新幹線建設予定の中央ラインを基準として，西から東方向へA～G，南から北方向に19～29区まで10mを単位としたグリッドを設定した。（第41図）

北側部分は住居の移転が終了していなかったため，畑地となっていた南側部分を中心に７ヶ所の確認トレンチを設定し，確認調査を開始した。その結果，全てのトレンチから遺物の出土を確認し，７トレンチでは配石状の遺構も確認されたため全面調査に切り替えた。

平成10年度は，畑地となっていた未買収地を除くB～F－19～26区の遺物包含層掘り下げと遺構の検出を７月から行った。始めにE・F－24・25区の掘り下げから始め，順次南側に向かって調査範囲を広げていった。当初は丘陵部と並行しての調査となり作業員を二つに分けて行った。丘陵部の調査が終了した９月からは全員で全面調査を実施し，10月末に終了した。その結果，古代～中世にかけての土師器，須恵器，青磁，白磁，近世の薩摩焼などが出土した。遺構としては列状配石，礫を敷いた五輪塔の地輪部，大型の土坑などが検出された。

平成11年度は，未調査部分B～G－27～29区について住居の移転，更地化を待ち，12月から２月にかけて全面調査を行った。すでに撹乱された部分もあったが，調査の結果昨年に引き続き中世～近世の遺物が出土し，特に近世の薩摩焼や染付が遺物の主体であった。遺構では近世の大型掘立柱建物跡が数多く検出されたほか，溝状遺構や井戸状遺構，池状遺構なども検出された。

なお，21区；23区ラインの北側，27区ライン南側，C区，D区，E区ラインの西側に下層確認トレンチを設定し，下の包含層の有無を確認し，土層断面図を作成した。

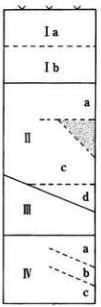


第41図　低地部（前畑）のグリッド配置図

第２節　遺跡低地部の層位

低地部は中間川の河岸段丘の最上面に位置し，現在は調査区域の北側が宅地，南側が畑地として利用されている。標高は約50～52ｍで東側にわずかに傾斜を持つ。

基本土層は下のようになる。



第42図　低地部の基本土層柱状模式図

Ⅰ層　表土。耕作土である。現在の耕作土Ⅰa層の下はシラスの白色粒子が混在した旧耕作土（Ⅰb）である。

Ⅱ層　黒褐色土。軟質であり，古代～近世までの遺物包含層である。北側は，４枚に区別できる。

Ⅱa層---暗褐色土。やわらかい土である。

Ⅱb層---黄褐色土のブロックが混在した造成層。

Ⅱc層---黒褐色土。Ⅱa層より色調が暗い。

Ⅱd層---暗青灰色土。粘質であり，鉄分の沈着が認められる。古い水田面と考えられる。

Ⅲ層　黄褐色土。軟質であり，アカホヤ火山灰の二次堆積と思われる。

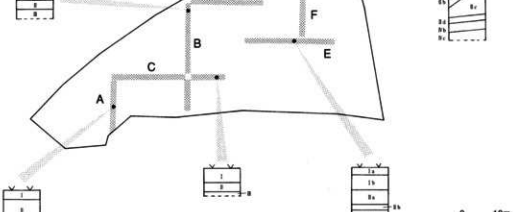
Ⅳ層　黒褐色粘質土。北側では中間に別の堆積物をはさむ。

Ⅳa層---黒褐色土。

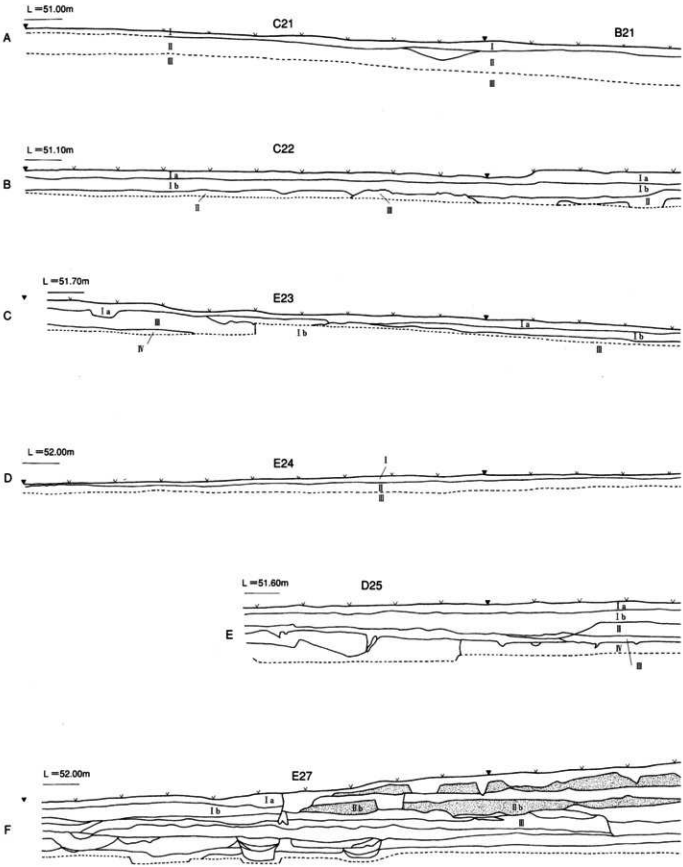
Ⅳb層---黄褐色土。シラスの水成二次堆積と思われる。

Ⅳc層---黒褐色土。

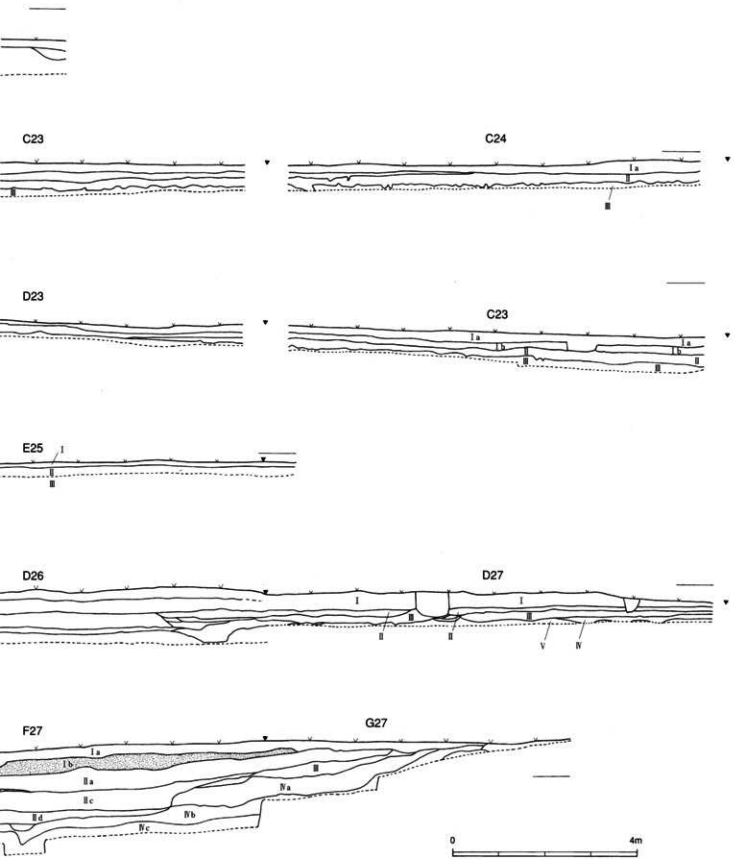
このように，北側と南側は基本的な層順は一致するものの，平坦な畑地としての南側と，近接した丘陵からの土砂の流れや，かつて水田として利用されたことを示す青灰色粘質土が認められる北側との違いがある。各地点の土層柱状図は下に，また全体土層図は次頁に掲載した。



第43図　低地部の各地点の土層


A
L=51.00m
C21
B21
B
L=51.10m
C22
C
L=51.70m
E23
D
L=52.00m
E24
E
L=51.60m
D25
F
L=52.00m
E27

第44図　低



地部の土層断面図

第３節　縄文時代の遺物

低地部の縄文時代の遺物はⅡ層より出土し，土器片５点，石器19点の計24点であった。縄文土器は早期～前期のものが認められた。石器は多種の器種が出土し，時期は限定できないが，ほぼ同時代のものが多いと思われる。

出土分布（第45図）

縄文時代の出土分布は，第45図に示したように，調査区の南東側に当たるB・C－20～24区を中心に出土している。特に土器・石器の集中した出土は見られず，全体的に広がった状態で出土している。北側から２点出土しているが，近世の遺物と混在した状態であり，260は池状遺構の埋土より出土している。

出土土器（第46図238～242，第14表）

238～240は，貝殻腹縁によるやや太めの横位の沈線文を施したものであり，内面はナデ調整である。縄文時代前期の曽畑式土器の胴部と思われるが，全体器形は明確でない。

241は，外面に横位の条痕を施す土器片であるが，小片のため詳しくは不明である。

242は平底の底部であり，直行する底部からやや開く胴部を持つものであり早期の土器と思われる。

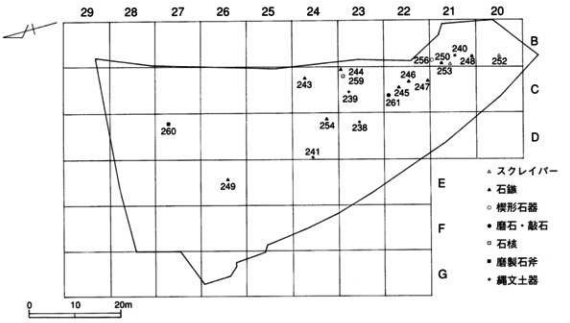
それぞれの詳細は第14表に示した。

出土石器（第15表）

低地部から出土した縄文時代の石器は，数は少ないが多種である。中でも石鏃が最も多く，９点であり，スクレイパー，石錐，楔形石器が各２点，細石刃様剥片，石核，磨製石斧，磨石・敲石が各１点である。それぞれの出土区，石材，計測値などは，第15表に示した。

石鏃（第46図243～251）

合計９点出土しており，石材は黒曜石６点，たんぱく石，チャート，頁岩各１点である。黒曜石の内訳は，腰岳系３点，針尾系３点である。三角形で薄く，基部が凹む凹基式がほとんどであり，



第45図　縄文の遺物出土分布（低地部）

その中には小型のものや二等辺三角形のもの，基部に膨らみを持つもの，大型のものなどが認められた。

243～246は，小型三角形を呈し，抉りがわずかに凹むものであり，246は，先端及び脚部を欠損する。

247・248は比較的長いものであり，最大幅が基部端でなく身の中央より少し下にあり，抉りがわずかに凹む特徴的な形態を持つものである。

249は，長さに比べて幅の狭い細身の二等辺三角形を呈した長身鏃である。250は，頁岩の剥片を周縁のみ加工を施したもので，平坦な剥離面が残存している。

251は，最大長4.5cm，最大幅2.7cmとやや大型であり，細かい押圧剥離により丁寧に仕上げている。両側縁は鋸歯状を呈している。

スクレイパー（第46図252・253）

252は，黒曜石の一部表皮の残る縦長剥片を素材とし，先端と側縁に片面から連続した押圧剥離を行い刃部を形成しているスクレイパーである。先端部に剥離が見られる。253は，たんぱく石の一部表皮の残る不定形剥片の縁片に二次加工を施し，刃部としている。ノッチであると思われる部位が円弧状に認められる。

石錐（第46図254・255）

254は，両面全体に整形剥離を施し，細かい調整により機能部を作り出している。先端部には使用痕が観察される。255は，小さな剥片の一部に加工を施し，尖った機能部を作り出している。一部礫皮面が残る。石材はいずれもチャートである。

楔形石器（第46図256・257）

256は，チャートの剥片を利用したもので，上下からの剥離が顕著である。下端部を一部欠損する。257は，鉄石英を用いたものであり，粗い剥離により整形してある。機能部はしっかりしており，下端部位に剥離が集中し，使用痕が著しく残る。

細石刃様剥片（第46図258）

258は，大きさや形状などが細石刃に近い剥片である。Ⅱ層遺物包含層からの出土であり，低地部でただ1点であることから，縄文時代の石器製作の際の押圧剥離のチップである可能性が高いと思われる。

石核（第46図259）

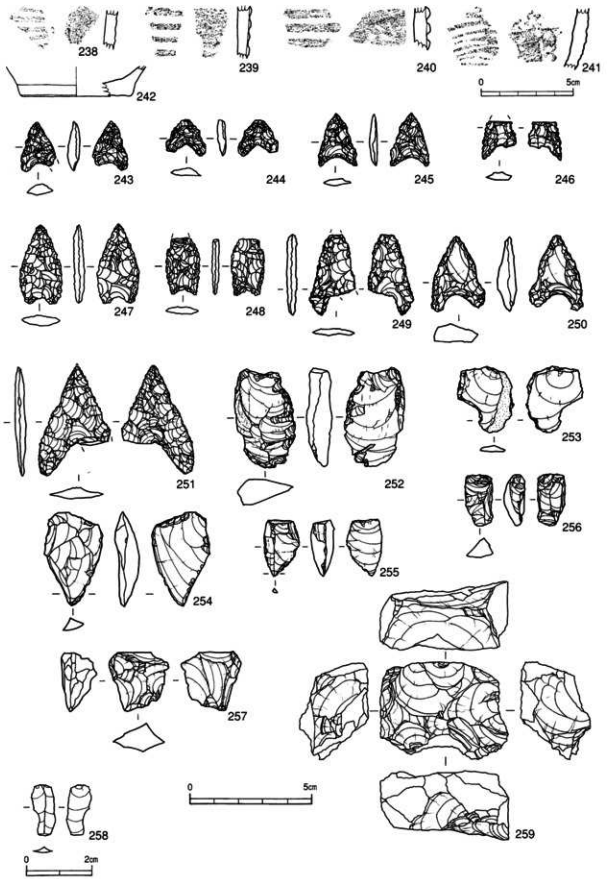
259は，チャートの角礫を使用したやや小型の石核である。作業面は表の1面であり，上・下・左・右の各面を打面として剥片剥離を行っている。打面は剥離調整を施さず平坦面であり，移動しながら剥離作業を行っている。

磨製石斧（第47図260）

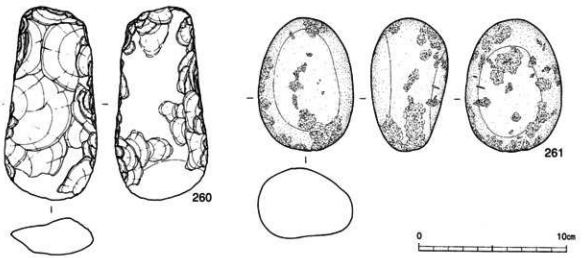
260は，裏面に自然礫面が残り，短冊型を呈する磨製石斧である。粒子の細かい砂岩の横長剥片を使用している。直線状の基部は粗い剥離によって整形され，弧状の刃部のみ研磨されている。ローリングを受け，全体的に摩耗している。

磨石・敲石（第47図261）

261は，表に磨面の残る磨石である。裏面にやや凹んだ面が見られるが，磨痕や敲痕が見られないことから自然面である。周縁部に著しい敲打痕があり，敲石としても使われていたと思われる。安山岩の円礫を利用している。



第46図　低地部の出土遺物1（縄文1）



第47図　低地部の出土遺物２（縄文２）

第14表　低地部の遺物観察表１（縄文）

角閃：角閃石，火ガ：火山ガラス

挿図番号	番号	分類	部位	出土区・層	色調 外面	色調 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 輝石	胎土 火ガ	胎土 他	内面調整	焼成	取上番号
46	238	1	胴部	D23Ⅱ	茶褐色	褐　色		○	○				ナデ	良	916
	239	1	胴部	1TⅡ	茶褐色	褐　色		○	○				ナデ	良	264
	240	1	胴部	B21Ⅱ	茶褐色	褐　色		○					ナデ	良	1132
	241	2	胴部	E24Ⅱ	明茶褐色	褐　色		○	○		○		ナデ	良	883
	242	3	底部	E27	淡赤橙色	暗茶褐色		○	○		○		ナデ	良	溝

第15表　縄文時代石器計測表（3）

挿図番号	番号	器種	出土区	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	取上番号
46	243	石鏃	C24	黒曜石(C)	2.0	1.4	0.45	0.98	603
	244	石鏃	C23	黒曜石(C)	1.45	1.6	0.35	0.53	613
	245	石鏃	C22	黒曜石(C)	2.15	1.6	0.3	0.76	786
	246	石鏃	C22	黒曜石(D)	1.55	1.4	0.3	0.50	767
	247	石鏃	C22	たんぱく石	3.2	1.7	0.4	1.94	1260
	248	石鏃	B21	チャート	2.3	1.35	0.25	1.01	989
	249	石鏃	E26	黒曜石(D)	3.3	1.7	0.4	2.00	1481
	250	石鏃	B21	頁　岩	3.05	2.1	0.75	3.51	1166
	251	石鏃	D23	黒曜石(D)	4.45	2.7	0.45	3.08	
	252	スクレイパー	B20	チャート	4.05	2.35	1.05	9.52	1363
	253	スクレイパー	B21	たんぱく石	2.75	2.2	0.25	3.28	1173
	254	石錐	D24	チャート	3.8	2.3	0.85	7.13	542
	255	石錐	B20	チャート	2.3	1.4	0.95	2.80	1048
	256	楔形石器	B21	チャート	2.1	1.1	0.8	1.77	1119
	257	楔形石器	D24	鉄石英	2.4	2.4	1.4	6.25	
	258	細石刃様剥片	D21	黒曜石(A)	1.4	0.6	0.15	0.17	1240
	259	石核	C23	チャート	4.0	5.2	2.8	59.92	616
47	260	石斧	D27	砂　岩	13.1	6.3	2.5	268.27	池
	261	磨石	C22	安山岩	9.0	6.5	5.2	322.82	928

第４節　古代～中世の遺構と遺物

古代～中世の遺物は，調査区の南側を中心に土師器，須恵器，青磁，白磁等が出土しており，遺構は列状石列，五輪塔（地輪）を持つ配石遺構が検出された。古代と中世の明確な区別が困難な面もあることより，ここでは古代～中世として掲載する。

１．中世の検出遺構（第49図）

古代～中世の時期と考えられる検出遺構は，Ⅲ層上面でⅡ層黒褐色土が埋土となって検出されている。検出遺構は，南北方向に伸びる列状石列と五輪塔（地輪）を持つ配石遺構で，いずれも調査区の南側で検出された。

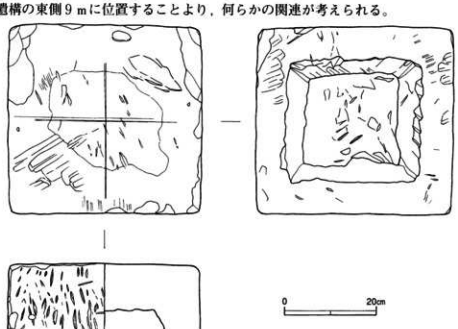
五輪塔（地輪）を持つ配石遺構（第50図）

B－20区で五輪塔の地輪部が検出され，周辺を丁寧に精査しながら調査した結果，地輪底部の下より径20cmを超す比較的大型の円礫を方形に敷き詰め，その上に５～10cm程度の円礫や角礫を中心部に集中して充填した配石遺構が検出された。配石は東西５ｍ，南北5.3ｍで，地輪は中心よりやや西側に位置していた。このような検出状況から，五輪塔を安定して据えるための基礎部分と考えられる。

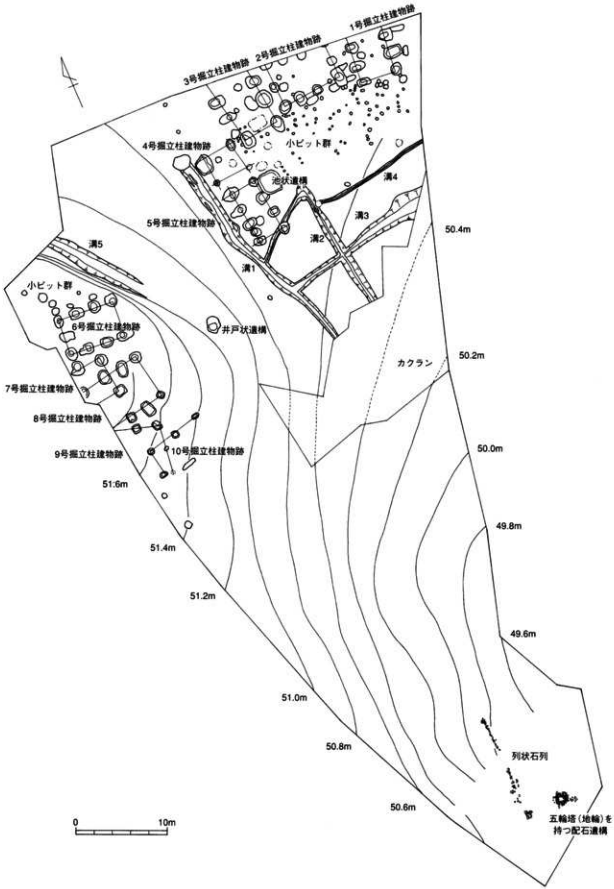
地輪は，縦40.5cm，横41.8cm，高さ16.2cmの方形で，凝灰岩製である。上面には中心で直交する刻線が計３本，裏面には重量を軽くするためと思われる約30cm四方，深さ６cm程度の彫り込みが見られる。また，全面に多数のノミ痕が観察されたが，梵字などの刻書は認められない。（第48図）

列状石列（第50図）

B－20区からC－21区にかけて南北方向に検出された。径20cm以上の比較的大型の円礫や角礫を，ほぼ直線状に並べてあり，総延長は撹乱部分を含め約41ｍである。石列の南側B－20区で礫が並んでいない部分が確認されるが，その後の堆積状況により動いたものと推察される。五輪塔（地輪）を持つ配石遺構の東側９ｍに位置することより，何らかの関連が考えられる。



第48図　五輪塔（地輪）



第49図　低地部の遺構配置図

第50図　五輪塔（地輪）を持つ配石遺構，列状石列　平・断面図

2．古代～中世の出土遺物

遺物包含層であるⅡ層から出土した古代～中世の遺物は，土師器，須恵器，中国陶器，青磁，白磁，染付などであり，調査区の南側を中心に出土した。北側についてはほとんど出土しておらず，遺構内から近世遺物に混ざり少量出土したのみであった。図化したものについては，第55・56図で出土分布を示した。古代の遺物は，B・C－21・22区に集中しているのが認められ，中世の遺物は南側全体に広く出土している。

土師器

出土した土師器は坏，充実高台土師器，塊，甕，盤，捏鉢などであり，その中には黒色土器２点，赤彩土器，内朱土器各１点も認められた。また，器高が低く平底の小皿状のものも坏として取り上げた。

坏（第51図262～265）

262～265は坏の一部であるが，体部が欠損しているものが多く，復元できたものは262のみであった。262は，口径12.2㎝，底径7.1㎝，器高2.7㎝であり，体部はヘラ切り底の底部よりわずかに膨らみを持ちながら斜め上方に開く器形を呈する。263～265は底部のみのため上部は不明であるが，262と同じように直線的に開くと思われる。回転ヘラ切りによる底部切り離しである。264の見込に細かい幾幅目調整痕が見られるが，全体的にローリングを受け摩耗している。

充実高台土師器（第51図266・267）

266・267は，底部が厚く，円盤状の高台を持つ充実高台の土師器である。上部の器形は明確でないが，底部内面の見込部分は凹んでいる。高台の高さは約１㎝，径が約６㎝であり，回転ヘラ切りによる底部切り離し後の調整は雑である。

赤彩土器（第51図268）

268は，体部外面に赤色顔料を施した赤彩土器の坏である。底部から直線的に開く器形で，内外面ともヨコナデ調整である。底部はヘラ切りによる切り離しである。

塊（第51図269）

269は，「ハ」の字状に広がる高台を持つ塊である。全体像は不明瞭であるが，高さ1.2㎝の底径５㎝の高台は，内外面ともに丁寧なヨコナデ調整を施している。焼成不足による焼ムラが見られる。

黒色土器（第51図270・271）

270・271は黒色土器であり，内面が黒色化したいわゆる内黒土師器である。270は，見込部分に平坦面を作り，開かず高台内を斜めに削り込んだやや短い高台より内湾しながら立ち上がり，そのまま口縁部に至る塊である。復元口径は15.6㎝，高台径6.8㎝，器高7.4㎝である。体部内外面ともヨコナデ調整後ヘラミガキを施し，口唇部を丸く仕上げるなど丁寧な作りである。271は，底部のみでありローリングを受け摩耗している。底部下の高台は欠損しており，全体像は不明である。

内朱土器（第51図272）

272は，ナデ調整後ミガキにより仕上げた内面に赤色顔料を施した塊の胴部である。一部のみのため全体像は明確でないが，丁寧な作りであり，焼成不足により胎土が黒色化している。

糸切り底の坏（第51図273～283）

273～283は，直線的に開き，体部外面にヨコナデ調整痕の稜を呈する，底部切り離しが糸切りの坏である。ほとんどが底部周辺の小破片であり体部は明確でないが，口径８～10cm，底径６～８cm，器高約２cm程度の小さめの坏であると思われる。275は，口縁部がわずかに外反する器形で，ナデ調整により稜を消し曲面に仕上げている。273～277は内面にススが付着し，灯明皿として使用されたと思われる。

甕（第51図284～291）

284～287は甕の口縁部であり，全体の形は不明ながら，肥厚で「く」字状に外反している。284は大きく反っているが，285～287はわずかに外反する。口唇を丸く仕上げ，内外面ともヨコナデ調整である。288～291は胴部である。288・289は頸部下周辺にあたり，288は頸部に細かい筋状の轆轤目が残る。289は外面に指圧によると思われる凹みが認められる。290・291は胴部下部にあたる部分であり，290は器壁が厚く内面はケズリ，外面はハケ目調整が施されている。291は器壁が薄く，内面はケズリの後ナデ調整，外面にはヨコナデ調整の前のタタキ痕が残る。

盤（第52図292～297）

292～297は，盤の口縁部である。器形は平均して，口径が16～19cm，底径12～20cm，器高３～４cmであり，口径に比べて器高の低い幅広な土師器である。坏や皿としての分類も考えられるが，口径が15cmを超える平底のものはすべて盤として取り扱った。内湾しながら立ち上がり口唇を肥厚な円形に仕上げ，内面はナデ調整により平面に，外面は轆轤調整による稜が１～３段残る。

捏鉢（第52図298～301）

298～301は，捏鉢の口縁部である。299は直線的に開き，口唇に平坦面を持つ器形で，口縁の一部を外に張り出し片口を作る。内面にハケ目条痕が認められ，全体的に焼成不足のため淡赤色を呈する。300は口唇部に平坦面を作らず，口縁部外面が内傾して鋭角な口唇を呈する。

その他（第52図302）

302は見込に平坦面を持ち，垂直に立ち上がる土師質土器であり，底から張り出すように足が付いている。内外面，足部とも丁寧なナデ調整が施されている。全体の器形は不明である。

擂鉢（第52図303～317）

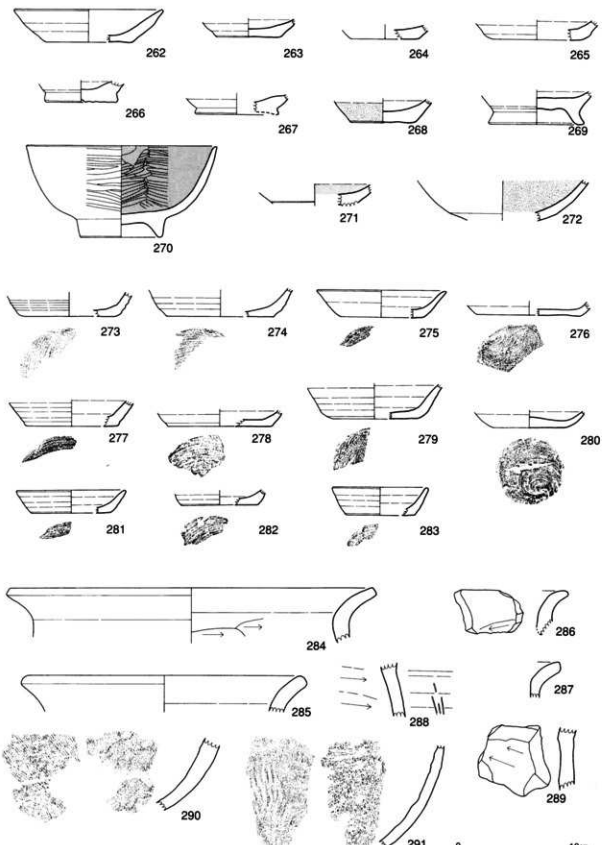
303～317は内面に５～９条一単位の櫛目条痕を施した擂鉢の一部である。一部のみの出土のため，全体器形は明確ではない。

303～308は土師質であり，内面はケズリ調整の後ナデを施し，櫛目を掻き上げている。307・308は底部周辺であり，肥厚で外面にケズリ痕が明瞭に残り，底の調整は雑である。

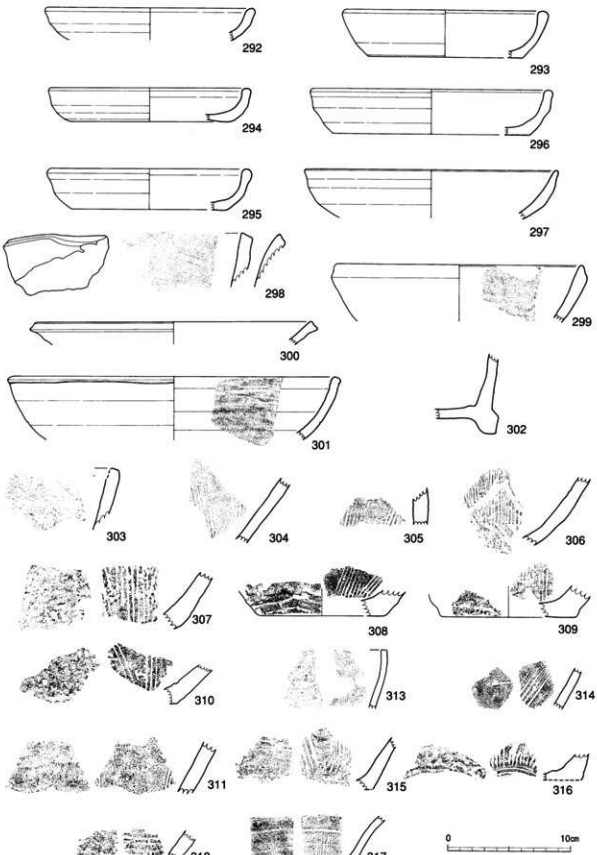
309は瓦質の底部であり，内外面は灰色，胎土は灰白色である。器壁は底部より胴部が厚く，斜め上方へ開くが，体部の器形は明確でない。

310～316は須恵質であり，焼成が良く硬質である。310～312は灰色系の色調であり，内面はヨコナデ調整により平面に仕上げている。313～316は，黄色系の色調である。313・314は，器壁が７～８mmで薄手の胴部であり，内外面ともヨコナデ調整による細かい轆轤目が残る。316は底が欠損しているが，見込に回旋状の櫛目痕が見られる。

317は，胎土は明灰色で，内外面に釉の掛かる陶器の擂鉢の胴部である。外面にヨコナデ調整の際の指ナデ跡が残り，内面の頸部と思われる場所に沈線が１条巡っている。



第51図　低地部の出土遺物３（古代～中世１　土師器）



第52図　低地部の出土遺物4（古代～中世2　土師器，擂鉢）

須恵器

出土した古代の須恵器は甕，壺であり，外面は格子目または平行タタキが施され，内面には同心円当て具痕や平行文当て具痕が残るものが多い。

甕（第53図318～329，333～335　第54図340～343）

318～324は，内面に同心円当て具痕が残り，外面は格子目または平行文タタキが施されたものである。318が頸部である以外は，大型甕の胴部上位から肩部にかけてのものであると思われる。325～329は，外面は318～324と同様であるが，内面に平行文タタキ痕が明瞭に残るものであり，胴部下位である。333～335は外面に格子目タタキ痕が残り，内面はナデ調整である。333は当て具痕をナデ消しており，幅輪目が筋状に巡っている。334・335は，ローリングを受け内面の一部が剥がれ落ちている。

壺（第53図330～332　第54図344）

330は膨らみを持ちながらゆるやかに口縁部へ続く灰褐色を呈した壺の胴部である。内面にはナデ調整痕が明瞭に残り，外面は稜を消すようにナデ調整を施し，なめらかな曲面に仕上げている。331は，焼成不足により赤橙色をした胴部である。外面に格子目タタキを施し，内面は粗いナデ調整であり，指圧痕がいくつか認められる。332は，底径14.2㎝の壺の底部である。底はやや厚めの平底であり，外面は平行文タタキ，内面はナデ調整である。外面は灰褐色を呈しているが，壺の内部は，焼成不足であり赤橙色である。

樽万丈窯（第53図336～338，第54図339）

336～339は，樽万丈窯産の須恵器である。胎土は灰白色で体部は灰褐色を呈す。内面に筋状のハケ目調整痕が施され，337は外面に格子目タタキ痕が認められる。

その他の中世須恵器（第54図340～343）

340・341は，内面がヨコナデであり，外面に綾杉文（樹枝文）のタタキ調整痕が残る。

常滑窯（第54図345・346）

345・346は，尾張半島の常滑地域で生産された中世陶器である。部分のみの出土のため，全体像は明確でないが，大型甕の一部と思われる。胎土には細かい石粒が含まれ，345は内湾するような膨らみを呈す，甕の肩の張り部分である。本来無釉であるが，自然釉が掛かり外面は発色している。

中国陶器（第54図347～351）

347～351は，外面に褐釉を施し，黒褐色に発色している中国陶器の壺である。部分的な出土のため全体像は明瞭でないが，同一個体であると思われる。器壁は4～5㎜と薄く均一であり，内面にヨコナデ調整の幅輪目がわずかな稜をつくり，小さな凸凹が体部に巡っている。

青磁

出土した青磁は，越州窯青磁，碗，小碗，坏，皿などである。やや器高の高い深めの皿は，坏として取り扱った。越州窯青磁など数点を除いて大部分が16世紀代のものと思われる。

越州窯青磁（第54図352）

352は，小片であるが本遺跡ただ1点の出土である越州窯青磁の底部である。全体像は明確でないが，施釉後畳付の釉を削り落としている。見込に目跡が残る。

碗（第54図353～365）

353～365は，青磁碗の一部である。353は，やや外反する口縁を呈した端反碗である。外面に幅広の片彫りの鎬蓮弁文を描き，初期の龍泉窯系青磁と思われる。354は，肉厚な底部で高台と体部

の境目が明瞭である。畳付と高台内は無釉であり，体部外面下位に鎬蓮弁文の稜が認められる。

355～356は，口縁部が外反する端反碗の口縁部であり，356には胴部と口縁部の境目に轆轤調整による凹みが巡り，全面に細かい貫入が見られる。357～360は，口縁部が直口する碗の口縁部である。357は，緑色の釉を厚く施しており，内面に雷文風の平行線が巡り，外面には雷文帯を描く。

358は内湾した胴部であり，外面に細い線描きの蓮弁文が描かれ，見込に文様が見られる。359は，やや浅形の碗である。外面に雷文風の文様を描く。焼成不足のため釉が淡緑色で発色が弱く，白濁している。

361～365は，高さ５～６㎜の高台を持つ底部である。底部のみの出土のため全体の器形は明確でないが，いずれも底面に平坦部を持つ丸形の碗である。361は，見込と高台内に釉を施さず，畳付は施釉後削り落としている。見込内に別個体の釉が付着している。362は，底部が厚く見込に圏線を１条巡らし，中心に花文を描く。高台内は無釉で畳付は削り取っている。363は，高台と体部の境目がゆるやかで，見込に花文が描かれる。高台内は無釉であるが，若干の釉垂れと窯道具片の熔着が見られる。364は，体部との境目をしっかりと作る。焼成不良であり，胎土は赤橙色で釉の発色が弱い。365は，ナデ調整により曲面を呈し，底部器壁が1.6㎝と厚く，暗緑色の釉が厚く掛かる。

小碗（第54図366）

366は，口径7.1㎝の小碗の口縁部である。腰部に張りを持ち，直口する器形で，口唇を丸く仕上げている。外面は無文であるが，内面に櫛目描文を施している。

坏（第54図367）

367は，底部形体は不明であるが，胴部下位で強い張りを持ち口縁部で大きく外反し幅広の口縁を呈す坏である。内面は無文であるが，外面に鎬蓮弁文を施している。

皿（第54図368・369）

368は，胴部中位で屈曲し，わずかに外反しながら直口する皿の口縁部である。口縁部は花びら状の稜花口縁を呈する。内面に櫛目描文が施され，底部と胴部の境目に沈線状の凹みが巡る。口唇外面に別個体との熔着痕が残る。369は口縁部のみであるが，稜花口縁を呈し，内面に唐草文が残る。

白磁碗（第54図370・371）

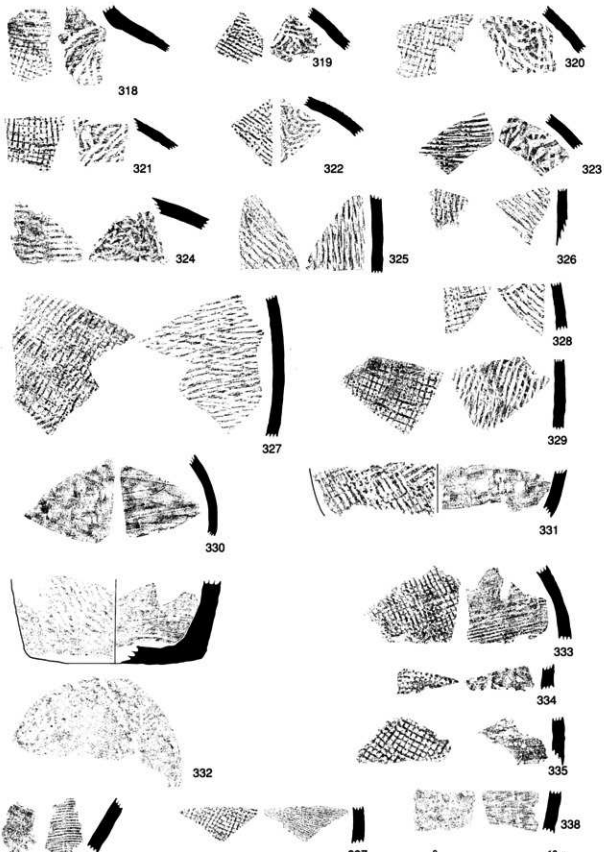
370は，底部形状は不明であるが，内湾しながら直口する白磁碗である。外面に粗い櫛描き文様と，口縁部に器面調整のための指圧痕が見られる。371は，底部より内湾しながら立ち上がり，口縁部でわずかに反る端反碗である。器壁が口縁部へ向かって薄くなっている。胎土は灰褐色で，灰釉を施すが外面高台脇以下は無釉である。見込に圏線が１条巡り，中心に文様が描かれている。

白磁皿（第54図372・373）

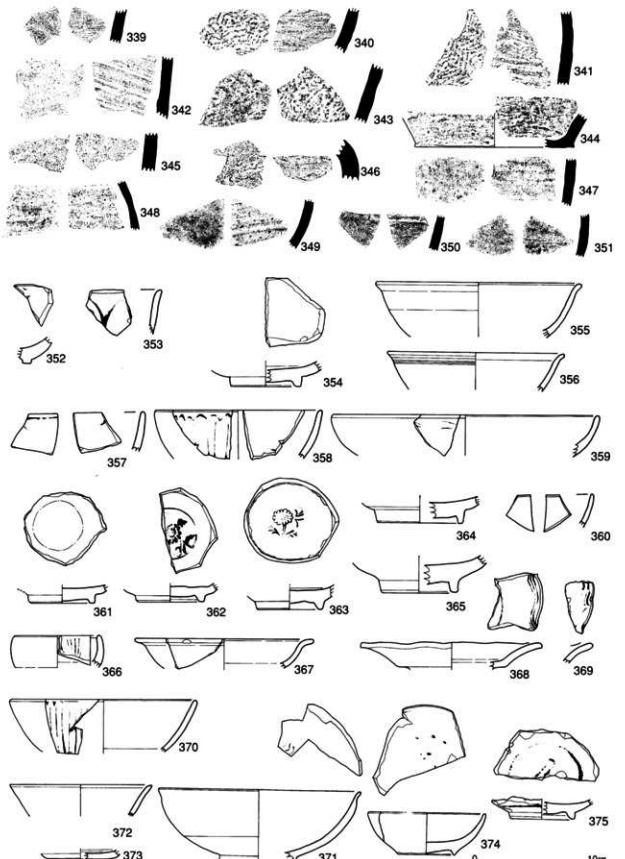
372は，口縁部の断面が三角形を呈し，施釉後口縁部の釉を剥ぎ取った口禿げ皿である。部分のみのため全体は明確でない。373は，平底の白磁皿の底部である。底の釉は粗く拭き取られている。

染付（第54図374・375）

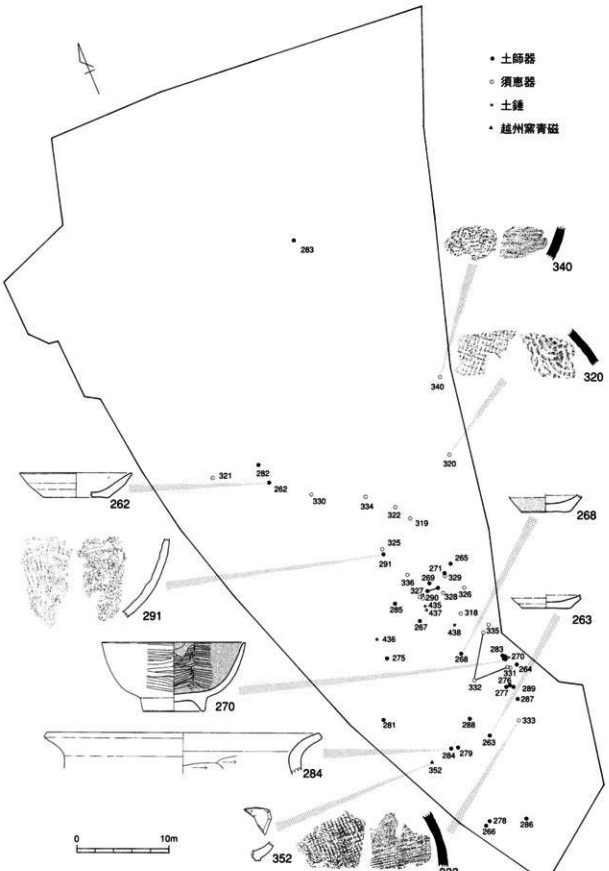
374は，碁笥底を呈し，見込に平坦面を持ちながら軽く内湾し直口する染付の陶器塊である。底内は無釉であり，窯道具の一部が熔着している。圏線が外面に１条，内面に２条巡り，見込に吉祥字である「寿」を人形化して描かれている。375は，染付塊の底部である。底部のみのため全体は明確でない。高台部分は無釉であり，見込に圏線が１条巡り，文様が描かれている。



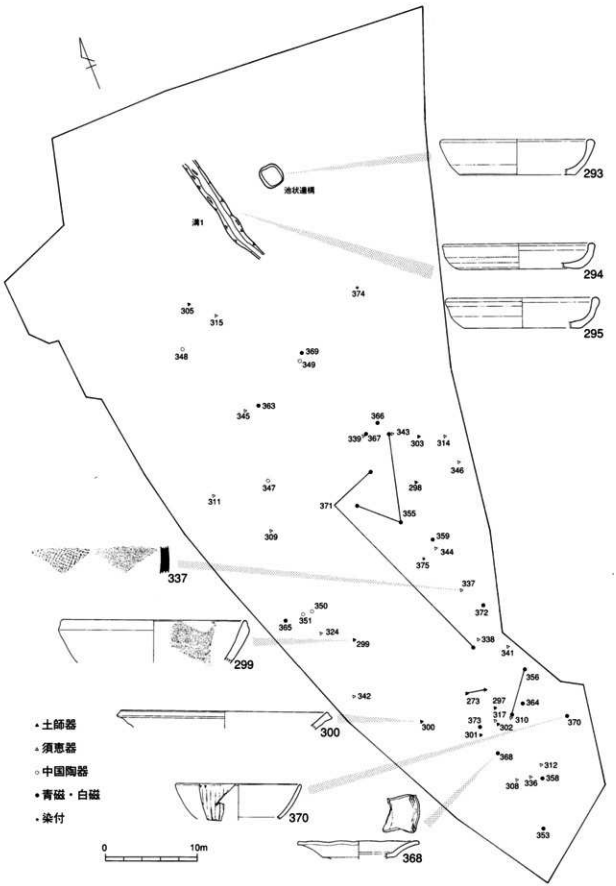
第53図　低地部の出土遺物5（古代～中世3　須恵器）



第54図　低地部の出土遺物6（古代～中世4　須恵器，青磁，白磁，染付）



第55図　古代の遺物出土分布



第56図　中世の遺物出土分布

第16表　低地部の遺物観察表２（古代～中世１）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区・層	口径	底径	高台径	器高	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号
51	262	土師器 坏	E24 Ⅱ	12.2	7.1		2.7	ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り		509
	263	土師器 坏	C21 Ⅱ	2.0	5.4			ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り		985
	264	土師器 坏	B22 Ⅱ		5.6			ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り	1/8	1316
	265	土師器 坏	C23 溝					ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り		657
	266	充実高台	C20 Ⅱ			5.8		ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り		1355
	267	充実高台	C22 Ⅱ			6.6		ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り		834
	268	土師器 塊	C22 Ⅱ		5.0			ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り 赤彩土器	1/10	1274
	269	土師器 塊	C23 Ⅱ			7.8		ヨコナデ	ヨコナデ	底部		641
	270	土師器 塊	B22 Ⅱ	15.6		6.8	7.4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内黒		1321
	271	土師器 塊	C23 Ⅱ					ヨコナデ	ヘラミガキ	内黒		652
	272	土師器 塊	— —					ヨコナデ	ミガキ	内朱		—
	273	土師器 坏	C21 Ⅱ		7.6			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り　ヌス付着	1/3	1215
	274	土師器 坏	— —		8.8			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	1/3	—
	275	土師器 坏	D22 Ⅱ	10.6	6.8		2.2	ナデ	ヨコナデ	回転糸切り　ヌス付着	1/10	1074
	276	土師器 坏	B21 Ⅱ		7.6			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り　ヌス付着		1125
	277	土師器 坏	B21 Ⅱ		8.4			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り　ヌス付着		1155
	278	土師器 坏	C20 Ⅱ		8.6			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り　ヌス付着		1356
	279	土師器 坏	C21 Ⅱ		7.0			ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	回転糸切り　ヌス付着		936
	280	土師器 坏	D26 Ⅲ		5.8			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り		1424
	281	土師器 坏	D22 Ⅱ	9.0	6.2		1.9	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	1/8	1242
	282	土師器 坏	E24 Ⅱ		6.2			ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り		513
	283	土師器 坏	B22 Ⅱ	7.6	5.6		2.3	ヨコナデ	ヨコナデ	回転糸切り	1/10	1319
	284	土師器 甕	C21 Ⅱ	29.6				ヨコナデ	ケズリ ナデ	口縁部	1/8	934
	285	土師器 甕	D22 Ⅱ	22.2				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部　ヌス付着	1/8	1115
	286	土師器 甕	B20 Ⅱ					ヨコナデ	ケズリ ナデ	口縁部　ヌス付着		1362
	287	土師器 甕	B21 Ⅱ					ヨコナデ	ケズリ ナデ	口縁部	1/10	1190
	288	土師器 甕	C21 Ⅱ					ヨコナデ	ヘラミガキ			948
	289	土師器 甕	B21 Ⅱ					ヨコナデ	ケズリ ナデ		1/5	1127
	290	土師器 甕	C23 Ⅱ					ハケ目	ケズリ			809
	291	土師器 甕	D23 Ⅱ					ヨコナデ ヨウキ	ケズリ	ヌス付着		904
52	292	土師器 盤	— —	17.1				ヨコナデ	ヨコナデ		1/8	—
	293	土師器 盤	D27 池	16.1	12.6		3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り後ナデ調整	1/8	—
	294	土師器 盤	E27 溝	16.0	13.1		2.8	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り後ナデ調整	1/8	—
	295	土師器 盤	E27 溝	16.1	12.6		3.3	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り後ナデ調整	1/10	—
	296	土師器 盤	E27 Ⅲ	19.1	16.0		3.7	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り後ナデ調整	1/8	—
	297	土師器 盤	C21 Ⅱ		20.4			ヨコナデ	ヨコナデ	回転ヘラ切り	1/8	1203
	298	土師器 捏鉢	C24 Ⅱ					ヨコナデ	ハケ目	片口	1/10	570
	299	土師器 捏鉢	D22 Ⅱ	20.0				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部	1/10	1080
	300	土師器 捏鉢	C21 Ⅱ	22.4				ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部	1/8	930
	301	土師器 捏鉢	C21 Ⅱ	26.4				ヨコナデ	ケズリ ナデ	口縁部	1/10	966
	302	土師質土器	C21 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	足部　不明		1199
	303	擂　鉢	C24 Ⅱ					ヘラケズリ ナデ	ケズリ	6条一櫛目		598
	304	擂　鉢	E27 溝					ナデ	ヨコナデ	櫛目条痕		—
	305	擂　鉢	E26 Ⅲ					ヨコナデ	ヨコナデ	櫛目条痕		1482
	306	擂　鉢	E27 溝					ナデ	ヨコナデ	9条一櫛目　ヌス付着		—
	307	擂　鉢	— —					ヘラケズリ	ヨコナデ	7条一櫛目		—
	308	擂　鉢	4T Ⅱ		10.0			ケズリ	ヨコナデ	櫛目条痕　底部		378
	309	擂　鉢	2T Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	瓦質 9条一櫛目　底部		327
	310	擂　鉢	B21 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	須恵質 櫛目条痕		1178
	311	擂　鉢	E24 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	須恵質 櫛目条痕		501
	312	擂　鉢	4T Ⅰb					ケズリ	ヨコナデ	須恵質 櫛目条痕		414
	313	擂　鉢	E27 Ⅲ					ナデ	ヨコナデ ナデ	須恵質 5条一櫛目		1416
	314	擂　鉢	C24 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	須恵質 5条一櫛目		600
	415	擂　鉢	E26 Ⅰb					ヨコナデ	ヨコナデ	須恵質　櫛目条痕		472
	316	擂　鉢	4T Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	底部整形　櫛目条痕		395
	317	擂　鉢	C21 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	7条一櫛目　施釉		1200

第17表　低地部の遺物観察表３（古代～中世２）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区・層	口径	底径	高台径	器高	調整 外面	調整 内面	備考	残存率	注記番号
53	318	須恵器 甕	C22 Ⅱ					格子目タタキ	同心円当て具痕	頸部		762
	319	須恵器 甕	1T Ⅰb					格子目タタキ	同心円当て具痕			261
	320	須恵器 甕	C24 Ⅱ					格子目タタキ	同心円当て具痕			611
	321	須恵器 甕	E24 Ⅱ					格子目タタキ	同心円当て具痕			499
	322	須恵器 甕	1T Ⅱ					格子目タタキ	同心円当て具痕			257
	323	須恵器 甕	— —					平行タタキ	同心円当て具痕			—
	324	須恵器 甕	D22 Ⅱ					平行タタキ	同心円当て具痕			1085
	325	須恵器 甕	D23 Ⅱ					平行タタキ	平行文当て具痕			905
	326	須恵器 甕	C22 Ⅱ					平行タタキ	平行文当て具痕			746
	327	須恵器 甕	C22 Ⅱ					格子目タタキ	平行文当て具痕			816
	328	須恵器 甕	C22 Ⅱ					格子目タタキ	平行文当て具痕			802
	329	須恵器 甕	C23 Ⅱ					格子目タタキ	平行文当て具痕			653
	330	須恵器 壺	D24 Ⅱ					ナデ	ナデ			530
	331	須恵器 壺	B22 Ⅱ					格子目タタキ	ヨコナデ	焼成不良		1332
	332	須恵器 壺	B22 Ⅱ			14.2		平行タタキ	ヨコナデ	底部整形	1/3	1329
	333	須恵器 甕	B21 Ⅱ					格子目タタキ	ヨコナデ			1183
	334	須恵器 甕	D24 Ⅱ					格子目タタキ	ヨコナデ			537
	335	須恵器 甕	B22 Ⅱ					格子目タタキ	ヨコナデ			1294
	336	須恵器 鉢	1T Ⅱ					ナデ	ハケ目	樺万丈窯		203
	337	須恵器 甕	C22 Ⅱ					ナデ	ハケ目	樺万丈窯		748
	338	須恵器 鉢	C22 Ⅱ					ナデ	ハケ目	樺万丈窯		1288
54	339	須恵器 甕	D24 Ⅱ					ナデ	ハケ目	樺万丈窯		547
	340	須恵器 甕	C25 Ⅲ上					綾杉状タタキ	ヨコナデ			612
	341	須恵器 甕	B22 Ⅱ					綾杉状タタキ	ヨコナデ			1303
	342	須恵器 甕	D22 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ			1063
	343	須恵器 甕	3T Ⅱ					ナデ	ナデ			352
	344	須恵器 壺	C23 Ⅱ	13				ヨコナデ	ヨコナデ	底部整形	1/5	624
	345	中世陶器	E25 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	常滑窯　自然釉		485
	346	中世陶器	C24 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	常滑窯　自然釉		585
	347	中国陶器	E24 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	褐釉		510
	348	中国陶器	E25 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	褐釉		869
	349	中国陶器	D25 Ⅲ					ヨコナデ	ヨコナデ	褐釉		1432
	350	中国陶器	D23 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	褐釉		1095
	351	中国陶器	D23 Ⅱ					ヨコナデ	ヨコナデ	褐釉		1094
	352	青磁　碗	C21 Ⅱ					施釉後畳目削り		越州窯 輪高台		1225
	353	青磁　碗	B20 Ⅱ					鎬蓮弁文		口縁部		1366
	354	青磁　碗	— —					施釉後畳目削り		底部　畳目以下無釉		—
	355	青磁　碗	D24 Ⅱ	16.8						口縁部　端反碗	1/10	351
	356	青磁　碗	B21 Ⅱ	14.4				調整痕		口縁部　端反碗	1/8	1179
	357	青磁　碗	— —					雷門縁文		口縁部		—
	358	青磁　碗	4T Ⅱ	13.4				鎬蓮弁文		口縁部		402
	359	青磁　碗	C23 Ⅱ	21.6				雷門縁文		口縁部　浅形碗		625
	360	青磁　碗	F27 4・3							口縁部	1/10	—
	361	青磁　碗	E27 Ⅲ			5.1		高台内無釉	見込み無釉	目跡		—
	362	青磁　碗	C26 Ⅲ			5.4			見込み花文	畳目釉削り		—
	363	青磁　碗	E25 Ⅱ			5.4			見込み花文	高台内無釉　目跡		482
	364	青磁　碗	B21 Ⅱ			6.8				底部　高台内無釉		1192
	365	青磁　碗	D23 Ⅱ			5.9				底部　高台内無釉		1092
	366	青磁 小碗	3T Ⅱ	7.1					櫛描文	口縁部	1/8	357
	367	青磁　坏	D24 Ⅱ	14.4				鎬蓮弁文		口縁部	1/6	547
	368	青磁　皿	C21 Ⅱ	14.4						口縁部　綾花皿	1/5	978
	369	青磁　皿	D25 Ⅲ							口縁部　綾花皿	1/6	1431
	370	白磁　碗	D21 Ⅱ	15				櫛描文		口縁部	1/8	1005
	371	白磁　碗	D24 Ⅱ					高台脇以下無釉	見込文字	灰釉　端反碗	1/8	—
	372	白磁　皿	C22 Ⅱ	11.6						口縁部　口禿げ皿	1/8	713
	373	白磁　皿	C21 Ⅱ		4.8					底部　口禿げ皿		954
	374	磁器 染付	C26 Ⅲ	9.4	4.6		3.4	草花文	「寿」	碁笥底　高台内無釉	1/3	1422
	375	磁器 染付	C23 Ⅱ		5.2					底部　高台無釉		635

第５節　近世の遺構

本遺跡低地部の主体となる時期は近世であり，出土した遺物，検出された遺構から見ても圧倒的に多くなっている。近世の遺物は，調査区の北側を中心に陶器（埦・鉢・土瓶など），磁器（碗・皿など），焙烙などが出土しており，遺構は大型の掘立柱建物跡などが検出された。

近世の出土遺物については，食器類（埦・皿など），調理具類（擂鉢・捏鉢・焙烙など），貯蔵具類（壺・甕・瓶など）に概ね分類した。また，各遺物の計測値は，第21表に示した。

近世の遺構は調査区の北側部分に集中している。この部分は基本的に遺物包含層であるⅡ層が暗褐色土，黄褐色土のブロックを含む造成土，黒褐色土，水田跡と考えられる青灰色土の４枚に区別され，遺構はⅢ層上面でⅡ層が埋土となって検出されている。遺構は，大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡，溝状遺構，井戸状遺構，池状遺構，小ピット群などである。（第57図）

１．掘立柱建物跡（第57図）

調査区全体で10棟の掘立柱建物跡が検出されているが，現道部分や山部の急傾斜地のため調査不能地域があり，一部分のみ検出されたものも多い。C～E－28・29区に近接して５棟，やや丘陵地となっている西側のF－24～26区に一部重なりが見られるが５棟検出されている。前者の標高は約50ｍであり，西側部分は比較的高く約52ｍである。

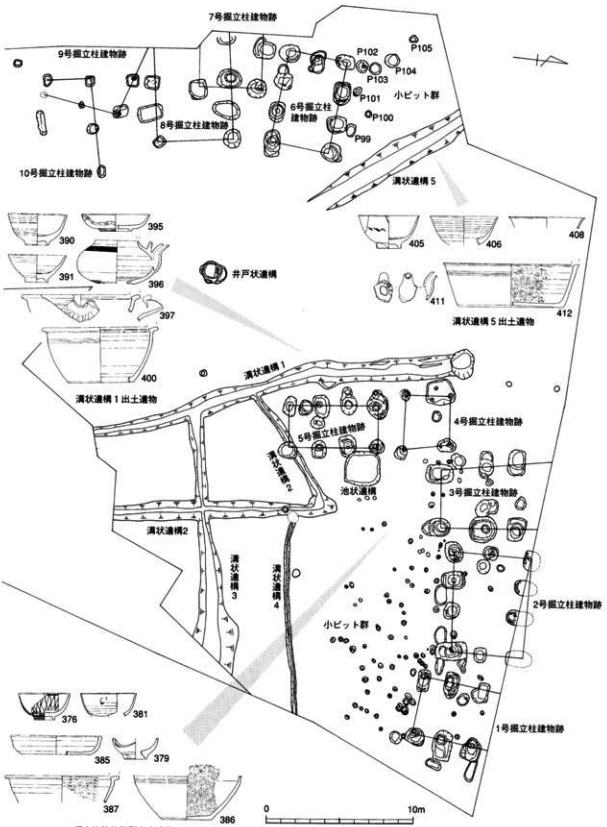
各棟に共通して柱穴が非常に大型である。柱穴は，方形または楕円形を呈し，平均的な大きさは長径約1.5ｍ，短径約１ｍ，深さ約90㎝であるが，中には長径２ｍを超えるものも検出されている。埋土は黄褐色土，黒褐色土などが小石大のブロック状に混在しており，強く押し固められていた。大きめに掘り下げた土を柱の固定のため再び埋め戻したものと考えられる。各建物跡の計測値は，第18・19表掘立柱建物跡計測表に掲載した。

１号掘立柱建物跡（第58図）

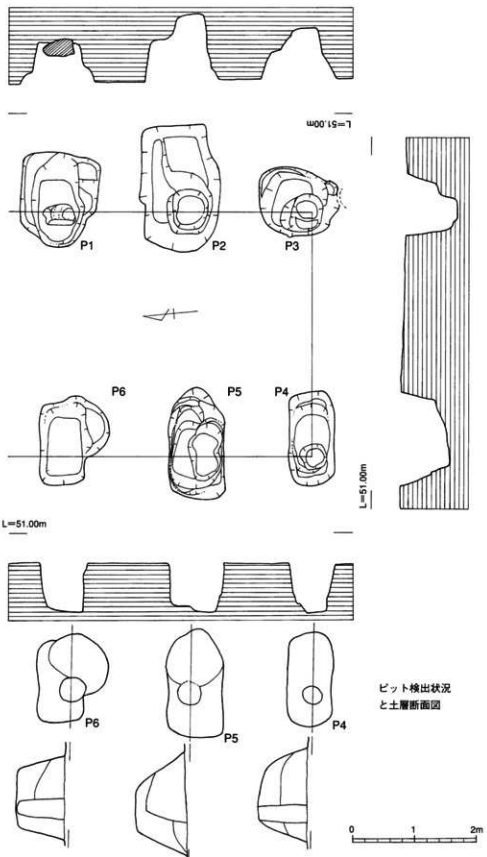
C－28・29区で検出されたが，現道部分に広がるものであり，６個のピットからなる。北側が調査不能地域に伸びるので確認はできないが，他の建物跡と同様に１間×３間と推定され，建物規模は４ｍ×６ｍ程度と思われる。主軸は略南北方向である。各ピットの平均値は，径が1.6ｍ×１ｍ，深さ80㎝である。西側のピットは明瞭な柱痕跡が確認でき，柱の径は30㎝程度で，検出面から約70㎝埋め込まれている。P１では径が51㎝×34㎝，高さ28㎝の平坦な礫が認められ，根石として使われたと思われる。P４では埋土の状況から２回に分けて押し固めたと思われる。P５とP６では柱を抜き取るために柱の西側を大きく堀り込み，抜き取った後埋め戻したと思われる痕跡が認められた。

２号掘立柱建物跡（第59図）

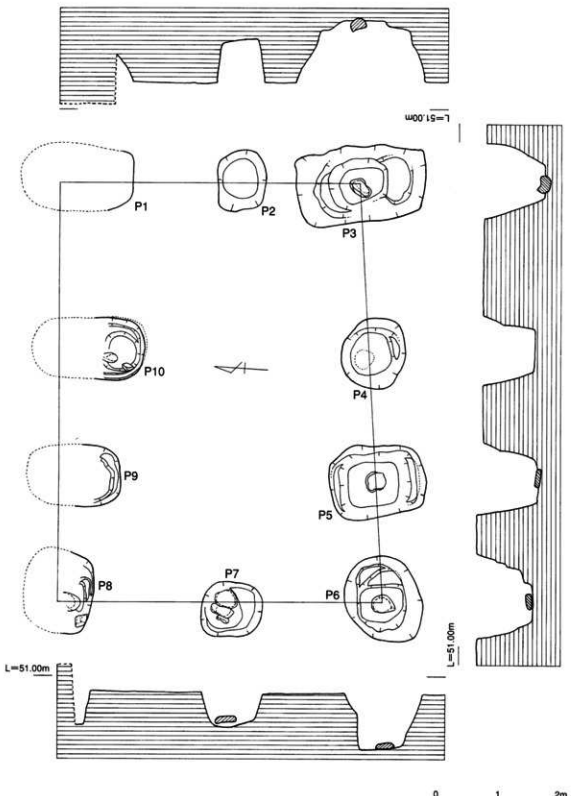
C・D－28・29区で１号掘立柱建物跡の西側に近接して検出された。北側のピット４個は調査不能地域に一部かかるため完全な形での検出はできていないが，全体で計10個のピットからなることが確認できた。建物の規模は２間×３間で，主軸は略東西方向である。各ピットは径が１ｍ程度の円形を呈したものと，径が平均1.8ｍ×１ｍの方形を呈したものとの組み合わせで構成されている。特にP３は建物跡群の中で最大のピットであり，径2.22ｍ×1.23ｍ，深さ0.99ｍである。P３，P５，P６，P７では，およそ70～80㎝の深さから，根石として利用されたと思われる径30㎝，高さ10㎝



第57図　近世の遺構配置図



第58図　1号掘立柱建物跡



第59図　2号掘立柱建物跡

程度の比較的大型で平坦な礫が認められた。

3号掘立柱建物跡（第60図）

D・E－28区で２号掘立柱建物跡の西側に近接して検出された。１号と同じく北側の調査不能地域へ広がるものであり，６個のピットからなる。桁行の長さは確定できないが，柱間の距離から１間×３間と考えられ，主軸は略南北方向である。ピットは全体的に楕円形を呈し，平均して長径1.9m，短径1.3m，深さ1.1mである。なお，この建物跡のピット底面からは根石は出土していない。遺物は，ピットから薩摩焼や染付の小片が数点出土しているが，小破片のため図化できなかった。

4号掘立柱建物跡（第61図）

D・E－27・28区で検出され，３号掘立柱建物跡の南西に位置している。建物の規模は，１間×１間の４本柱の建物で，桁行は約3.5m，梁行は約3.2mのほぼ正方形を呈している。主軸は略東西方向である。P４には明瞭な柱痕跡が残っていたが，P１，P３には柱が腐食を免れ黒色化して残存していた。柱の残存状況は，検出面からⅢ層を約50cm程度掘り込んだ位置から，P１が径18cm，長さ22cm，P３が径21cm，長さ16cm残っていた。P４は最大幅２mの方形の掘り込み中に，径が10cm程度のピットも確認できた。方形の掘り込みと建物跡との関連は明確ではなかった。

5号掘立柱建物跡（第62図）

D・E－27区で，４号掘立柱建物跡の南側に近接して検出された。建物の規模は１間×３間であり，８個のピットからなり，主軸は略南北方向である。桁行は約６m，梁行は約３mであり，柱間寸法は２m前後でほぼ等間隔である。床面積はおよそ18.2㎡の長方形の建物である。ピットは円形または楕円形を呈し，平均して径1.5m×１m，深さ83cmであり，ほぼ同規模である。西側の４個のピットには柱痕跡が残り，東側の４個には柱が残っていた。柱の残存状況は，検出面から70～80cm掘り込んだ位置に径20～28cm，長さ35～60cm程度残っていた。東側の柱の残存は，埋土のみでなく，この付近の下部が水分の多い黒色粘土であったことも起因するが，加えて柱が全部抜かれず建物が廃棄された後，地上部分のみ鋸等の使用により切られた可能性が指摘できよう。ピット内から陶器の塊，土瓶，擂鉢，磁器の碗などが出土した。

出土した遺物は以下の通りである。

磁器碗（第63図376～378）

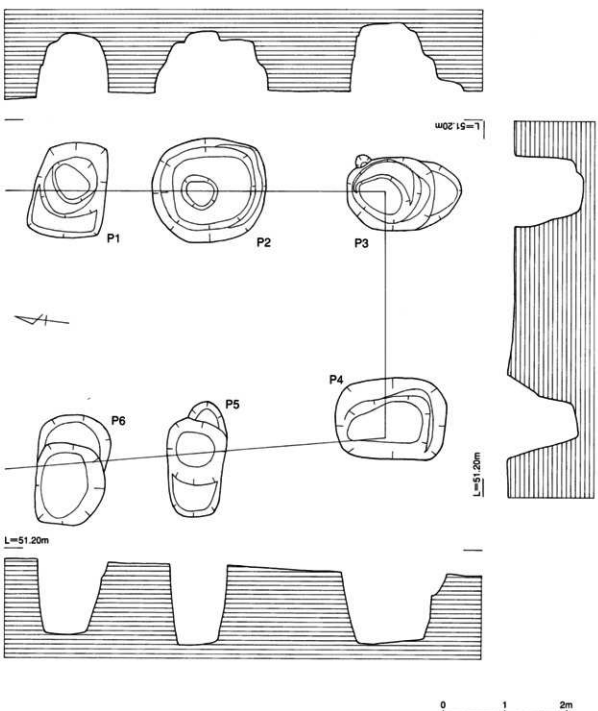
376は，一重編目文を施した磁器碗である。高台外から高台脇にかけて，３条の圏線を巡らす。透明釉が全面掛けられ丁寧に仕上げられているが，焼成不良のため全体的に赤みを帯びている。

377は，器壁が約３mmの薄作りで，肥前焼と思われる磁器碗の口縁部である。内湾気味の胴部を持ち，口縁部は丸く仕上げてある。透明釉を施し，外面に草花文が描かれている。

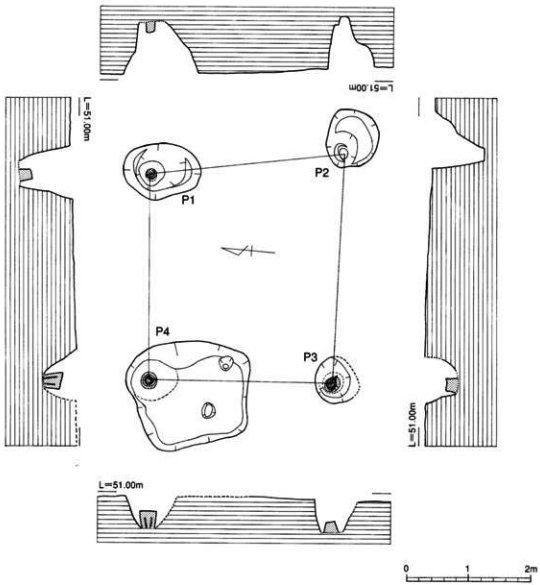
378は，外面に草花文を施し高台内外に２条の圏線を巡らせた磁器碗の底部である。見込に蛇ノ目釉剥ぎを施し，その上に細流の砂が塗られ，畳付は別個体との熔着により一部欠損している。

陶器塊（第63図379～381）

379は，高台内は斜めに削り出し，高台脇から丸形に立ち上がる陶器塊の下部である。胎土は茶褐色で，白色の釉を全面に施釉後その上から濃緑灰色の釉が高台脇まで掛けてあり，施釉時の指跡が残る。



第60図　3号掘立柱建物跡



第61図　4号掘立柱建物跡

380は，鉄釉を施した外面にわずかに轆轤目を残す陶器壺の口縁部である。焼成は良好である。

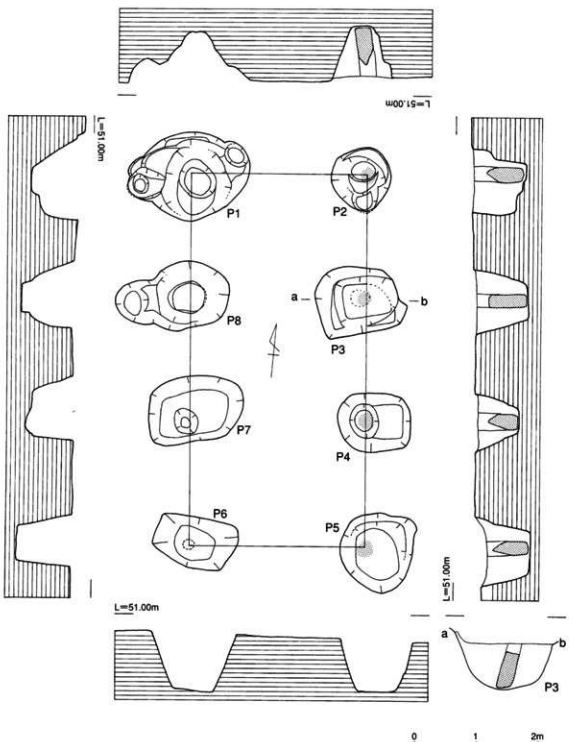
381は，胎土が灰白色で焼成良好のため磁化している磁質陶器の口縁部である。全体に透明釉が掛かり，外面に折れ松葉を施す。見込に釉剥ぎの跡が認められる。

壺（第63図382）

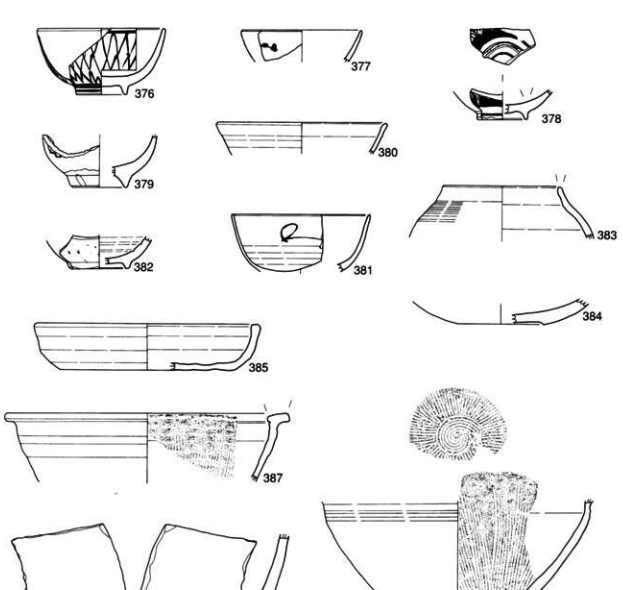
382は，底部のみのため全体の器形は明確でないが，磁器で袋状体部をした小壺の底部である。外面に透明釉を施し細かな筋状の貫入が見られる。内部は無釉で粗い削り調整痕を残し，畳付には少量の砂粒が付着している。

土瓶（第63図383・384）

383は，部分的な出土のため明確ではないが，全体に鉄釉を施した土瓶の口縁部である。口唇部は施釉後削り落としている。胴部に筋状の轆轤目が入る。



第62図　5号掘立柱建物跡



第63図　低地部の出土遺物7（掘立柱建物跡）

384は，上げ底を呈する土瓶の底である。内側に鉄釉を施し，底部に砂目の跡が見られることから，別個体を同時に焼いたものと思われる。外側は無釉であり，重ね焼きによると思われる焼成ムラが赤褐色に認められる。

焙烙（第63図385）

385は，土師質で皿形を呈した焙烙である。器形は底部が平底で，斜め上方に立ち上がり，腰部に張りを持つ。口縁部でわずかに外反し，口唇部が幅広に作り出された丸縁口縁を呈する。内面は

轆轤を使ったナデ調整痕が見られ，底部はヘラ切り後ナデ調整である。取手が付いているかどうかは不明であるが，全体的にススが付着していることから調理具であると思われる。

擂鉢（第63図386，387）

386は，底部より斜め上方に直線的に開き，口縁部付近で内湾する擂鉢であり，外面上部に沈線が2条巡っている。口縁部の器形は不明である。7条一単位の櫛目が密に施されている。内外とも施釉してあるが，焼成不足のため発色しておらず，胎土も赤橙色である。

387は，擂鉢の口縁部である。緩やかに内湾した胴部から口唇部を逆L字状に折り返して平坦面を作り端部を鍔縁に強調させている。7条一単位の櫛目で掻き上げ，外帯1条を巡らす。口唇部は施釉後剥ぎ取っている。

その他（第63図388，389）

388，389は土師質の土器片である。388は甕の胴部で外面にススが付着している。389は鉢の口縁部であり，内面に細かい轆轤目が残る。

6号掘立柱建物跡（第64図）

F・G－26区で検出された。1～5号建物跡群から南西方向へ16m離れた山部の裾野に当たる小高い位置にあり，1～5号の検出面が標高50.5～50.8mであるのに対して，6号の検出面は約52mである。建物の規模は，1間×3間で8個のピットからなる。主軸は2号掘立柱建物跡と同じく略東西方向である。桁行は約6.2m，梁行は約4mであり，柱間寸法は2m強でほぼ等間隔である。床面積はおよそ25㎡となり，柱間の建物規模は他の建物跡と同様1間×3間であるが，内部面積は最も大きいものである。ピットは楕円形を呈し，平均して径が1.5m×1.1m，深さ1mであり，ほぼ同規模である。南西側から北東方向に向かって検出面がなだらかに傾斜しているが，ピットの形状や深さから推定して，東側の掘り込み面は上位の高さであると考えられる。

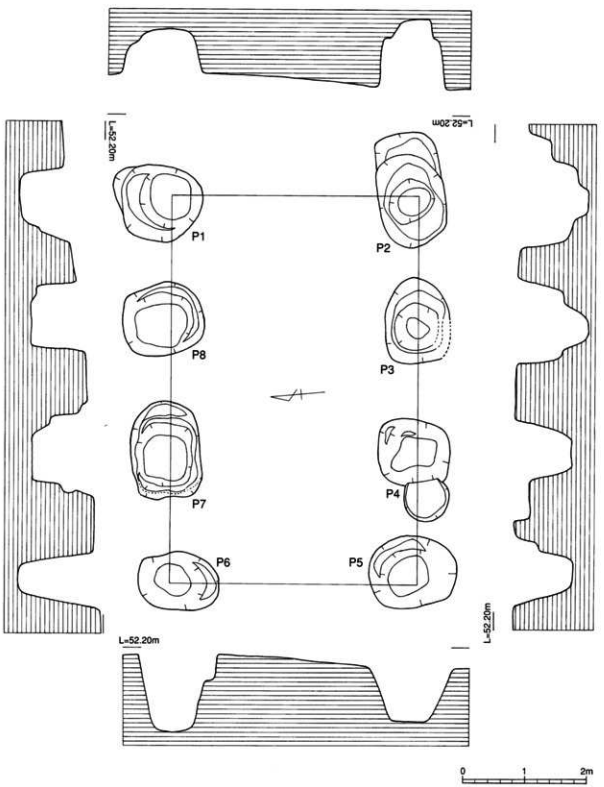
建物跡の北側に7個のピットが見つかった。（第57図参照）大きさは同規模ではなく，径が46～100cm，深さ38～90cmであり，ほぼ円形を呈している。ピットとしているが，樹根，土層のにじみと思われるものもあり，明確にできなかった。各ピットの計測値は，第20表に掲載した。

7号掘立柱建物跡（第65図）

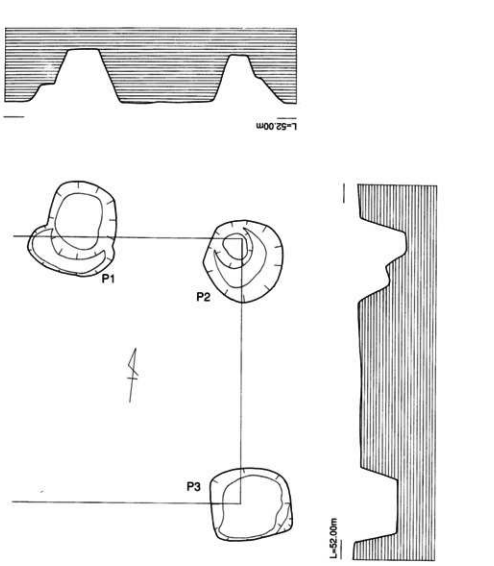
F－25区で6号掘立柱建物跡の南側に近接して検出され，西側は区域外に広がるものである。3個のピットからなり，建物規模は1間×2間以上，主軸は柱間の距離から略東西方向である。ピットは，形は異なるがほぼ同規模であり，平均して径が1.5m×1m，深さ70cmである。8号掘立柱建物跡と一部重複があるが，ピットでの切り合いは明確でなく，先後関係は不明である。

8号掘立柱建物跡（第66図）

F－25区で一部が7号掘立柱建物跡と重なる形で検出され，7号と同じように西側が区域外へ広がる。7個のピットからなり，規模は1間×3間と推定され，主軸は7号と同一である。梁行は5.2mであり，桁行柱間は東から2間は約2m，西側の1間は3m以上と不規則である。ピットは楕円形または方形を呈し，長径0.8～1.9m，短径0.6～1.5m，深さ50～80cmであり，一定ではない。P5，P7には明瞭な柱痕跡が認められ，柱の径は約15cmである。



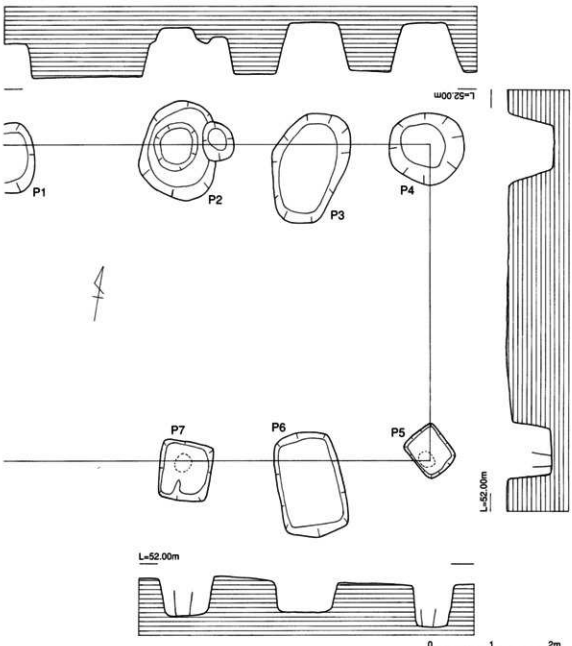
第64図　6号掘立柱建物跡



第65図　7号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡（第67図）

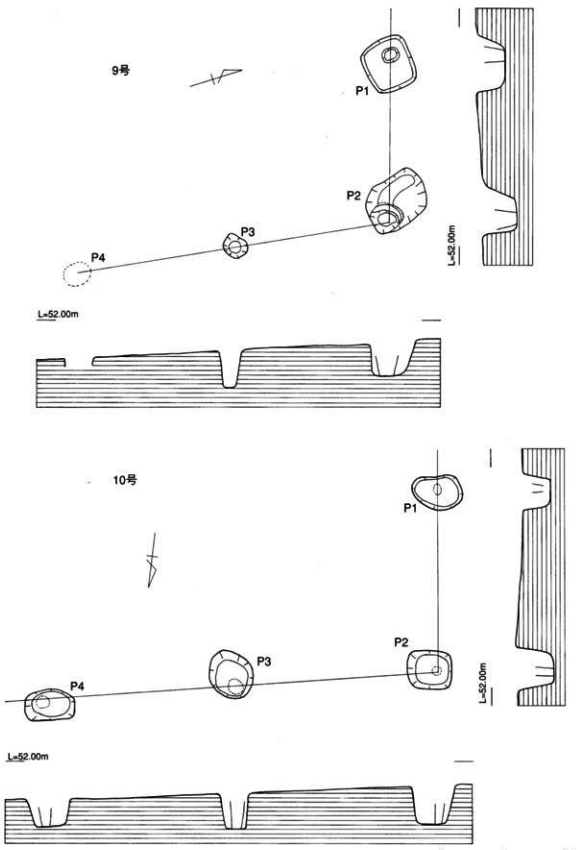
E・F−24・25区で8号掘立柱建物跡の南側に近接して検出された。10号と一部重なりが認められるが，先後関係は不明である。9号のピットは3個であり全体規模は明確でないが，主軸は柱間の距離より略東西方向であり，6〜8号とほぼ同じ方向を向いている。ピットは円形または方形を呈す。P3は柱痕跡のみを掘り下げておりピット全体は明確ではないが，まだ大きいと思われる。ピットの規模は，およそ長径が1m，短径が70cm，深さ36〜66cmのほぼ同規模であると推定される。全てのピットで柱痕跡が認められ，柱の径は約15cmである。



第66図　8号掘立柱建物跡

10号掘立柱建物跡（第67図）

10号のピットは4個であり9号と同じように全体規模は明確でないが，主軸は柱間の距離より略南北方向であり，梁行柱間は3.2mで等間隔である。ピットは，およそ長径80cm，短径25cm，深さ48～63cmである。全てのピットで柱痕跡が確認され，柱の径は約23cmである。



第67図　9号,10号掘立柱建物跡

第18表　掘立柱建物跡計測表1（1号～5号）　単位：m

1号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間
南北 N-1°-W	／	P3−P4 4.05	P1−P2 2.19
			P2−P3 1.89
			P6−P5 2.31
			P5−P4 1.74

1号

ピットNo.	P1	P2	P3	P4
長径	1.56	2.07	1.35	1.53
短径	1.23	1.22	1.05	0.75
深さ	0.66	0.93	0.69	0.81
ピットNo.	P5	P6		
長径	1.83	1.53		
短径	0.91	0.69		
深さ	0.78	0.81		

2号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間
東西 N-80°-E	P3−P6 6.88	／	P3−P4 2.86	P2−P3 1.92
			P4−P5 2.01	P7−P6 2.55
			P5−P6 2.01	

2号

ピットNo.	P2	P3	P4	P5
長径	0.93	2.22	1.17	1.56
短径	0.78	1.23	1.02	1.14
深さ	0.72	0.99	0.87	0.99
ピットNo.	P6	P7		
長径	1.47	0.96		
短径	1.71	0.87		
深さ	0.93	0.51		

3号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間
南北 N-15°-W	／	P3−P4 3.78	P1−P2 2.11
			P2−P3 3.06
			P6−P5 2.16
			P5−P4 3.09

3号

ピットNo.	P1	P2	P3	P4
長径	1.81	1.92	1.86	1.86
短径	1.14	1.08	1.17	1.29
深さ	1.05	0.99	0.96	1.17
ピットNo.	P5	P6		
長径	1.96	1.83		
短径	1.87	1.17		
深さ	1.35	1.21		

4号

主軸方向	桁行	梁行
東西 N-78°-E	P1−P4 3.39	P1−P2 3.18
	P2−P3 3.75	P4−P3 3.02

4号

ピットNo.	P1	P2	P3	P4
長径	1.26	0.93	0.78	2.01
短径	0.91	0.75	0.69	1.59
深さ	0.87	0.87	0.54	0.54

5号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間
南北 N-15°-W	P1−P6 5.94	P1−P2 2.85	P1−P8 2.04
	P2−P5 6.24	P6−P5 3.09	P8−P7 2.07
			P7−P6 1.83
			P2−P3 2.07
			P3−P4 1.98
			P4−P5 2.19

5号

ピットNo.	P1	P2	P3	P4
長径	1.95	1.08	1.53	1.19
短径	1.44	0.96	1.08	0.96
深さ	0.81	0.84	0.89	0.72
ピットNo.	P5	P6	P7	P8
長径	1.29	1.23	1.68	1.83
短径	1.17	0.69	1.23	1.05
深さ	0.87	0.91	0.78	0.84

第19表　掘立柱建物跡計測表２（６号～10号）　単位：m

６号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間
東西 N-86°-E	P1－P6 6.15	P1－P2 3.91	P1－P8 2.04
	P2－P5 6.38	P6－P5 3.93	P8－P7 2.01
			P7－P6 2.1
			P2－P3 2.07
			P3－P4 2.19
			P4－P5 2.12

６号

ピットNo.	P１	P２	P３	P４
長　径	1.44	1.35	1.62	1.35
短　径	1.12	0.89	1.11	1.17
深　さ	0.96	1.29	0.99	0.87
ピットNo.	P５	P６	P７	P８
長　径	1.47	1.89	1.41	1.71
短　径	1.21	1.08	1.05	1.14
深　さ	0.75	1.08	1.17	0.93

７号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間
東西 N-78°-E	／	／	P1－P2 2.64	P2－P3 4.35

７号

ピットNo.	P１	P２	P３
長　径	1.62	1.38	1.47
短　径	1.11	1.08	1.02
深　さ	0.71	0.72	0.71

８号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間
東西 N-72°-E	／	P4－P5 5.22	P2－P3 2.13
			P3－P4 2.04
			P7－P6 2.07
			P6－P5 2.01

８号

ピットNo.	P２	P３	P４	P５
長　径	1.56	1.89	1.23	0.75
短　径	1.51	1.14	1.17	0.63
深　さ	0.78	0.81	0.81	0.67
ピットNo.	P６	P７		
長　径	1.71	0.96		
短　径	0.99	0.89		
深　さ	0.51	0.57		

９号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間
南北 N-15°-W	／	／	P1－P2 2.73	P2－P3 2.55
				P3－P4 2.64

９号

ピットNo.	P１	P２	P３
長　径	0.99	1.14	0.48
短　径	0.75	0.63	0.33
深　さ	0.36	0.39	0.66

10号

主軸方向	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間
南北 N-17°-W	／	P2－P4 6.42	P1－P2 3.02	P2－P3 3.31
				P3－P4 3.12

10号

ピットNo.	P１	P２	P３	P４
長　径	0.84	0.84	0.87	0.75
短　径	0.54	0.63	0.54	0.33
深　さ	0.48	0.63	0.57	0.48

2．溝状遺構（第68図）

近世の遺構と考えられる溝状遺構は，北西側の丘陵地に沿って１条，北側の低地部に４条，計５条検出された。全体的に北西から南東へ向かっての緩やかな傾斜に沿っている。溝１～４は，明確な切り合いが見られなかった。溝１，溝５から，17世紀後半から18世紀前半の遺物が出土しており，掘立柱建物跡群からの出土遺物と時期的にはほぼ同じである。溝１～４から溝５までの間に建物跡が検出されていないことから，境界を示す区画溝の可能性も考えられる。

溝状遺構１（第68図）

D・E－26～28で，建物跡４号，５号の西側に接して南北方向に検出された。埋土はⅡ層の暗褐色土であり，検出された長さは26.4ｍ，幅60～152㎝，深さ約20㎝である。断面形態は北側が逆台形状，南側は浅い皿状を呈し，E－27区から南へ向かって緩やかに傾斜している。埋土は暗青灰色土であり，底部には遺物や小石，木片などが残っており，水が流れていたと思われる。E－27・28区の境に大きめの土坑が溝１とつながっており，土坑より北側で溝は検出されていない。土坑は径1.8ｍ×1.4ｍ，深さ30㎝であり，円形を呈している。埋土は溝１と同じであり水が溜まっていたと思われる青灰色土が認められ，遺物の出土はなく溝１との関連は不明である。

出土遺物は以下の通りである。

埦（第69図390～394）

390～393は，鉄釉を総釉後，見込に蛇ノ目釉剥ぎを施して畳付の釉薬を削り落とした，やや直線的に開く丸形の陶器埦である。器形の違いがわずかに認められるが，ほぼ口径が12㎝，高台径４㎝，器高６㎝前後の苗代川焼きの埦と考えられる。

390は，緩やかな曲線を持つ立ち上がりで，外面に細かい轆轤目が残る。畳付の釉を丸く剥ぎ取るなど丁寧な仕上げであり，焼成不足のため発色が弱く釉溜りが白濁している。

391は，やや直線的に立ち上がり，蛇ノ目釉剥ぎの輪帯に別個体の畳付が一部熔着している。畳付の欠損している部分が見られ，焼成の際に熔着したものと思われる。

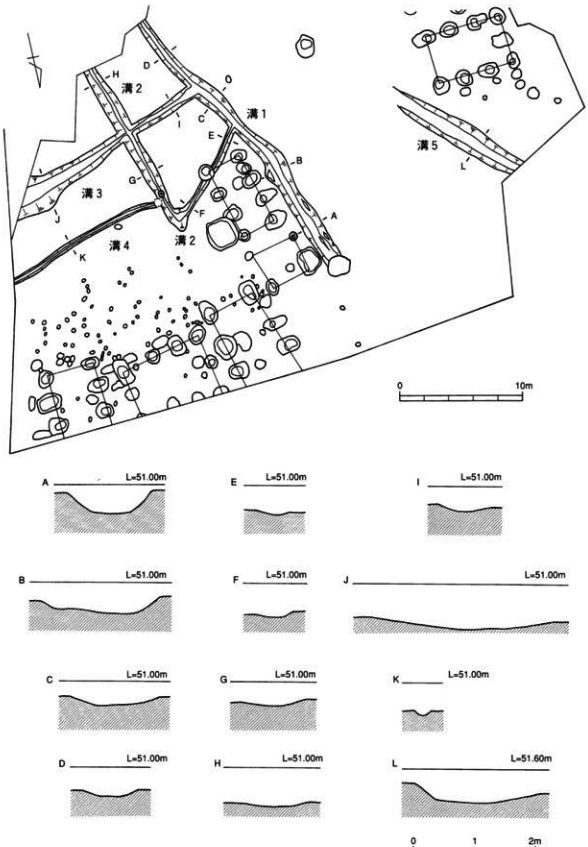
392は，高台内を斜めに削り出し，底部を厚く胴部を薄く仕上げ安定した器形である。焼成が非常に良く，胎土が黒色化し磁化している。蛇ノ目釉剥ぎの輪帯内に別個体の熔着が見られる。

393は，390～392と同類の陶器埦と考えられる口縁部である。口縁部がわずかに外反し，筋状に轆轤目が残る。釉溜りが白濁している。

394は，やや高い高台を持ち，高台外は垂直に立ち上がる陶器埦である。灰白色の胎土に透明釉が掛かっているが，焼成ムラがあり未発色部分がある。外面にわずかに轆轤目を残すが，丁寧な作りである。内野山窯の埦と思われる。

皿（第69図395）

395は，高台脇の器壁を厚くして見込に平坦部を作り，内湾気味に立ち上がる磁器皿である。高台内の削り込みは浅く，内面は丁寧に調整し外面には等間隔で筋状の轆轤目を持つ。施釉後畳付を剥ぎ取り，見込に蛇ノ目釉剥ぎを施す。釉剥ぎの輪帯に細粒の砂が一面に焼き付き，別個体の一部も熔着している。見込部分に五弁花文，胴部内外に草花文，内面の平坦面際に圏線が２条，高台脇に圏線が２条描かれている。



第68図　溝状遺構1～5　平・断面図

土瓶（第69図396）

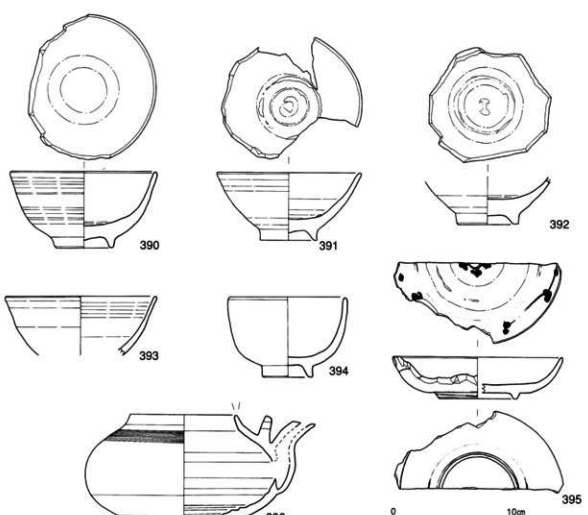
396は，上げ底で算盤玉形を呈した土瓶である。本体と注口部との間の孔が1個であり，通常孔が複数個である茶家以外の用途が考えられるが明確でない。鉄釉がほぼ全体に掛かるが腰部以下は無釉であり，口唇部は剥ぎ取っている。底部の上げ底付近に重ね焼きによると思われる明瞭な焼成ムラが茶褐色に認められる外面は焼成良好であり，黒褐色に発色しているが，内面は発色が鈍い。窯入れの際合口で焼かれたものと思われる。脚が付いていたかは不明である。

片口（第70図397）

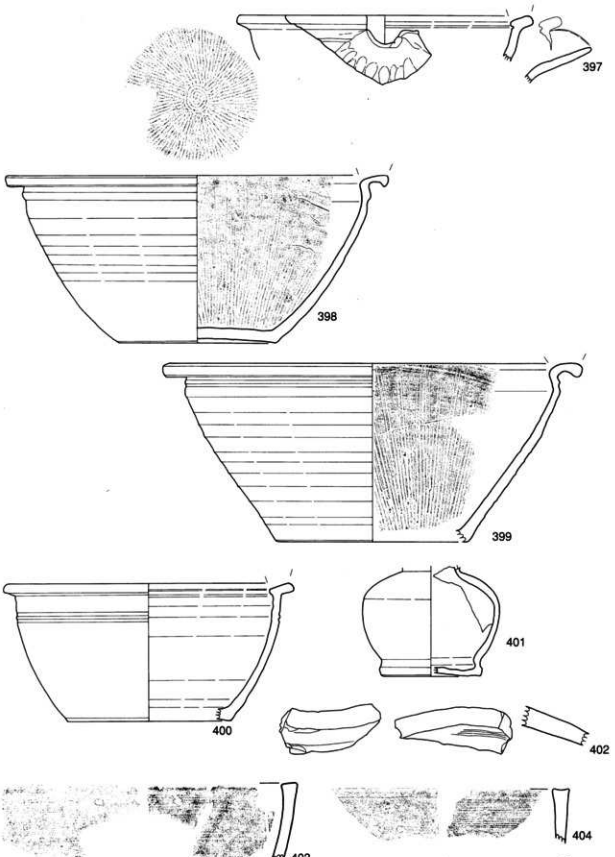
397は，鉢の口縁帯下に注口を取り付けた片口である。片口上部の口縁は欠損している。口唇部の釉は削り落とし，丸く仕上げている。片口を本体に取り付ける際の指ナデ調整痕が明瞭に残る。焼成不足のため発色せず，胎土は暗赤橙色である。

擂鉢（第70図398・399）

398・399は，底部から斜め上方にやや内湾ぎみに立ち上がり，胴部上方に張りを持つ擂鉢であり，復元口径は約30㎝，底径約15㎝，器高約14㎝である。387と同じように口唇を逆L字状に大きく外



第69図　低地部の出土遺物8（溝1－①）



第70図　低地部の出土遺物９（溝１－②）

へ張り出し，平坦に仕上げ，外帯１～２本巡らす器形を呈す。内面に８条一単位の櫛目が密に施され，総釉後口唇部は剥ぎ取り，底部は拭き取られている。外面に発色は見られるが，内面は焼成不足のため発色せず，細かい粒状に白濁している。

捏鉢（第70図400）

400は，底部からわずかにふくらみを持ちながら上方に立ち上がり，外縁帯を逆Ｌ字状に張り出す口縁部を持つ捏鉢である。外沈線が２条巡らされ，胴部に幟幅目が凸凹状に残っている。口唇部は釉剥ぎを行っているが，剥ぎ残しが多く見られる。

その他（第70図401～404）

401は，内傾に立ち上がり胴部は球形で肩に張りを呈す小型の壺である。口縁直下で破損しており全体像は不明である。

402は，外面に鉄釉を施した大型の甕の肩部である。小片のため全体像は明確ではないが，全体的に暗赤褐色で細かい幟幅目を残す。

403・404は，細かいハケ目調整痕を残す鉢の口縁部である。焼成不良のため淡赤橙色をしている。

溝状遺構２（第68図）

Ｃ・Ｄ－26・27区で，溝１から東方向へ分かれ，Ｌ字状に屈曲し南下するように検出された。Ｄ－27区へ向かって幅60㎝，深さ７㎝，長さ9.3ｍ，そこから120°南へ曲がり，Ｃ－26区方向へ幅１ｍ，深さ６㎝，長さ14.4ｍ，計23.7ｍであり，断面形態はレンズ状を呈す。埋土は溝１と同じであり，遺物の出土はなかった。５号掘立柱建物跡のＰ５との切り合いから５号建物跡より古いと考えられる。

溝状遺構３（第68図）

Ｃ・Ｄ－26・27区で，溝１から東方向へ分かれるように検出された。検出面は西から東方向へ緩やかに傾斜しており，Ｄ－26区では幅82㎝，深さ10㎝であり，断面がレンズ状を呈する。Ｃ－27区方向へ向かうにつれて幅が広くなり，最大幅は3.1ｍを測り，断面は浅い皿状を呈する。溝２と直交しているが明確な切り合いは見られず，埋土は同じ暗褐色土であるので同一時期のものと思われる。

溝状遺構４（第68図）

Ｄ－27区からＣ－28区へ向かい東西方向に検出され，溝３と約５ｍ離れて平行している。検出した長さは11.6ｍで，幅は約40㎝，深さ約８㎝である。断面はかまぼこ形を呈す。接地部がゴミ穴による撹乱のため明確ではないが，溝２から西側では検出されていないので，溝２とつながっていると思われ，埋土も同じであることから，何らかの関連があると思われる。

溝状遺構５（第68図）

Ｇ－27区からＦ－26区へ向かい，南北方向に検出され，６～10号掘立柱建物跡のある丘陵地の下を地形に沿うように位置している。検出した長さは12.2ｍ，幅２ｍ，深さ28㎝であり，断面は逆台

形を呈している。F−26区中央より南側は削平されており消失している。溝1～4から10m以上離れ，検出面の標高も，溝1～4が約50.8mであるのに対して，51.2mで40cm程度高い位置に検出されているので，直接的な関連性は明確でない。埋土から陶器の塊，土瓶，捏鉢，磁器碗などが出土した。埋土はⅡ層暗褐色土であり，出土遺物の時期も同じであることからほぼ同じ時期であると推定される。

出土遺物は以下の通りである。

陶器塊（第71図405～407）

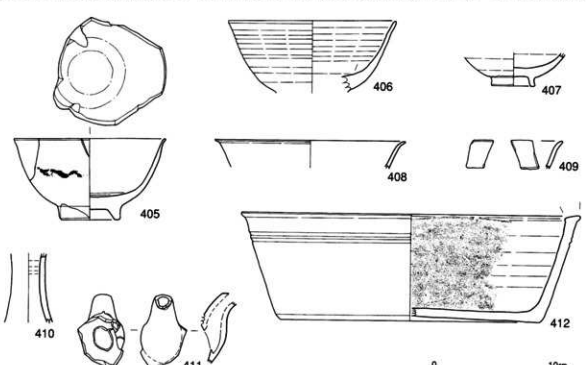
405は，やや高い高台を持ち，底部から斜め上方へ丸みを帯びながら立ち上がっていき，わずかに口唇部が外反する陶器塊である。器壁の底を厚くし胴部を薄くする作りである。鉄釉を施すが高台以下は無釉で，見込に蛇ノ目釉剥ぎを入れ，高台脇に施釉の際の指跡が残る。釉は焼成不足のため発色が弱く，胎土は淡赤橙色である。

406は，胴部に筋状の轆轤目調整痕を残し，見込に釉剥ぎを施した苗代川焼の陶器塊である。底部欠損のため全体像は明確ではないが，ややふくらみを持ちながら立ち上がり，口縁部でわずかに外反し，口唇部を丸くナデ調整している。

407は，丁寧な作りの小さめの高台を呈し，内湾気味に立ち上がる陶器塊の底部である。高台内にケズリ調整による沈線が1条残り，高台全体の歪みが見られるので糸切り離しのためと思われる。きめの細かい青みを帯びた灰白色の胎土で，透明釉が掛けられ高台脇から無釉である。全体に細かい貫入が認められる。産地は不明である。

磁器碗（第71図408・409）

408・409は，透明釉の掛かる磁器碗の口縁部である。小片のため全体像は明確ではないが，端反形を呈し口唇部を丸く調整している。胎土は白色で，轆轤目は見られず器壁が3～4㎜と薄作りで



第71図　低地部の出土遺物10（溝5）

ある。焼成は良好である。

土瓶（第71図410・411）

410は，径が2.5～3.5㎝とやや大きめの土瓶の注口部である。内外に鉄釉を施釉してある。注口部のみの出土のため全体像は明確でない。

411は，土瓶の注口部である。大きさ，形状ともに396の注口部とほぼ同じであるが，注口部のみの出土のため全体像は明確でない。本体との間の孔は1個であり396と同じである。焼成不足のため釉の発色はなく，表面に白い粒状のものが付着している。

捏鉢（第71図412）

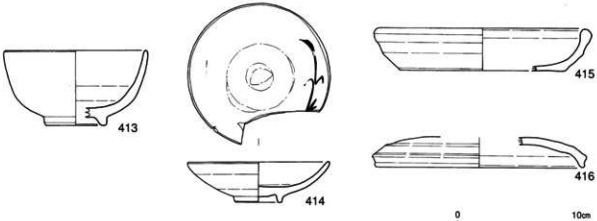
412は，底部脇からほぼ直線的に立ち上がり，口唇部に内傾した平坦面を持つ端反した捏鉢である。胴部に外沈線が2条巡る。総釉後口唇部は削り取り，ケズリ痕が3～6条の細い筋となって残る。底面は拭き取っている。口唇部には粗い条線状の調整痕が残る。内面底には細かい幟幅目調整痕が見られるが，胴部はナデ調整を施し平面に仕上げている。

3．井戸状遺構（第73図）

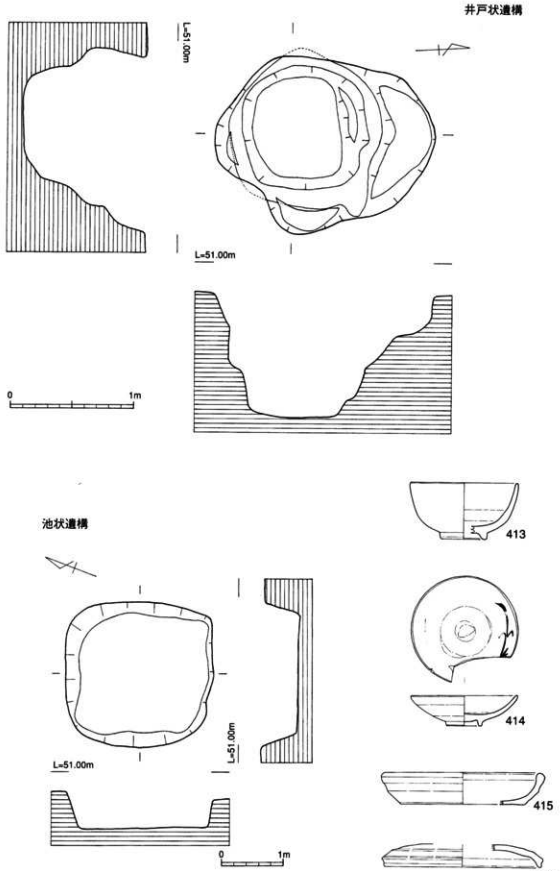
E－26区で，調査区北側の丘陵部と平地部のほぼ中間地点で検出された。検出面の標高は51ｍで，Ⅲ層を掘り込んだものである。掘り込み面は楕円形を呈し，長径1.8ｍ，短径1.4ｍ，深さ1ｍである。検出面から約30㎝と50㎝のところでわずかに平坦面を持ち，本来の径は80㎝程度で円形を呈していると思われる。埋土は底部に暗青灰色土と明青灰色土，黄褐色粘質土が互層となって堆積し，上部に暗褐色土が覆っていた。底に鉄分の付着が一面に認められ，井戸として使われていたと考えられる。出土遺物が認められず，建物跡などとの時期的な関連は不明である。

4．池状遺構（第73図）

D－27区で，5号掘立柱建物跡の東側に近接して検出された。検出面の標高は50.6ｍで一辺が2.4ｍのほぼ正方形を呈し，深さ約45㎝である。断面形状は逆台形状で，底部は一辺が約2ｍの正方形を呈している。埋土は下部が暗茶褐色土で青灰色土が縞状に混ざり，上部は黄褐色土のブロックや火山灰軽石が混在した土で押し固められていた。5号建物跡のP3との切り合いから5号より新しいと思われる。埋土から陶器の塊，磁器皿，焙烙など建物跡，溝と同時期の遺物が出土した。



第72図　低地部の出土遺物11（池状遺構）



第73図　井戸状遺構，池状遺構とその出土遺物

出土遺物は以下の通りである。

埦（第72図413）

413は，高台内を斜めに削り出し，腰部からほぼ垂直に立ち上がる見込に平坦面を持つ丸形の陶器埦である。全体に轆轤目は見られず，畳目も丸く仕上げた後釉をふき取るなど丁寧な作りである。総釉であるが釉の発色が良くなく，全体が暗黄褐色である。

皿（第72図414）

414は，蛇ノ目釉剥ぎを持つ磁器皿である。高台脇から僅かに丸みを持って斜め上方に立ち上がり，口唇部を丸く面取りしている。径が3.8cmと狭い高台部は無釉であり，内面胴部に草花文が描かれている。蛇ノ目釉剥ぎの環帯全面に細粒の砂が少し大きめに塗られており，二重の焼着防止と思われる。高台内にケズリ痕が轆轤目に沿って段になって残る。

焙烙（第72図415）

415は，土師質の焙烙である。385と器形はほぼ同じであるが，細い轆轤目が残り，底部切り離し後のナデ調整痕があまり見られない。全面にススが付着している。

蓋（第72図416）

416は，外面に鉄釉の掛かった陶器の蓋である。つまみ部の形状は不明であるが，甲盛り形でなだらかに移動し，口縁部でわずかに張りを持ち稜となって残る深みのない平坦な器形である。端部は叉状に内径した口唇部と庇部に分かれ，大きな身受け部を作る。胎土は淡赤橙色であり，焼成不足のため釉は発色していない。

5　小ピット群（第74図）

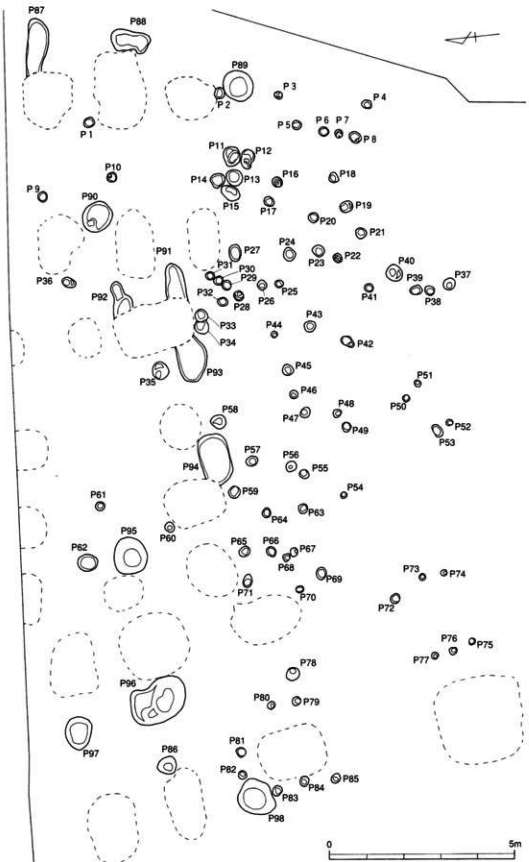
C・D－27・28区，G－26区に総数98個のピットが集中して検出された。P1～P86は径が20～40cm，深さ4～41cmの円形を呈す。一部に樹根の可能性があるものも含むが，多くは掘立柱建物跡のピットと推定されるものの，建物跡を明確にできなかった。埋土は暗褐色土あるいは炭化物が混在したものも認められたが，遺物の出土はなかった。掘立柱建物跡群の南側に近接しており，何らかの関連も考えられるが，建物群のピットに比べ大きさや埋土が異なり，調査区南側から出土している古代～中世の遺物との関連が考えられる。

P87～98は，やや大きく長径が84～154cm，短径が46～96cmの楕円形を呈し，埋土も掘立柱建物跡群と似ていることから関連が考えられるが明確ではなかった。ここでは小ピット群として扱った。

各ピットの計測値は第17表に示した。

第6節　近世の遺物

遺物包含層Ⅱ層から出土した近世の遺物は，調査区の北側部分全域に集中しており，南側からの出土はほとんど認められなかった。北側全域に広く見られるⅡa層からの出土が主である。建物跡周辺では小片が多く，図化したものは比較的大きな破片の出土した溝状遺構1と溝状遺構5の間のE・F－26・27区の遺物が中心である。



第74図　小ピット群配置図

第20表　小ピット群計測表

挿図番号	遺構名	出土区	規模（cm）	
			幅	深さ
74	P 1	C－28	30×26	26
	P 2	C－28	32×26	19
	P 3	C－28	24×20	31
	P 4	C－28	28×25	31
	P 5	C－28	28×24	21
	P 6	C－28	28×26	12
	P 7	C－28	24×22	33
	P 8	C－28	34×28	23
	P 9	C－29	28×25	10
	P10	C－28	28×26	13
	P11	C－28	53×46	24
	P12	C－28	52×33	29
	P13	C－28	46×44	27
	P14	C－28	43×36	9
	P15	C－28	54×35	17
	P16	C－28	30×28	34
	P17	C－28	28×26	16
	P18	C－28	30×26	41
	P19	C－28	36×28	28
	P20	C－28	28×26	35
	P21	C－28	32×31	33
	P22	C－28	27×26	32
	P23	C－28	34×31	39
	P24	C－28	36×35	34
	P25	C－28	24×21	20
	P26	C－28	27×27	26
	P27	C－28	45×32	18
	P28	C－28	30×27	17
	P29	C－28	26×26	4
	P30	C－28	38×25	6
	P31	C－28	25×24	5
	P32	C－28	29×24	5
	P33	C－28	36×34	24
	P34	C－28	40×39	22
	P35	C－28	48×42	31
	P36	C－28	40×22	15
	P37	C－27	36×30	37
	P38	C－27・28	28×25	21
	P39	C－28	34×23	25
	P40	C－28	46×42	23
	P41	C－28	24×23	30
	P42	C－28	40×24	23
	P43	C－28	32×30	32
	P44	C－28	20×18	13
	P45	C－28	32×28	23
	P46	C－28	25×20	27
	P47	C－28	30×26	23
	P48	C－28	26×23	7
	P49	C－28	27×24	17
	P50	C－28	21×20	5
	P51	C－27	20×19	11
	P52	C－27	20×18	15
	P53	C－27	37×24	37

挿図番号	遺構名	出土区	規模（cm）	
			幅	深さ
74	P54	D－28	18×17	10
	P55	D－28	28×22	9
	P56	D－28	30×29	21
	P57	D－28	33×25	11
	P58	C－28	42×37	32
	P59	D－28	31×30	15
	P60	D－28	30×23	17
	P61	D－28	26×24	7
	P62	D－28	54×46	17
	P63	D－28	27×26	9
	P64	D－28	26×21	7
	P65	D－28	29×25	11
	P66	D－28	31×26	12
	P67	D－28	24×22	12
	P68	D－28	22×20	16
	P69	D－28	32×28	10
	P70	D－28	22×18	2
	P71	D－28	36×24	14
	P72	D－27	28×24	5
	P73	D－27	18×17	4
	P74	D－27	18×17	7
	P75	D－27	19×17	17
	P76	D－27	22×18	17
	P77	D－27	20×18	13
	P78	D－28	38×35	21
	P79	D－28	26×26	7
	P80	D－28	24×20	10
	P81	D－28	27×24	11
	P82	D－28	24×22	18
	P83	D－28	28×24	11
	P84	D－28	26×25	13
	P85	D－28	26×24	15
	P86	D－28	54×46	31
	P87	C－29	150×54	35
	P88	C－28	110×46	27
	P89	C－28	84×78	19
	P90	C－28	88×73	13
	P91	C－28	93×46	9
	P92	C－28	88×32	14
	P93	C－28	108×78	10
	P94	D－28	139×79	8
	P95	D－28	101×96	65
	P96	D－28	154×96	77
	P97	D－28	88×70	26
	P98	D－28	106×90	73
	P99	F－26	86×62	50
	P100	F－26	46×38	30
	P101	G－26	68×46	39
	P102	G－26	86×74	56
	P103	G－26	78×76	35
	P104	G－26	100×90	33
	P105	G－26	54×52	17

出土した遺物は陶磁器類が大部分であり，近世遺構出土の遺物とほぼ同じ時期のものであった。近世の出土遺物については，遺構出土遺物と同じように食器類（塊・皿など），調理具類（擂鉢・捏鉢・焙烙など），貯蔵具類（壺・甕・瓶など）に概ね分類し掲載した。

磁器碗（第75図417・418）

417は，低い高台から内湾気味に立ち上がり，胴部がわずかに膨らみを持つ磁器碗である。外面に山水文を描き，透明釉を全体に掛ける青磁染付の波佐見焼である。器壁が約3㎜と薄く，口唇部を丸く調整し，轆轤目を残さないナデ調整など丁寧な作りである。

418は底部のみ出土のため全体は明確でないが，やや高めの高台を持ち，見込がゆるやかに盛り上がる，いわゆる「饅頭心」の系統にある肥前焼の碗である。見込に圏線が2条巡り，多産を意味する吉祥文様として扱われる「柘榴」が描かれている。外面には草花文が描かれ，高台内外に6条の圏線が巡り，「萬福悠同」の底裏銘を施す。

陶器塊（第75図419～425）

419～421は，総釉の後見込を蛇ノ目釉剥ぎして，やや直線的に開く苗代川焼の陶器塊であり390～392と同類のものであると思われる。

419は総釉後畳付を釉剥ぎし，外面の腰部に強い張りを持つ器形で，筋状の轆轤目を残す。蛇ノ目釉剥ぎの輪帯に別個体の畳付の一部が熔着している。

420は口縁部のみであるが，内外に轆轤調整痕を残し，口唇部は丸く調整してある。内面に無施釉部分が見られる。

421は，高台外以下は無釉の陶器塊の底部である。胎土は黒褐色であり，焼成が良好でかなり硬質である。釉が飴色に発色している。

422・423は，黄白色の胎土に天目釉が掛かる天目茶碗である。内湾しながら立ち上がり，口縁部近くで内傾しわずかに反る口唇を呈す器形である。高台以下は無釉であり，焼成が良好で釉が黒色に発色し，焼成時の釉溜りが見られる。高台形は明確ではないが，口唇部を丸く仕上げ轆轤目を残さないように調整するなど丁寧な作りである。

424・425は，底部から内湾しながら立ち上がる器形で，白色胎土に鉄釉を施し，見込に平坦面を持つ陶器塊の底部である。高台脇より下は無釉であり，焼成不良のため発色せず茶褐色に曇っている。

皿（第76図426・427）

426は，径7.2cm，厚さ1.8cm，幅1.6cmの幅広の蛇ノ目高台を持ち，底部を厚くし口縁部に向かいながら徐々に薄くなる安定した器形の磁器皿である。見込には平坦面を持ち，圏線が2条巡り，中央に草花文が描かれている。口縁部は欠損のため全体像は明確でないが，高台脇に指跡が3個，熔着した窯傷跡1ヶ所が認められる。

427は，高台内を斜めに削り出し，高台脇からほぼ水平に立ち上がり灰釉の掛かった陶器皿である。高台脇以下は無釉であり，見込に圏線を2条巡らせ，蛇ノ目釉剥ぎを施している。環帯部に熔着した別個体が見られる。胎土は明灰色で焼成が良く締まっている。

蓋（第76図428）

428は，楕円形のつまみを有する天井部に平坦面を持ち，口縁部へ向かってなだらかに傾斜する深みのない平坦な蓋である。底部以下は無釉であるが，口唇部に別個体のものと思われる釉が付着している。胎土は暗赤橙色で，焼成不良のため発色していない。

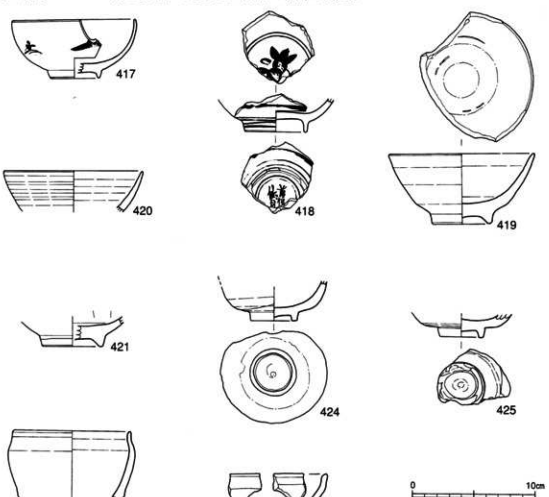
捏鉢（第76図429）

429は，底部からほぼ直線的に立ち上がり，口唇部に内傾した平坦面を持つ捏鉢である。内外面ともに２本の沈線が巡り，施釉後の底部を拭き取っているが，別個体のものと思われる焙着が残る。口唇部はわずかに釉を削り取った跡が見られる。

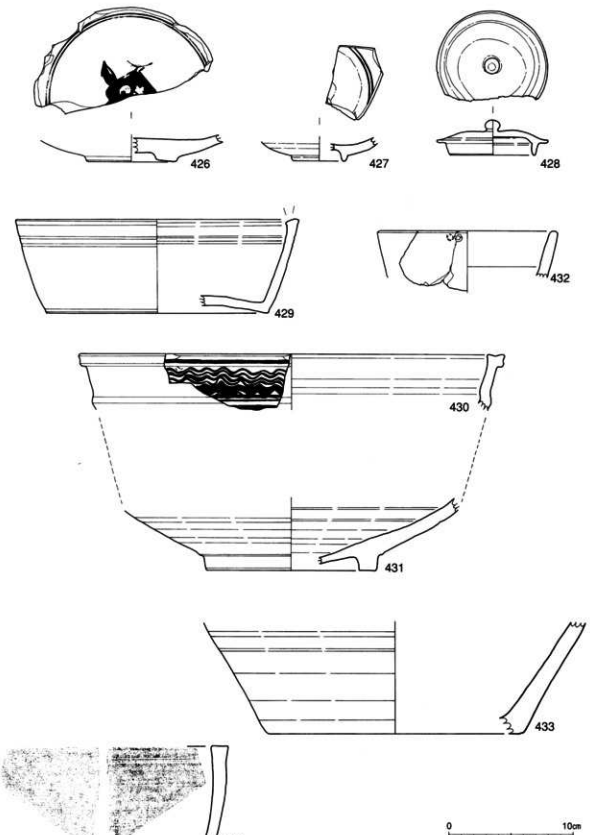
その他（第76図430～434）

430・431は，高台脇からほぼ水平に伸びる皿状の底部を呈し，腰部に強い張りを持ち垂直方向へ立ち上がり，開いたままの状態で口縁となる甕である。部分的な出土のため全体は明確でないが，底径14㎝，口径34㎝，器高約20㎝であると思われる。口縁部は逆Ｌ字状に外反し，口唇部に平坦面を持ち，口唇から胴部にかけて白化粧に波状のハケ目を施し，透明釉が掛かっている。見込には明瞭なハケ目調整痕が渦状に残り，砂の付着した目跡が認められる。

432は，浅い素焼きの鉢である。焼成が良く，胎土は黒褐色であり硬質で全面にススが付着している。外面にハンコの跡と思われる径６㎜の円形の刻印が残る。



第75図　低地部の出土遺物12（その他①）



第76図　低地部の出土遺物13（その他②）

第21表　低地部の遺物観察表 3 （近世）

挿図番号	遺物番号	器　種	出土区·層		口径	底径	高台径	器高	備　考	注記番号
63	376	磁器　碗	6H	ピット	10.4		4	5.4	透明釉　総釉　一重網目文　焼成不良	—
	377	磁器　碗	F26	ピット	10.1				透明釉　口縁部　肥前焼　草花文	—
	378	磁器　碗	6H	ピット			4.1		透明釉　蛇ノ目釉剥ぎ　草花文　畳目熔着	—
	379	陶器　埦	6H	ピット			4.4		灰釉の上に鉄釉　畳目釉剥ぎ	—
	380	陶器　埦	6H	ピット	13.6				鉄釉　口縁部　焼成良好	—
	381	陶器　埦	6H	ピット	11.4				透明釉　蛇ノ目釉剥ぎ　磁質陶器　折れ松葉	—
	382	磁器　壺	6H	ピット			4.8		外側透明釉　筋状の貫入　内側無釉　ケズリ痕　袋物	—
	383	陶器 土瓶	6H	ピット	9.4				鉄釉　口縁から肩部　ケズリ痕	—
	384	陶器 土瓶	6H	ピット		7.1			内側鉄釉　外側無釉　重ね焼きによる焼成ムラ	—
	385	焙　烙	6H	ピット	18.1	14.4		3.8	無釉　土師質土器　産地不明	—
	386	陶器 擂鉢	6H	ピット		10.2			鉄釉　7条一単位櫛目　外帯二段	1404
	387	陶器 擂鉢	6H	ピット	22.8				鉄釉　7条一単位櫛目　外帯一段　口唇釉剥ぎ	—
	388	土器　甕	6H	ピット					無釉　外面にスス付着	—
	389	土器　鉢	6H	ピット	32.4				無釉　外面に細かい調整痕	—
69	390	陶器　埦	E27	溝1	11.8		4.8	6.2	鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　畳目釉剥ぎ　釉溜り	—
	391	陶器　埦	E27	溝1	11.6			5.5	鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　高台熔着　畳目欠損	—
	392	陶器　埦	E27	溝1			5.1		鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　畳目釉剥ぎ　底部	—
	393	陶器　埦	E27	溝1	12.4				鉄釉　釉溜り白濁　口縁部　焼成良好	—
	394	陶器　埦	E27	溝1	9.5		3.8	6.5	透明釉　細かい貫入　内野山窯　畳目釉剥ぎ	—
	395	磁器　皿	E27	溝1	13.8		6.4	3.4	透明釉　蛇ノ目釉剥ぎ　アルミナ塗り　五弁花文　畳目剥ぎ	—
	396	陶器 土瓶	E27	溝1	8.6				鉄釉　外面腰部以下無釉　一穴注口　算盤玉形	—
70	397	陶器 片口	E27	溝1	23.6				鉄釉　口縁帯下注口　口唇部釉剥ぎ	—
	398	陶器 擂鉢	E27	溝1	31.2	12.8		13.6	鉄釉　口唇部釉剥ぎ　8条一単位櫛目　外帯一段	—
	399	陶器 擂鉢	E27	溝1	33.2	15.4		14.5	鉄釉　口唇部釉剥ぎ　8条一単位櫛目　外帯二段	—
	400	陶器 捏鉢	E27	溝1	23.1	13.2		11.2	鉄釉　口唇部釉剥ぎ　外沈線二条	—
	401	陶器　壺	E27	溝1		8.2			外側鉄釉　内側無釉釉流れ込み　小壺	—
	402	陶器　甕	D26	溝1					外側鉄釉　内側無釉　肩部　暗赤褐色	—
	403	土器　鉢	E27	溝1					無釉　素焼き　時期不明	—
	404	土器　鉢	E27	溝1					無釉　素焼き　時期不明	—
71	405	陶器　埦	F27	溝5	12.4		4.6	6.6	飴釉　蛇ノ目釉剥ぎ　高台以下釉無し	—
	406	陶器　埦	F27	溝5	13.8				鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　口縁部	—
	407	陶器　埦	F27	溝5			3.5		透明釉　底部　灰白色　産地不明	—
	408	磁器　碗	F27	溝5	15.6				透明釉　口縁部　肥前焼	—
	409	磁器　碗	F27	溝5					透明釉　口縁部　肥前焼	—
	410	陶器 土瓶	F27	溝5					鉄釉　内外とも施釉　注口部	—
	411	陶器 土瓶	F27	溝5					鉄釉　内外とも施釉　注口部　一穴	—
	412	陶器 捏鉢	F27	溝5	27.4	20.9		8.7	鉄釉　口唇部釉剥ぎ　外沈線二条	—
72	413	陶器　埦	D27	池	11.7		4.8	6.1	鉄釉　総釉　畳目釉剥ぎ	—
	414	磁器　皿	D27	池	11.6		3.8	3.3	透明釉　蛇ノ目釉剥ぎ　アルミナ塗り　草花文　肥前焼	—
	415	焙　烙	D27	池	17.2	13.4		4.4	無釉　土師質土器　産地不明　外面にスス付着	—
	416	陶器　蓋	D27	池	16.8				鉄釉　総釉　焼成不足発色なし	—
75	417	磁器　碗	E27	Ⅱ	10.1		3.9	4.8	透明釉　青磁染付　羽佐見焼　山水文	—
	418	磁器　碗	—	—			5.1		透明釉　底部　肥前焼　草花文　底裏銘	—
	419	陶器　埦	F27	Ⅱ	11.8		4.8	5.7	鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　畳目釉剥ぎ	—
	420	陶器　埦	—	—	11.4				鉄釉　口縁部	—
	421	陶器　埦	1T下	Ⅱ			4.8		鉄釉　蛇ノ目釉剥ぎ　高台無釉　焼成良好	—
	422	陶器　埦	F26	Ⅱ	9.4				天目埦　高台脇以下無釉　瀬戸焼　白色胎土	—
	423	陶器　埦	B21	Ⅱ					天目埦　口縁部　瀬戸焼　白色胎土	1122
	424	陶器　埦	E26	Ⅱ			3.8		鉄釉　高台脇以下無釉　白色胎土	1487
	425	陶器　埦	E27	Ⅱ			3.8		鉄釉　高台脇以下無釉　白色胎土	—
76	426	磁器　皿	—	—			7.2		透明釉　底部　蛇ノ目高台　肥前焼　草花文	—
	427	陶器　埦	—	—					灰釉　蛇ノ目釉剥ぎ　高台熔着跡　高台脇以下無釉	—
	428	陶器　蓋	F27	Ⅱ	7.1				表側鉄釉　裏側身受部より無釉　土瓶用	—
	429	陶器 捏鉢	—	—	22.6	20.1		7.6	鉄釉　口唇部釉剥ぎ　底釉ふき取り跡	—
	430	陶器　鉢	F25	Ⅲ上	34.6				外側透明釉　内側無釉　口縁部　唐津焼	874
	431	陶器　鉢	E24	Ⅱ			13.6		無釉　底部　唐津焼　砂目有り	1471
	432	土器　鉢	E27	Ⅱ		20.4			無釉　素焼き　時期不明　轆轤目多数	1450
	433	土器　鉢	E27	Ⅱ					無釉　素焼き　時期不明　轆轤目多数	—
	434	土器　鉢	B21	Ⅱ	14.2				無釉　土師質　鉢形容器　内側スス付着	1011

433・434は，筋状の櫛目を持つ素焼きの鉢である。全体的に赤橙色をしており，器壁が1.5～2㎝と厚い。

土錘（第77図435～438）

435～438は，素焼きの土錘である。列状石列の北側で古代の土師器を伴って出土している。中央部が膨らみを持ち，両端に向かって細くなる形状であり，表面はナデ調整を施し曲面に仕上げている。202はやや大型であるが，大きさは平均して長さ4.4㎝，幅1.8㎝，重さが約10ｇ，孔の径は0.3～0.7㎝であり，両端に平坦面を持たない。

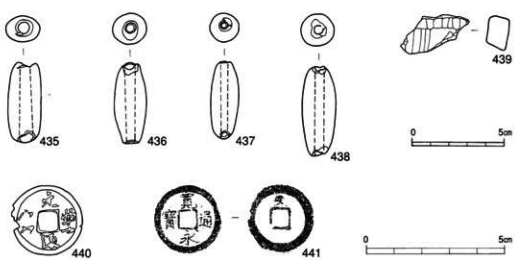
滑石製石鍋片（第77図439）

439は，小片であるが本遺跡1点のみ出土した，外面にケズリ調整のノミ痕が残る滑石製石鍋片である。内面はケズリの後ナデ調整を施し平面に仕上げている。

古銭（第77図440・441）

440は，元豊通寶である。径2.4㎝，厚さ1.1㎜であり，背文字は見られない。腐食した数個の小片の状態で出土した。

441は，寛永通寶である。背文字は見られない。



第77図　低地部の出土遺物14（土錘・滑石製石鍋片・古銭）

第22表　低地部の遺物観察表４（その他）

挿図番号	遺物番号	器種	出土区・層	口径	底径	高台径	器高	備考	注記番号
77	435	土錘	C22 Ⅱ	4.4	1.8		8.2		826
	436	土錘	D22 Ⅱ	4.4	1.8		9.2		1071
	437	土錘	C22 Ⅱ	4.2	1.6		7.9		831
	438	土錘	C22 Ⅱ	4.8	1.8		15.2		781
	439	滑石製石鍋片	B21 Ⅱ			12.2		ノミ痕あり	1164
	440	古銭	D22 Ⅱ	2.4		1.1		元豊通寶	1079
	441	古銭	D27 池	2.5		0.9		寛永通寶	—

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　丘陵部

丘陵部（瀬戸口）は，調査の結果，旧石器時代ナイフ形石器文化・細石刃文化，縄文時代早期・前期などを中心とする複合遺跡であった。以下明らかになった点や，課題等について各時代ごとに挙げてまとめとする。

１．旧石器時代

ナイフ形石器文化について

石器の出土量は多くなかったが，ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器の組成が確認された。使用されている石材は，ナイフ形石器が上牛鼻産黒曜石，台形石器と三稜尖頭器が日東産系黒曜石と使い分けされている可能性も指摘できるが，出土石器の数量的に多くないことより傾向が認められるとしておきたい。ナイフ形石器は幅広で横長に近い形状の剥片を素材とし，切り出し形の二側縁加工であり，比較的厚みのあるナイフ形石器となっている。また，基部は鋭く片側縁辺は内湾状にブランティングを施したものもあり，人吉市狸谷遺跡出土の狸谷型ナイフ形石器（松藤1992）の範疇でとらえられるものである。本県で狸谷型は仁田尾遺跡などで類例が知られており，ＡＴ降灰後直後の時期と考えられる。

細石刃文化について

出土した細石刃核は作業面が２面ある野岳・休場型に分類されるものと，広くて平坦な打面をもち正面形がＵ字形で打面幅が広く作業面長が短く船野型に類似するもの，そして剥片の主要剥離面を側面にし木口から細石刃を剥いでいるものとの３種類に区別できる。使用されている石材は，細石刃核では２点が黒曜石で他はチャート製であり，また細石刃では１点チャート製で他は黒曜石となっている。チャート製の細石刃核は本県では少なく，チャートは川内川河口の月屋山で産出しており，その所産と推定される。また，上牛鼻産黒曜石は細石刃のみであり，細石刃核は持ち去ったものと思われる。細石刃核の形態と組み合わせより南九州細石刃文化編年（宮田1996）のⅡ期相当に位置づけられる。

２．縄文時代

縄文時代の遺構として集石・陥し穴及び陥し穴状遺構，土坑，竪穴状遺構など各種のものが検出されたが，陥し穴と土坑について若干述べる。

陥し穴について

底面にクイ等の施設のための小穴が確認された明確な陥し穴は１基である。台地の縁辺で検出されている。一部を新しい穴により欠損しているため全体の長さは不明である。平坦な底面には小穴が３個検出され，その小穴には底面とほぼ同じレベルで小礫が確認された。この小礫はクイを固定するためのものと考えられ，本県では初出であった。類似する形態で小穴に各小礫が認められる例は最近報告された宮崎県長薗原遺跡で縄文時代早期のものが２基検出されている。１基は小穴が４

個で，別のものは小穴が3個である。このような小礫を使用する例は九州では福岡県高津屋遺跡，鳴水・古屋敷遺跡，大分県黒木遺跡で小穴が1つのものに，また大分県口野尾遺跡，目久保第1遺跡では本遺跡と同様の形態で小礫が認められ，さらに熊本県大丸・藤ノ迫遺跡で知られており，広く行われていた方法である。陥し穴については第3節で取り上げる。

土坑について

多種・多様な形態及び深さのものが多く検出された。生業のなかでこれらがどのように利用されどのような目的をもっていたのか明らかにすることが今後の課題である。例えば2号土坑のように片側に深い穴をもつものは，東和幸氏により葛などの地下茎植物採掘痕として植物質食料に関する推定が行われており（東2001），このような分析・検討をさらに深めていく必要があろう。

出土土器について

縄文時代早期のものが多く，そのなかで出土量が最も多かったものは，1類土器と2類土器であった。1類土器は石坂式土器であり，2類土器は中九州に多いとされる中原式土器である。中原式土器は円筒形条痕文土器として南九州でも出土例は少なくなく，直口する口縁部上位に貝殻条痕による文様帯があり，丸く治められた口唇部，内面のミガキ調整，胎土に角閃石を多く含むなどの諸特徴が知られている。本遺跡出土の2類土器は口縁部の貝殻条痕文様帯がないものの，その他の口唇部の特徴，内面調整，胎土に角閃石を多く含むなどの特徴から2類土器として分類し，その上で細分している。石坂式土器と中原式土器は共伴する傾向が高いようだ。

6類土器は塞ノ神式土器Aに比定される。7類土器はアカホヤ火山灰直下で出土する早期末の条痕文土器に近いと判断される。

8類の壺形土器は無頸の壺形土器であり，胎土・調整から縄文時代早期のものと考えられるが，これまで知られている南九州の早期壺形土器とは形態的に異なっている。

10類土器は轟B式土器に比定される。

14類土器は本遺跡で衝撃的なものであった。器形が明確でなく判然としないが，極めて小型の鉢形土器となる。特徴的なのはその文様であり，2本の沈線の間を半円形にナデて隆起線文とし，これに区画された内側はシャープな沈線による格子目状の文様で充填される。このような土器は九州では無く北陸地域の石川県・富山県などで出土している「新崎式土器」に極めて類似している。もしそうなら，人の動き，移動，交流，文化の伝播など予想以上に広範囲に及んでいたと言えよう。

出土石器について

縄文時代早期の各種の石器が出土しており，石器組成は多種な内容を有するが，石器組成のなかで最も量的に多いのは石鏃であり，次に削器・掻器などのスクレイパー類であった。石器組成と住居跡などが検出されていないことを含めて，本遺跡は狩猟キャンプ的な性格と推定される。

特筆するものに石斧集積遺構が検出された。明確な掘り込みは確認されなかったものの，出土した石斧は磨製石斧を新たに剥離を施し打製石斧に再生したものであり，集積遺構の性格・意味を考える一つの判断材料となる。本遺跡の場合，再生を意味する祭祀遺構であろうか。最近こうした石斧類の集積遺構の検出例が増加しており，各々の性格究明が必要である。

また，腰岳産と推定される大型剥片・分割礫などは，石鏃など小型石器をつくる石核用素材として当時の石材流通などを推定しうる好資料である。遠隔地石材の持ち込み流通は大きな礫ではなく，大型剥片や分割礫であることを示す貴重な例である。

第2節　低地部

1．縄文時代

低地部から縄文土器や石器が24点出土しているが，低地部全体の出土量からみると少なく，また，出土地点は調査区の南東側に集中し，土師器・須恵器に混ざった状態での出土であり，土器・石器の集中したところはなかった。低地部の調査では，縄文時代の明確な包含層は認められなかった。また，丘陵部で出土した石鏃の中に，最大幅が基部端でなく中央から少し下の部分となる特徴的な鉢地型石鏃があり，同じ形態の石鏃が低地部からも出土している。これらのことより，低地部で出土した縄文時代の土器・石器は，縄文時代が主体である丘陵部より，何らかの原因で北側の裾野に隣接する低地部に流れ込んできた可能性が考えられる。

2．古代～中世

古代～中世にかけての遺物は明確に分かれておらず，同じ包含層からの出土であった。調査区南側全体から出土しているが，特に五輪塔（地輪）を持つ配石遺構と列状石列の周辺に集中が見られた。五輪塔は地輪部のみの出土であり，水輪以上は調査区内では検出されなかった。廃仏毀釈の激しかった土地柄から破棄された可能性も考えられる。下部に方形に敷き詰められた配石は，五輪塔を据えるための基礎と思われるが，配石下などに埋葬を示す遺構・遺物は確認されず，埋め墓というよりも参り墓として設置されたと考えられる。五輪塔と列状石列との関係は明確ではないが，検出面の標高はほぼ同じであり，古代～中世のものと思われる小ピット群の検出された北側から五輪塔方向へ続いており，五輪塔へ向かう参道に関連する石列とも推測される。しかし，建物跡などの遺構がはっきりとは検出されておらず，石列と配石遺構もしっかりとつながっていない現状から明確ではない。

古代の土師器・須恵器については，完形品が少なく明確でないが，9世紀後半頃に位置付けられる。

3．近　世

掘立柱建物跡について

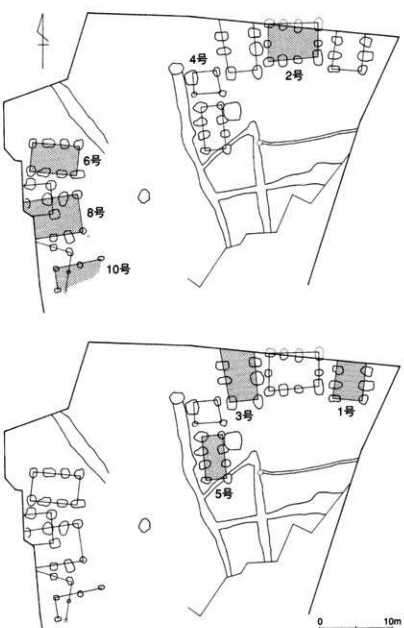
掘立柱建物跡は計10棟検出された。共通して大型のピットを持ち，建物規模もほぼ同じである。ピット内からは，根石と思われる平坦な礫，柱痕跡，残存した柱などが検出されている。根石を据えるか据えないかの違いはあるが，長径1.5m，短径1m前後の穴を深さ1m近く掘り，柱を埋め込んで周りを突き固める方法で建物を建てていたと考えられる。建物を取り壊す際には，深く掘り込んで埋め込んである柱は抜かずに，周りを浅く掘り下げ切り離した後，柱下部を残したまま表面を埋め固めたものと思われる。建物跡に明確な時期差は見られないが，規模の大きさに比べて建物同士が近接しており，庇部の存在を考慮すると同一時期に建っていたとは考えにくい。また，主軸の向きは南北方向と東西方向に大別されるため，短い間隔での時期差があったのではないかと推定される。（第78図）

溝状遺構は，格子状に検出され，建物跡群に並んで位置している。水田跡を示す青灰色土層が存在することから，西側山部からの湧水を利用して溝を整備し，畑地から水田へ移行させ稲作が行われていたと推定される。また，耕作地と建物群との境界を示しているとも考えられる。

出土遺物について

近世の出土遺物には，陶器の塊・皿・土瓶・蓋・擂鉢・捏鉢を主体として，磁器の碗・皿，天目塊，焙烙，素焼きの鉢などがある。天目塊を除いて特別な階層の用いた陶磁器はなく，灯明具や仏具は見あたらないが，一般的な近世の町屋の出土状況と思われる。出土品の陶磁器の中に，宮崎南部や大隅方面に大量に出土する竜門司焼・元立院焼系は見あたらない。

磁器は，出土量が多くはないが，ほとんどが17世紀中頃から18世紀前半期の肥前焼である。中には，見込に柘榴を描いた皿も含まれ，見込文様に果実を描く数少ない資料である。川内川沿いの平佐焼の窯跡から約15km北に位置する本遺跡の位置環境から，当初「平佐焼」が主要な出土量を占めるものと考えていたが，今回の出土品には平佐焼は混入していない。平佐焼は1770年から生産が始まるため，遺跡の時間的な下限は18世紀の中頃までと考えられる。



第78図　掘立柱建物跡の主軸と時期

陶器の多くを占めるのは薩摩焼である。特に擂鉢や捏鉢は，器壁を薄く作り，焼締まりの悪い口縁部を逆L字状につくる18世紀後半の苗代川焼であり，口縁部に一条の突帯を持つ山元窯タイプ（17世紀第4四半期）の器形に近い。塊の中には，深いオリーブ色の釉調を呈し，総釉の後見込を蛇ノ目釉剥ぎし，畳付の釉を削り取った，やや直線的に開く丸形の塊が十数点あった。他の資料が18世紀前後に位置づけられることや，竜門司焼ではないことなどを考慮すると，これらの塊も17世紀中頃から18世紀前半期の苗代川焼の塊と考えるべきであろう。苗代川焼は，主として甕や壺類，鉢のような大型の製品が多く，塊・皿のような小型の陶器はほとんど知られていない。東市来町の雪山遺跡出土の塊と比較しても明らかな相違があり，今後の苗代川焼の塊の編年を知る上で貴重な資料である。

第３節　鹿児島県の陥し穴遺構について

１．本県での調査・研究史

本遺跡を含めて陥し穴の検出例が近年増加しており，発見が珍しくなくなってきたのは最近のことである。ここでは，まず鹿児島県での調査・研究史を振り返り，同時に全国的な研究動向にも若干ふれて整理しておきたい。

今村啓爾氏による1973年の『霧ケ丘』の報告は，陥し穴に関するほとんどの諸問題を呈示したものであり，陥し穴研究の出発点とも言えるものであった。

本県での最初の発見は志布志町倉園Ｂ遺跡（瀬戸口1984）であり，縄文時代早期のもので楕円形を呈し，底面中央に小穴があるものが2基発見された。底面に小ピットがあることより陥し穴を意識した報告となっている。1986年には熊本県大丸・藤ノ迫遺跡（木崎1986）で13基検出され，小穴を有する土坑として他の土坑と区別され，陥し穴に近似すると報告されている。

1987年枕崎市奥木場遺跡の報告書では，底面に小穴が２列４個の計８個認められるものをこれまで発見されている陥し穴の小穴とは数が異なるが陥し穴遺構に類似すると取り上げ，また長方形で小穴のない深い土坑を陥し穴の可能性が考えられると報告（宮田1987）している。本県の調査ではこの段階まで普通の土坑と同様に上面からのみ掘り下げを実施したのが通常であった。しかし，菊池実氏による断面スライス方式の実践例の報告（菊地1987）がなされたのもこの年であった。

1989年富永直樹氏は九州の陥し穴を集成（富永1989）し，九州での陥し穴研究の先鞭をつけた。なおこのなかでは鹿児島県の例として倉園Ｂ遺跡例と奥木場遺跡例はもれて栗野町山崎Ｂ遺跡と桑ノ丸遺跡の土坑が取り上げられている。これらの土坑は報告書では性格不明の土坑とされているものであるが，小穴はないものの形態は類似している。

1993年は松元町仁田尾遺跡で旧石器時代細石刃文化の陥し穴が発見され，また国分市上野原遺跡で縄文時代後期の大型陥し穴が直線状に並んで検出されるという画期の年であった。仁田尾遺跡例は長方形あるいは楕円形を呈し，下面に複数の小穴を持つものであり，クイ跡を正確に調査するために底面を横からスライスする方法を実施した調査であった。同時に陥し穴の型取りと土層転写も実施された。上野原遺跡でも横からの調査も並行して行われ，また土層転写も行われた。

稲田孝司氏は西日本の陥し穴について，内部施設を注目した論考を発表（稲田1993）している。

1994年仁田尾遺跡では小穴の精密な調査によりクイ痕跡の検出を行い成果を上げた。旧石器時代の陥し穴として出水市大久保遺跡でも，次の年には入来町鹿村ケ迫遺跡でも検出された。このことは旧石器時代南九州では広い範囲で陥し穴猟が行われていたことが明らかとなった。偶然にも両遺跡の調査担当者は前年に仁田尾遺跡の陥し穴の調査に研修で参加していた。1994年に高橋信武氏は九州の陥し穴の変遷を発表している。このなかで鹿児島県の陥し穴は，山崎Ｂ，奥木場，倉園Ｂ，仁田尾に加えて川内市西ノ平の土坑を入れ，先に富永氏が入れた桑ノ丸例は除かれている。

1996年には鈴木忠司氏が，岩宿時代の陥し穴の全国集成と，岩宿時代以後の陥し穴の変遷を発表（鈴木1996）している。

1997年には本遺跡のほかに，溝辺町曲迫遺跡と東免遺跡で縄文時代中期の陥し穴が検出された。

1998年・1999年には東九州自動車道建設に伴う調査において，前原和田，供養之元，永磯，耳取，

桐木，九養岡など福山町・財部町に所在する多くの遺跡で縄文時代中期の陥し穴が検出された。また竹ノ山B遺跡では細石刃文化の陥し穴が発見された。

2000年には上野原遺跡D地点の報告書が刊行され，大型陥し穴の報告がなされ，同時に県内の陥し穴が集成された（中村ほか2000）。

2．陥し穴の時期と形態及び変遷

本県で検出された陥し穴は第23表に示したとおりであり，旧石器時代細石刃文化から縄文時代後期まで総計約150基以上が発見されている。調査面積にも関係すると思われるが，一つの遺跡で検出されている数は上野原遺跡を除くと多くない。

本県では時期の明確な火山灰が多く，例えば薩摩火山灰，アカホヤ火山灰，御池火山灰などが陥し穴の底面や上部に堆積しており，時期を特定する決め手になっている。仁田尾遺跡や鹿村ケ迫遺跡は薩摩火山灰の下に掘り込まれており，また縄文時代早期のものはアカホヤ火山灰の下で掘り込まれている。縄文時代中期の供養之元遺跡などの例は御池火山灰が底面や内部に堆積している。このように火山灰により時期が確実におさえられるものが多いのが特徴である。

他の地域であまり類例がない時期ではあるが，本県では旧石器時代細石刃文化の陥し穴が4遺跡で検出されている。また，縄文時代草創期・早期・中期・後期と明確な火山灰で区別された各時期の陥し穴が検出されているのも特徴である。

本県で検出された陥し穴の形態は，第79図のように長方形あるいは楕円形と，円形とに大きく区別でき，また円形のものは直径・深さで細別される。長軸の最大長は2mを越す例から約1mに満たないものまで様々である。底面のクイの小穴は多数認められるものから全く無いものまで存在している。以下，各火山灰により区別された陥し穴の変遷は次のようになる。

旧石器時代細石刃文化の陥し穴は，長方形あるいは楕円形を呈しており，基本的に底面施設としての小穴を有している。小穴の数は一定しないが中心に1列並ぶものや複数列並ぶものが認められている。仁田尾遺跡の例では中心に小穴が並ぶものは，各々に複数のクイを立てたものであり，複数列の細い小穴は各々クイを1本ずつ立てたものであることが確認されている（宮田1996）。しかし，宮崎県別府原遺跡（日高1998）例では円形や楕円形を呈し，小穴のないものも多いという。

縄文時代早期の陥し穴はいずれも中葉から後半の時期のみであり，長方形ないし楕円形を呈し，底面の小穴は細石刃文化のものと同様のもの，あるいは中央に1個のものや複数認められるものの他に全く無いものが存在し多様性がある。

縄文時代中期の陥し穴は最近多くの遺跡で検出例が増加しており，長軸が長い長方形を呈し，底面の小穴は無いものと少数あるものが認められている。

縄文時代後期の陥し穴は上野原遺跡のみの検出例であるが，列状に並ぶ配置であり，多数の検出が行われている。形態は円形を呈し，小型で小穴をもつものともたないもの，そして大型で深く小穴がないものに大別できる。

この他の形態として高橋信武氏はハイヒール型を設定しているが，これについては地下茎植物採掘痕の可能性が高い（東1999）と考えられる。

長方形あるいは楕円形の陥し穴の長さと幅に関しては，遺跡により差異が認められる。例えば大

久保遺跡の長軸の長いものと仁田尾遺跡の短いものの違いは，対象動物におけるシカとイノシシの違いと言うような差に起因する可能性が考えられようか。

これまで検出された陥し穴の時期ごとの形態は，長方形ないし楕円形という細石刃文化以来の形態が，中期になると長方形になり，後期では円形となるという形態変遷が予想されるが，あくまでも本県の現在時点の結果であり，宮崎県の例によると各地域で細かい差があるようだ。

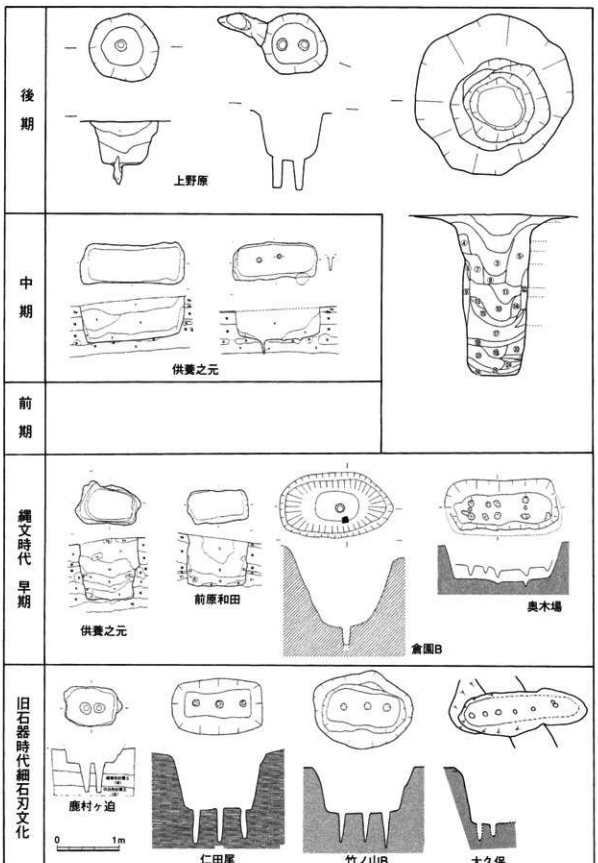
3．陥し穴の配置と猟

本県の検出例によると，細石刃文化期・縄文時代早期のものはそれぞれ単独で，あるいは少し距離をおいて検出されており，列配置ではなく，各々個別の単独陥し穴と考えられる。最近検出例が増加した縄文時代中期も同様である。

縄文時代後期の上野原遺跡例は数mおきに直線状に並ぶという典型的な列配置であり，他の時期及び他の遺跡例とは全く異なるものである。このように多くの陥し穴を列配置することは，設置する仕事量の多さから集団の構成人数が多いことが推定され，また陥し穴猟の方法の違いがあると考えられる。後期の列配置は，中間に柵をつくり集団による積極的な追い込み猟の可能性が高く，陥し穴猟の画期が存在したと推定される。

第23表　鹿児島県の陥し穴地名表

遺跡名	所在地	時代	基数	形状	底面小ピット	備考	文献
仁田尾	日置郡松元町	旧石器	17	長方形 楕円形	2～10個	打ち込み杭のものと10～15㎝の小穴に2･3本の細い杭を埋めたものがある。	31
大久保	出水市上場	旧石器	1	楕円形	7個	埋土中に剥片・チップ	3
鹿村ケ迫	薩摩郡入来町	旧石器	2	略長方形	2個・3個		25
竹ノ山B	日置郡伊集院町	旧石器	2	楕円形	3個		9
桐木	曽於郡末吉町	縄文草創期	1	楕円形	2個		
城ケ尾	曽於郡財部町	縄文草創期	1	楕円形	3個		
前原和田	姶良郡福山町	縄文草創期 早期	2 1	楕円形 楕円形	0個・5個 0個		4
倉園B	曽於郡志布志町	縄文早期	2	楕円形	各1個		15
奥木場	枕崎市東鹿篭町	縄文早期	1	楕円形	2列8個		28
城ケ尾	姶良郡福山町	縄文早期	3	楕円形	3～6個		
耳取	曽於郡財部町	縄文早期	1	楕円形			
供養之元	姶良郡福山町	縄文早期 縄文中期	3 2	長方形	0個 0個・2個		22
曲迫	姶良郡溝辺町	縄文中期	8	略長方形	有(1～3個)		
東免	姶良郡溝辺町	縄文中期	16	略長方形	1個・11個	小ピットなし　3基	
永磯	姶良郡福山町	縄文中期	19	楕円形	有(1～3個)		
耳取	曽於郡財部町	縄文中期	12	楕円形	3個		
九養岡	曽於郡財部町	縄文中期	2	楕円形			
上野原	国分市上之段	縄文後期	79	円形	0～2個	深さで2類に分類	21
根木原	垂水市	旧石器？	12	長方形		薩摩火山灰の下位	
桜ケ丘キャンパス	鹿児島市	旧石器～縄文草創期	1	長方形	4個	薩摩火山灰の下位	41
七ツ谷	姶良郡吉松町	縄文早期	15	長方形	2～6個		42



第79図　鹿児島県の陥し穴の変遷

参考文献

1 稲田孝司「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』天山舎 1993
2 今村啓爾「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例比較」『物質文化』№27
3 岩崎新輔『大久保遺跡ほか』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 1997
4 大保秀樹『前原和田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（36） 2002
5 鎌田洋昭「帖地遺跡における帖地型石鏃について」『ドキどき縄文ときがけ展図録』指宿市教育委員会 1999
6 菊地 実「縄文時代の陥し穴調査法と派生する諸問題」『研究紀要』4 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
7 木崎康弘『蒲生・上の原遺跡』熊本県文化財調査報告書 第158集 1996
8 木崎康弘『大丸・藤ノ迫遺跡』熊本県文化財調査報告書 第80集 1986
9 黒川忠弘・桑波田武『竹ノ山A・B遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（29） 2001
10 桑波田武・宮田栄二「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』31号 1997
11 佐藤宏之「陥し穴猟と縄文時代の狩猟社会」『考古学と民族誌』六興出版 1989
12 鈴木忠司「岩宿時代の陥穴状土坑」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996
13 鈴木忠司「岩宿時代の陥穴の変遷とその背景」『下原遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996
14 園 一之「山元古窯跡」加治木町教育委員会 1995
15 瀬戸口望『倉園B遺跡』志布志町埋蔵文化財報告書（7） 1984
16 高橋信武『宇佐別府遺路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書』大分県教育委員会 1993
17 高橋信武「九州の陥し穴の変遷」『先史学・考古学論究』龍田考古学会 1994
18 時任和守ほか『長薗原遺跡』宮崎県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第57集 2002
19 富永直樹「九州のおとし穴遺構について」『安武地区遺跡群Ⅱ』久留米市文化財調査報告書 第60集 1989
20 中村和美「鹿児島における古代の在地土器」『鹿児島考古』第31号 1997
21 中村耕治ほか『上野原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（27） 2000
22 野辺盛雅・山崎克之『供養之元遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（36） 2002
23 東 和幸「地下茎植物採掘痕と考えられる掘り込み」『貝塚』第57号
24 日高広人「九州における細石器文化期の遺構について」『九州の細石器文化Ⅱ』 1998
25 藤井法博『鹿村ケ迫遺跡』入来町埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 1997
26 前迫亮一「南九州縄文時代早期前半の居住活動に関する一予察」『大河』第5号 1994
27 松藤和人「南九州における姶良Ｔｎ火山灰降下直後の石器群の評価をめぐって」『考古学と生活文化』 1992
28 宮田栄二・旭慶男『奥木場遺跡』枕崎市埋蔵文化財報告書（3） 1987
29 宮田栄二「鹿児島県下の石器の材質」『大河』第5号 1994
30 宮田栄二「陥し穴（鹿児島県）」『旧石器から縄文へ』鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会 1995
31 宮田栄二「鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡」『日本考古学年報』47 1996
32 宮田栄二「南九州における細石刃文化終末期の様相」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念論文集 1996
33 宮田栄二「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」『石器原産地研究会 第1回研究集会資料』 2002
34 石川県立埋蔵文化財センター編『鹿島町徳前Ｃ遺跡調査報告(Ⅳ)』 1983
35 大分県教育委員会編「一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財調査報告書(1)」 1988
36 北九州市教育委員会編『高津尾遺跡―第14地点―』北九州市文化財調査報告書 第47集 1989
37 北九州市埋文調査室「鳴水・古屋敷遺跡」北九州市埋蔵文化財調査報告書 第108集 1991
38 国立歴史民族博物館編『日本出土の貿易陶磁 西日本編3』 1993
39 大宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡XV―陶磁器分類編―』 2000
40 宮崎県教育委員会編『山内石塔群』 1984
41 鹿児島大学総合研究博物館『ニュースレター』№2 2001
42 吉松町教育委員会『七ツ谷遺跡』吉松町埋蔵文化財発掘調査報告書（4） 1999

図　　版

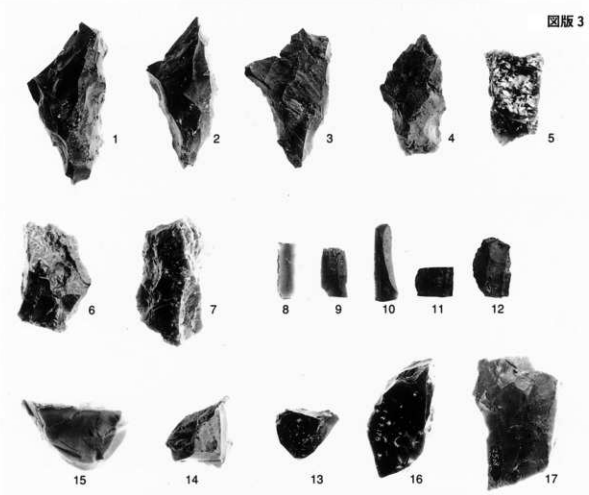
丘陵部の調査風景

丘陵部（瀬戸口）の土層

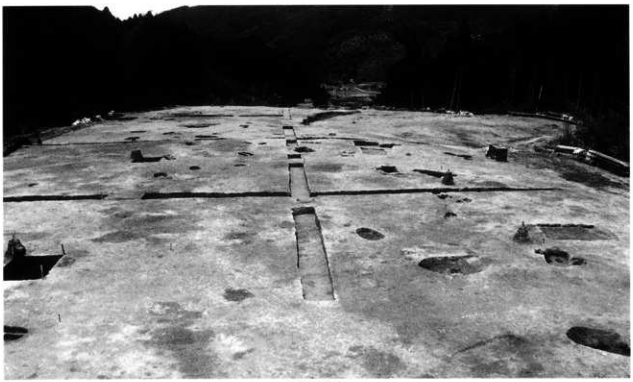
図版 2

丘陵部の調査風景

図版 3

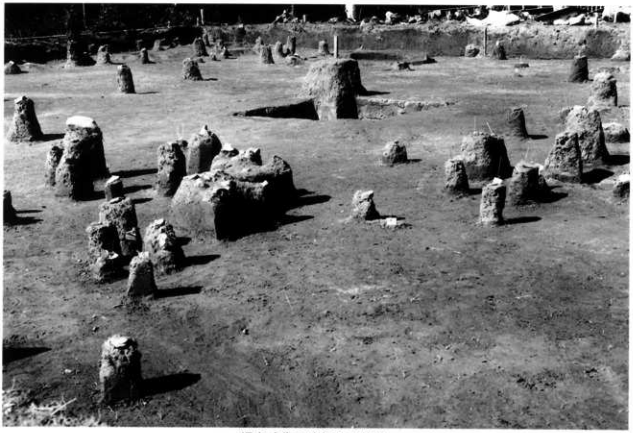


旧石器時代の石器



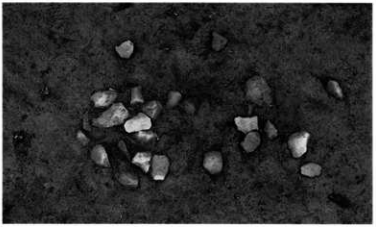
調査状況

土坑検出状況



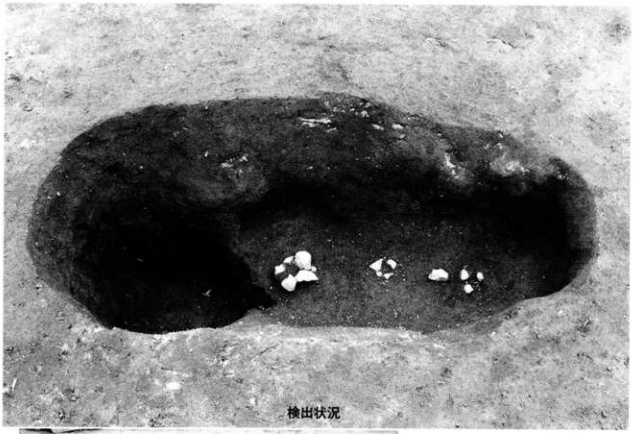
縄文時代の遺物出土状況

2号集石



3号集石

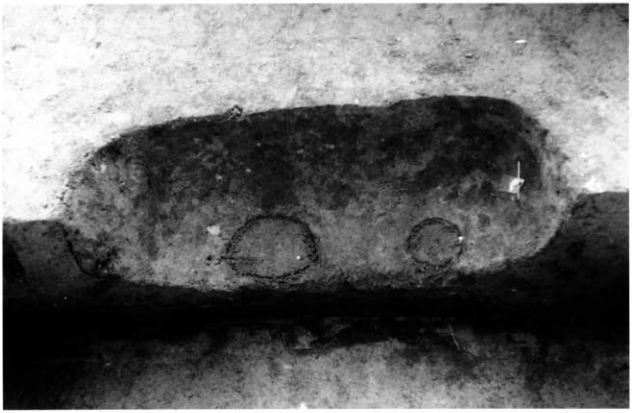
集石1～4号



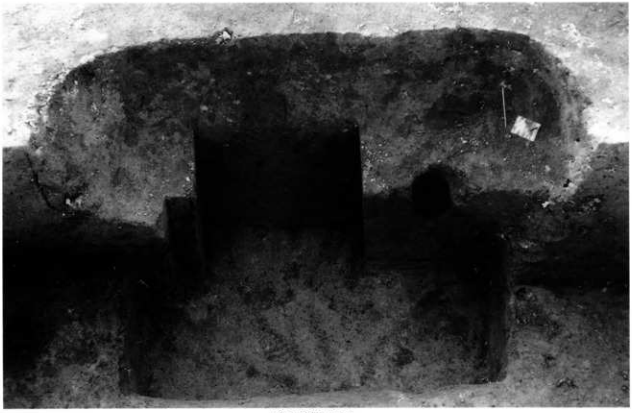
検出状況

底面ピットの断ち切り

1 号陥し穴



検出状況

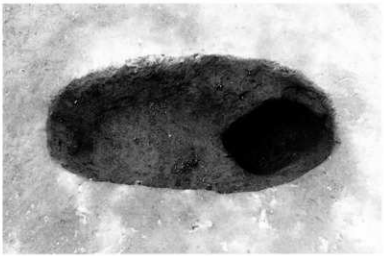


底面断ち切り

2 号陥し穴状遺構

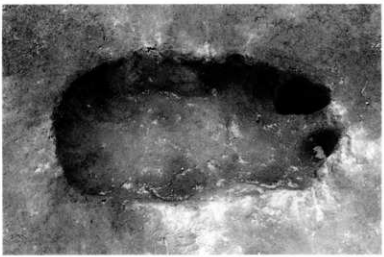
検出状況

3 号陥し穴状遺構

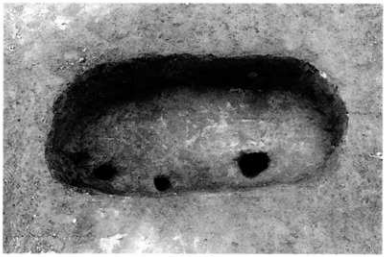


2 号土坑

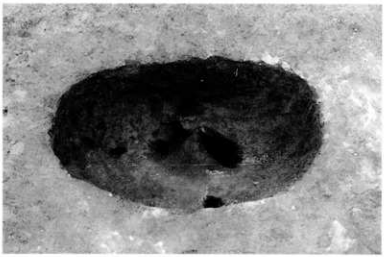
3 号土坑



5 号土坑

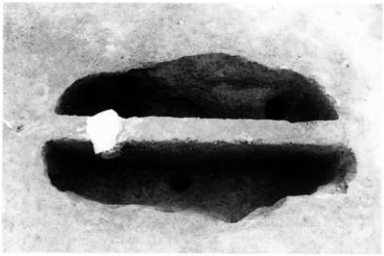


7号土坑

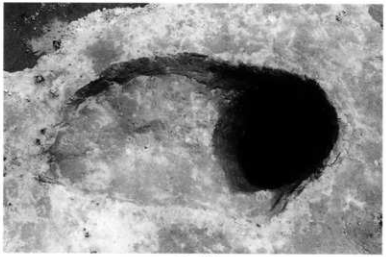


8号土坑

9号土坑



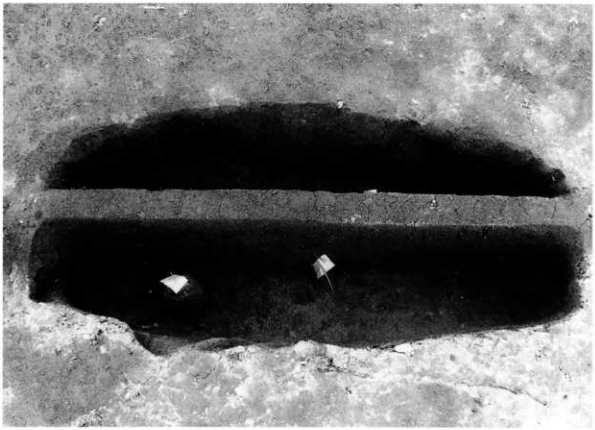
11号土坑



15号土坑

22号土坑

24号土坑



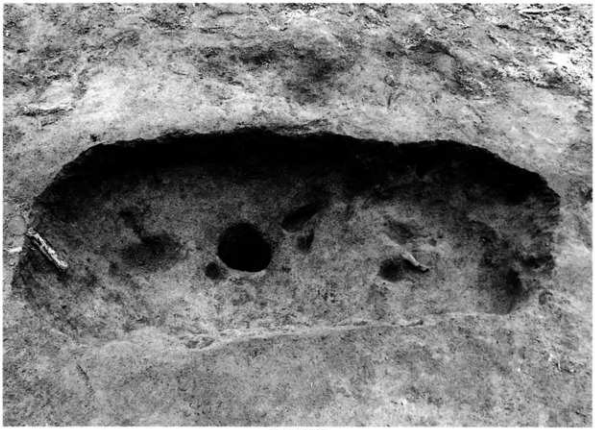
25号土坑

27号土坑

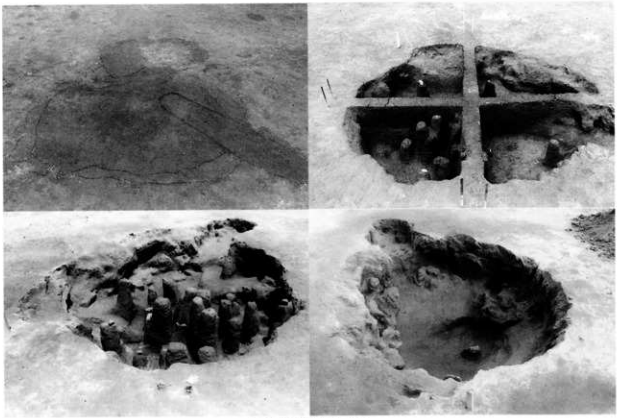
28号土坑

29号土坑

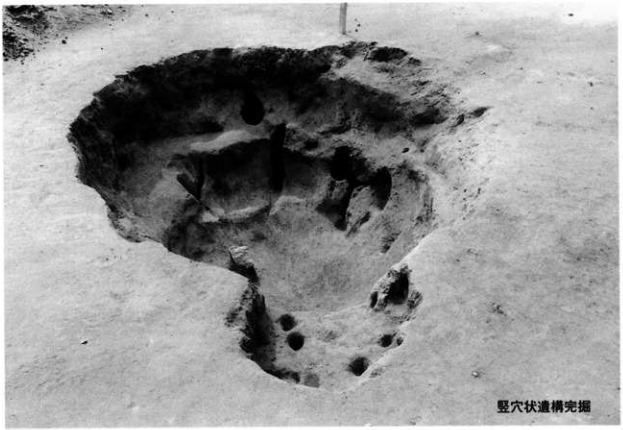
31号土坑



32号土坑



竪穴状遺構検出状況



竪穴状遺構

石斧集積遺構（検出面）

石斧集積遺構（内部）